右權中納言源朝臣基綱宣、奉　勅齋王月日擬退宮皈京宜仰彼國以白木、令造儲件輿等、其裝束資具、同以調(衍)備者、緩國宜承知、依宜行之、期日在近、不得緩怠、

嘉承二年十二月四日　　右大史　紀朝臣

中辨藤原朝臣

自餘官符宣旨、准此不具注之、

五色薄絕各伍尺、下大纔、木綿大拾兩、麻大伍兩、調布伍段、鐵人形十枚、米壹斗、下宮內、海藻拾斤、下宮內、鮑堅魚各五升、腊一斗(壹イ)、鮨一斗(鮨イ)、坏拾口、瓶伍口、苔伍口、下神祇官、酒一斗(壹イ)、下宮內、

右伊勢齋王皈京路次、所々御被料、神祇官所請如件、

嘉承二年十二月四日　　左中辨藤原朝臣奉

權中納言源朝臣基綱宣、宜宛之、

右【朝野群載】に出る、

度會郡

○錦末國舊案

使等

言上、錦末國訴申、二見鄉大湊東松原浦濱田代葦原、今田、爲一見御厨所刀佳人等令押作、而不辨濟所當物、無謂上松原燒掃、三ヶ年間大松五本伐取不當子細狀、末國出對文

一枚、長德三年九月廿九日、本領主二見鄉刀禰高宮御監燒大宮宮司行事從七位上眼連福時、免與干僧長忠大德空閑地文云、謹請申空閑地監江葦原、爲披發之事、在度會郡二見鄉刀禰高宮御監燒大神宮司行事從七位上眼連福持(時カ)、宇濱大浦者、四至東限江松原、南限同松原曾、西限大河、北限濱海、右狀子細云々具也、件地主二見鄉刀禰高宮御鹽燒物忌從七位上眼連福時在判、件地請事實也、仍加署證、刀禰件地被免事實也、在判者、

一枚、長久二年九月十三日、同福時之放券于同長忠大德文云、定永地沽進治田立券文事、合壹處之中奧參段、已下欠、

○沙彌心覺舊案

分充小財物等事、

合

一男豐受大神宮權禰宜度會神主雅平給物正家貳處、

一處在箕曲鄉河邊村立屋四宇、

一宇三間四面板屋、一宇五間三面板屋、

一宇三間一面板屋、一宇丸木分石、

自餘略之、

二男同宮禰宜度會神主雅賴給物、

正家壹處、

在繼橋鄉池町村立屋貳宇、

一宇五間四面板屋、一宇三間板屋、

件二宇今正家也、但庄上命(イ)後可領知也、

右少財物、去應德三年二月十日分給雅平雅賴等已了、今雖不可改彼文、依有雅平神主申事、愁所改也、件分財之內、慮外有窄籠者、同心可致沙汰也、彼從者等是正戶口、幷故親母　口也、而任二親御意趣、混合兩方財物、謀民等普分充男女舍弟等之日、留置嫡分民子孫等也、此內年少者不載交名、各付文依可領也、又箕曲池田兩所庄地者、先祖相傳所領也、代々支配之處口代荒所、頗散在彼四至內也、件地兩人各等分可領知也、仍書處分文貳通、一通給雅賴神主、各任分給文、可領知之狀如件、

天永元年閏七月十三日　　沙彌心覺

筆取之

豐受大神宮權禰宜權大內人度會在判

件物等、去應德三年二月十日被處分已了、而改其文令分行之旨具也、抑件財物雖有所々、本領主入道當鄉之人也、者依被觸加證署在地繼橋鄉刀禰如件、

豐受大神宮官符權禰宜度會神主在判

郡判　到來同年八月三日

改定處分文明白也、鄉長宜承知、任改定分給之旨可令進退領掌之狀、與判如件、在判

大領外從五位下行兼政所兄部新宿家禰判

權大領新家連　少領新家連　主政新家

檢校新家連

○某下文

下檢非違使奉眞、

可早致沙汰權禰宜度會神主貞房行近同氏女等申、繼橋鄉黑瀨村池田庄四至內、新開田畠等事、

右當庄新開田畠等事、貞房等稱龜鏡所備進之應德三年康時處分狀者、愍雖有正文之號、有奧無端之間、頗爲瑕瑾狀之上、萬壽狀以下、併以敵方帶之古案備潤色之條、似無相傳之由來歟、而文尙文賢以下輩、捧天永元年閏七月十三日心覺康時法名處分狀、於應德文者、爲毀破狀之趣憤申之條、叶理致之間、可令文尙等知行之由、去德治年中雖加下知、彼萬壽狀已符合延長四年狀之四至、非無子細、次如天永元年心覺處分狀者、箕曲池田兩所庄地者、先祖相傳所領也、代々支配之殘田代荒所、頗散在彼四至內也、件地兩人各等分可領知也、仍書處分文二通、一通給雅平神主、一通給雅賴神主、各任分

給文可領知云々、應德狀與旨趣無相違歟、雖載改定之詞、更無違變之文哉、此外條々雖似有儀、相論之肝心只有應德天永狀之大綱歟、就中件天永元年閏七月十二日狀正文、貞房等所帶之上者、以敵方狀雖謂備潤色歟、

○仁平元年舊案

充行少財物等事、

二男權禰宜忠滿神主得分、

治田貳段、在繼橋鄉十二條十九、

大山里廿九、兩坪內字由津田者、

自餘不注之、

右狀云々具也、

仁平元年十月一日

○常明寺僧舊案

定永地相博渡畠地一段事、

在百八十步者、山田村曾禰北畠光里作、百八十步、同村

武則居住畠替畠地一段、在箕田鄉字上邊畠、

右件畠地、依便宜相副次第手繼文、於敢樂子所相博渡也但於上分麥者、付上邊畠可究濟、仍爲後代替文如件、

仁平元年十二月十一日　常明寺僧

○度會永定讓文

永定一女子度會毗妙子得分讓渡屋地事、

存宇河邊當時居住畠地一處者、

立五間四面、寢舍一宇、

副渡親父一禰宜自筆假名讓文、但在河邊、可令尋取也、

右件居住畠地、幷寢舍一宇、殊依有所　永定氏子得分所讓渡也、若至于末代雖不慮之爭論出來、全不可令承引和與、一子之物無悔返法之故也、仍明錄子細所注申也、兼又於故相可大夫口入神領、口入料所當物等者、併同所讓進也、但彼起請之文等、皆以有河邊、同可令尋取也、尙以雖後代不可相違之狀、起請如件、

壽永元年十二月十九日

豐受大神宮權禰宜從四位下度會神主在判

相知わたらひのなりみこ

○藤原盛宗舊案

永讓渡彌陀寺敷地一段事、

在度會郡湯田鄉下粟野村字桑原垣內者、

四至　東限中垣、南限同地也、先祖時施入常隆、
寺地破內、西限立律、北限同類地破目、

直米一斛、八丈絹四丈請納了、

右件畠地者盛宗先祖相傳之旋入地也、而承繼聲務執行專無他妨、爰爲致彼時節之勤、永所讓渡於度會光包如件、雖可本文書相副、依遠所置、仍爲後代新奈文以解、

元曆貳年五月三日　藤原

○宇治末常舊案

重成當給物、

一處　貳丈田、

右件田畠等所成常處分也、先任狀可致勤也、仍爲後代重注如件、

延應二年三月廿一日　宇治末常在判

家女藤原氏子在判

○神麻續氏舊案

神麻續貞清重行弘重等謹辨申、

且於有限年貢者、欲令辨濟麻續鄉常吉戶田畠、不顧以前沙汰次第、抑留四箇年所當由、法常住院別當律師審圓被申下御下知條、無術子細事、

副進

一通　前々院宣幷御施行案、乾元二年蓮福寺別當萬壽丸申下之、

一通　御下知案、法常住院別當律師審圓申下之、

右麻續鄉常吉田畠之給主貞清等、年來進退耕作、有限於年貢者、辨濟法常住院之來處、先年之比號蓮福寺別當萬壽丸、度々　綸旨　院宣、於地本常吉田畠者、件郡郡司打　蓮福寺郡司、幷總官御方御使盛親判官、帶綸旨　院宣幷御施行等、被致責之間、雖相觸於法常住院、先爲　勅定之上、可爲後訴之由依被申、不力及蓮福寺令辨濟畢、自去年至今年者、於總官御方沙汰、法常住院爲得理之由、申川判官以御下知案文被告知之間、有限年貢等、成去冬勘定、悉辨濟畢、不顧此等次第、四ヶ年所當未濟之由、被申下御下知之條、難堪次第也、御下知上者、所詮被後年者有限年貢、法常住院爲令辨濟、粗言上如件、

德治二年正月廿三日

三郎案主四郎長等幷子息

申云、彼麻續鄉常吉戶田畠者、此四五年之間、號蓮福寺領、萬壽丸申付數ヶ度　院宣幷御施行檢非違使成親、以人勢被成寄責之間、法常住院方雖度度相觸、爲　院宣幷御施行上者、先可應　院宣之由被申之間、迄去々年者、悉蓮福寺令辨濟、返書分明也、自去年又帶御下知、御使被主告知沙汰之間、有限年貢成勘定、任前々辨濟之、仍用途貳貫百文令辨濟、迄至今年正月節乃餅無解怠者也、此等次第定使悉所令存知之、

○僧帳慶券文

定永財沽渡進畠地新立券文事、

合佰捌拾步者、

在度會郡繼橋鄉內字河原村、

四至　東限九卽大夫領、南限中垣、
西限圓正房領、北限中垣國光居住、

直錢一貫染百文請收畢、

右件畠地、自内宮權禰宜荒木田神主常利手、買得進退領掌之處、依有直物要、相副彼文等、定永財所沽渡進於外宮權禰宜度會神主廣光也、若有牢籠者、可令返進本直也、仍爲後代新立券文以辭（解カ）、

寛喜貳年六月廿六日　　僧帳慶在判

○延應元年券文

卸渡小俣御厨内荒田代新立券文事、

段者、

郡湯田郷小俣御園内字上窪、

四至、東限久留、南限清近後家領、西限溝、北限久留、

直錢百文納畢、（花押）

右件小俣御園者、先祖相傳所領也、進退領知之間、全無他煩、爰直依有要用、限上件直物、沽卸渡處於大中臣熊丸如件、但於次第　文者、依爲連券不副渡、相副案文沽卸渡處也、仍爲後代新立券文如件、

延應元年九月　　預

領主大中臣氏（花押）

按、永定讓文以下、並神宮古記錄に出、

○僧定惠券文

謹辭　定永財沽渡進畠地新立券文事、

合貳段、内一段者、付西南方也、

直錢陸貫伍百文請納畢、（花押）

右件畠地、去寶治元年八月十六日、自船江五禰宜殿御手、限直錢捌貫肆佰文、相副父船江廳御處分文、幷代々次第證文等買得給後、知行領掌之間、敢無他妨、而依有直要用、限上件直于内人橘久俊所沽渡也、雖須代々次第文書等副渡、依有殘地今一二段、當時不副渡於代々次第證文、八枚者以後日可慥書渡也、雖至于末代、不可有他妨、仍爲後代新立券文如件、以辭、

弘安元年戊寅三月十六日　　領主僧定慶（花押）

嫡男恒守

○正安二年舊案

正安二年二月廿六日、於宇治郷上村和屋（田イ）神田

師等走上村郷人等、先日弓會所課之風流也云々、郷々風流炳焉也、不能委注、

此時尾崎村風流之兵士等之鎧表帶、般若藏御經箱緒、悉取用之間、散々切損剩一筋紛失也、長祐長遍等之所行也、此條不令存知之間、被取盜人歟之由成疑殆、遍相尋之處、長遍申云、彼風流之時表帶闕如之間、取用之了、未奉返付之、不申子細、恐入テ取出之了、狼藉之至、非言語之所覃者歟、委旨不記之、

德治三年正月著到、長祐（祐カ）教承之、二月著到自奥坊書改置之、旬十日長祐一身轉讀之甲見彼著到、同十日（甲冑カ）有院宣次第施行、引率數百人徒黨、帶　著冑、擬令運渡經　壞　船若藏之、剩　帶院宣西薗寺殿御教書等、令付檢非違使　神宮使、一志三郎大夫云々、こゝ（イナシ）下不知實名、

○大内人弘清舊案

大神宮禰宜正四位上荒木田神主判

しはたの神田、内宮月讀宮いたはり料米二升、取收之狀如件、

應長元年十二月廿五日　　大内人弘清

○建武年間綸旨

伊勢國二見御厨所司國有申、筑前八郎跡事、奏聞處、方々妨任先例、可致其沙汰由、可被下知神人等者、天氣如此、仍執達如件、

三月九日　　左中辨判

祭主三位殿（花押）

○明德三年券文

地新立券文章（事カ）、

合畠地貳枚者、

在度會郡中島御薗内、先例

直錢一貫陸佰文慥請納畢、

四至、東限類地、南限杭、西限類地、北限他領、

右件畠地者、自親父用正之御手、給處分之後、進退領掌無相違處、今直依有急用、上件限直錢所奉沽願于二俣住山幡六郎殿實正明白也、置本文書者、爲類地之間不相副者也、若亦彼畠地伍ヶ年間煩出來者、不勘地利慥本錢可返進者也、此上者更々不可有異儀、仍爲後日龜鏡、新立券文如件、以辭、

明德三年壬申八月廿二日　　權禰宜度會神主用長在判

下權禰宜盛光神主如狀者、前々總官之時經沙汰、去延元四年成敗之事歟、早任其旨致沙汰、令催辨應輸之修理料米之（也カ）、

一禰宜　御判

○長松丸舊案

定永財沽渡進屋敷畠事、

合一段者、

在箕曲郷内吹上寺前、

直錢伍貫文請取畢、

右件屋敷畠者、以去明德四年十月十三日、自道俊政所殿御手、買得知行之處無妨、雖然依有急用、限上件直錢、相副證文、永所沽渡進于山田大路御炊大夫殿實正

也、若此地拾ケ年之內有煩事者、不遂地利勘定、可返進本直伍貫文錢貨矣、仍爲後日沽券狀如件、

應永二年乙亥四月五日　　宇長松丸　在判

○應永廿四年券文

なかくうりわたし進田地の事、

合貳杖者、さひ所みのわのかうふるゑ
のむかひ、河よりみなみ、

四方のさかい、ふんしつの記に見えたり、

あたいのせに參貫五百文、うけとり畢、

右作の田地は、代々さうてんきうりゆうたうきゆう、さうゐなしといへとも、よう〳〵あるによりて、上件のあたいに限り、もんしよふんしつの記の正文をあいそへて、十りん寺のし內たんふく大姉のよせ地の御れうに、なかくうりいたし進ところ實正なり、まつ代にいたるといふとも、いらんあるべからず、もしこの地十ケ年のうちにはつらい候はゞ、本ちゝ（ママ）をかへし進へし、何後日のためにうりけん狀如件、

おうゑい廿四年丁酉二月廿七日

右以上神宮古記錄に出る、

○大中臣其朝臣舊案

司進納荷前御綿絹等事、

絹三疋　一疋當國上、一疋三河之中、神戸、一疋遠江神戸、

綿五十七屯、　遠江神戸、

糸三勾、　尾張神戸、

莞妙一端、　伊賀神戸、

木綿二斤、　見進、

麻五斤、　黑田鄉、下符

油五升、　三升中萬（ママ）鄉下符、二升三宅鄉下符、

鹽六石三斗、　二見伊介下符

右當年料依例、進納於大神宮如件、

年號十月一日　　少司

權大司

大司大中臣朝臣判

○莞木田神主廳宣

廳宣　宇治鄉刀禰等、

可早任先例、令修治御常供田堰溝事、

右件堰溝任先例、可令修治之狀所宣所件、以宣、

年號正月一日

禰宜莞木田神主

按、以下建久三年注進、大神宮年中行事に出る、

○後陽成帝綸旨

伊勢內宮外宮正遷宮前後相論之事、任往昔之神蹤、內宮理運之趣被聞食畢、殊更殿下被窺　叡慮申處、尤內宮可爲理運旨、被申入之由、早得其意、遷宮之事、可被下知之狀如件、

天正十三年後八月廿三日　　左中將判

四位史殿

○豐太閤舊案

今度伊勢內宮外宮、就正遷宮前後相論之義、窺叡慮候處、被任往昔之神蹤、內宮理運之趣、被成綸旨上、於末代不可在相違之狀如件、

天正十三年壬八月日　　關白判

內宮社家中

○傳奏柳原家副翰

今度伊勢內宮外宮、就正遷宮前後相論之儀、窺叡慮候處、被任往昔之神蹤、內宮理運之趣、綸旨幷關白被加下知、可爲內宮遷御先之旨、末代不可在相違之狀如件、

天正十三年壬八月廿三日　　長官

禰宜中

按、神宮寶藏に藏む、

三國地志卷之九十五　終

三國地志卷之九十六

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　未勘

神祇

○火雷神　【清和實錄】曰、貞觀八年冬十月廿四日、乙未、授伊勢國無位火雷神從五位下、

○簀乃波神　【清和實錄】曰、貞觀五年十月廿九日、戊子、授伊勢國正六位上簀乃波神從五位下、

○馬立大明神　南都二月堂神名曰、伊勢馬立大明神、

○分大明神　南都二月堂神名曰、伊勢分大明神、

山川

○阿曾山　【東鑑】曰、寛元二年伊勢國阿曾山、並熊野山惡黨蜂起之間、今日有臨時評定、被經御沙汰云々、

○福山　【山家集】曰、いせのにしふく山と申所に侍りけるに、庵の梅かうしはくにをひけるを、

柴の庵によな〳〵梅のにほひきて、やさしきかたも有住居哉

○盡生庄村名　【古今著聞集】曰、仁和の頃伊勢の國盡生庄より百姓成ける法師のぼりて、五條坊門とみの小路に屋どりて居たりけり、

○招坂　【夫木集】曰、題不知　聽申まれき　さか、伊勢、よみ人しらず

まねきさかまねくを誰ととひつれは、霧のはれまのおはな成ける

○針川　【躬恒家集】曰、延喜十七年、伊勢のさい宮の御れうに、くに〳〵の名あるところ〳〵をかゝせ給へる御屏風のうためしありしかは、はりかは

加ら衣ぬふはりかはの青柳の、いとよりかくる春はみにこん

【夫木集】曰、家はりかは、いせ、

○濯河　【藻鹽草】曰、濯河、伊勢、

哀てふ人もなき世に名にしおはゝ身をすゝき川清くなかれよ

○宮野　【夫木集】曰、宮野、伊勢國、

神風やみやのゝ原のかるかやをかられてのみは通んものかは　俊成

○薄野　【夫木集】曰、題不知、すゝきの、伊勢、

はつかにもひとをみまくのすゝきのゝほにいでゝいまそこひしかりける　よみ人しらず

薄のゝみとりの末の初尾花なひくにつけてよる方もなし　土御門院

梵刹

○正法寺　【本朝高僧傳】曰、京兆東福寺沙門心凉、字檀溪、因州人也、隨侍虎關和尚而承印記、開勢之正法寺、接引海衆、後住東福、歷年間休龍眠菴、

○神應寺　【本朝高僧傳】曰、京兆建仁寺沙門彦洞、宇明叟、參蘭洲芳禪師、傳大事因緣、初出世勢州神應、次住播之法雲、後興洛之建仁、【延寶傳燈錄】同、

○正興寺　【本朝高僧傳】曰、京兆南禪寺沙門清播、字心田、別號春耕云々、年已四十八、亟相義持源公下釣帖、出世勢州正興寺、嗣香獻柏庭居之、十年猶如一日、將軍義教源公命移洛之窖疃、隔數年薦建仁南禪、【延寶傳燈錄】又同、

○光讃寺　【本朝高僧傳】曰、京兆妙心寺沙門宗舜、號日峰、姓藤、城州嵯峨縣人云々、曾在勢州光讃寺度夏、

○大義寺　【延寶傳燈錄】曰、京兆東福瑞嵓義麟禪師、初開勢之大義、移參州長興、

○定額寺　【續日本紀】曰、聖武天皇天平勝寶元年秋七月乙巳、定諸寺墾田地云々、自餘定額寺、寺別一百町、【續日本後紀】曰、仁明天皇承和八年五月己丑、勅、修福滅罪、佛道是先、傳法興敎、人倫爲本、如聞、諸國定額寺堂舍破壞、佛經曝露、三綱檀越、無心修理、頃年水旱不調、疫癘間發、靜言其由、恐緣彼咎宜重下知五畿內七道諸國、修理莊嚴定額寺堂舍、並佛像經論、今須每寺可修理之程、付朝集使言上、習常不革、並處重科、

同十年春正月丁酉、令諸國國分二寺、並定額寺、名神等寺、講仁王般若經、

【類聚三代格】曰、

太政官符

應令國分幷定額寺僧勤六時修行事、

右被右大臣宣稱先帝創造國分二寺、分號諸國滅罪之寺、擇芯芻僧尼、殊設嚫施具足之法、又於定額寺、雖建立有主、本願異趣、而擁護國家、豈爲分別、此皆救世利物、傳于不朽者也、是以一切刹土、常轉法輪、百千人、天俱蒙解脫、善神滿國、惡龍出境、而頃年講師之擧、不允格意、國分之僧、還多放逸、福田荒而不耕、農畝競而訟利、鐘聲絶響、六時無聽、香火止烟、三葉彌倍、諸國滅罪之理、不可爲然、拔若與樂之誠、必須勤愼、宜重告知講讀師六時修行、同作定額寺相共撿察、若有邀行不脫カ者、錄名言上、

仁壽三年六月廿五日

【延喜玄蕃式】曰、凡諸寺燈油、諸國國分二寺、幷諸定額寺別、稻一千束已下、五百束已上、出擧以息利買用之、長夜二合、短夜一合五勺、八月九月十月十一月十二月正月爲長夜、二月三月四月五月六月七月爲短夜、

年別附稅帳、使申送官下寮勘會、

○龍泉寺　【異本親長日記】曰、文明四年七月三日、周堯上人紅瓜十籠送之、勢州龍泉寺御卷數、今日迄而有御返事、即遣使僧云々、

土產

○朱沙　雄黃　【續日本紀】曰、文武天皇三年九月乙酉、令伊勢國獻朱沙雄黃、

○牧駒犢　【續日本紀】曰、文武天皇慶雲四年三月甲子、給鐵印于伊勢國印牧駒犢、【令義解云】、凡駒犢至二歲校印、

【延喜左馬式】曰、凡國飼御馬者、伊勢國十疋、左寮、每年預前五月五日節、差專當國司率進、

○白茅鴾　【天武紀】曰、十年八月丁卯朝壬午、伊勢國貢白茅鴾【釋日本紀】引私記云、狂鳥鵜鴾郭公鳴鴾屬也、似鷹而白也、兼方案之云、伊比登與者梟異名也、承元四年、神宮奏此鳥事、有軒廊御卜云々、

【皇極紀】云、休留、茅鴟也、

○白鍍　【續日本紀】曰、文武天皇二年十一月辛酉、伊勢國獻白鍍、

○鯛　【新申樂記】曰、伊勢鯛、

○櫻貝　【建保三年名所百首】曰、伊勢海

伊勢の海玉よる浪の櫻貝、かひあるうらの春のいろ哉　權中納言定家

按、此歌【拾遺愚草】にも入れり、櫻貝は小蛤なり、殻薄く色淡紅にして、櫻花一葩の如し、いづれの海にも出べけれども、古より伊勢海に出るは、其色のうるはしき、他にすぐれたるにや、わきて賞するとなん、本國いづれの浦を詠ずることを詳にせず、故にこゝにあり、

○小貝　【西行家集】曰、伊勢よりこがひをひろいて、はこに入つゝ見こめて、皇太后太夫のつぼねへつかはすとて、かきつけ侍ける、

うら島のこはなに物と人とはゝあけてかひある箱とこたへよ

【元輔家集】曰、中つかさがある所にまかりたりしに、かひをこにいれて侍しに、

浪間より見る貝拾ふ伊勢の海のいつれの方の名殘なるらん

○馬蛤　【袖中抄】曰、あまのまてかた、

いせの海のあまのまてかたいとたなみなからへにける身をそうらむる

顯昭云、あまのまてかたとは、あまのまてと云かひつものとること也、

按、馬蛤潟は、馬蛤は干潟にとるものなれば、かくは云へるなるべし、すべて貝殻に二見を以名産とすれども小貝の類何れの浦と限るべきにあらざれば、古歌ののこるを以こゝに載するのみ、

製造附

○眞床覆衾　【本朝月令】曰、正月內侍所御供、神祇伯大副引卜部中臣卜部等、候內侍所都外、主水司掃部寮自舊臘大盡夜調松明、除殿宇儲宮裏之御裝束、眞床覆衾者、每年自伊勢國獻之、獻御供則雅樂寮奏淸樂、大歌所奏神樂朝倉駒反等、高砂高麗笛桂男三調于、內膳司頭以下着淨衣奉之、內侍女官經叡覽則供神膳、此事推古御宇始之、

○馬革　【淸和實錄】曰、貞觀八年五月十九日壬戌、太政官處分、停伊勢、越前、加賀、越中、丹波、丹後、因幡、播磨、備中等九國年貢馬革百張、兵造司修理年斷甲百領、令諸國貢馬革二百張、以充彼料、貞觀五年減修理五十領、仍半折輸焉、

氏族

○品遲部君　【古事記】曰、日子坐（マスノ）王之子、幷十一王、故（アケタツルキミ）兄大俣王子曙立王者、伊勢之品遲部君、

按、品遲部は、多氣佐那造と同祖なり、

○物部伊勢連父根　【繼體紀】曰、二十三年春三月、物部伊勢連父根（カリキシテケ）吉士老、

按、神名帳に壹志飯高兩郡に物部神社あり、是等の郡の人乎、

○伊勢王三國公麻呂　【孝德紀】曰、白雉元年二月庚午朔甲申、伊勢王三國、

○公麻呂　【齊明紀】曰、七年六月伊勢王薨、

○伊勢王　【天智紀】曰、七年六月、伊勢王與其弟王接日而薨、未詳官位、

○淨大肆伊勢王　【天武紀】曰、十一年冬十月癸酉朔己丑伊勢王等亦于、

○同于東國、因以賜衣袴、　又云、十四年冬十月癸酉朔己丑、伊勢王等亦向于、

○東國、因以賜衣袴、　按、此文段重出、若くは錯簡歟、又曰、朱鳥元年六月己巳朔甲申、遣伊勢王及官人等於飛鳥寺、九月戊戌朔甲子、肇進奠卽誄之、中略、次淨大肆伊勢王誄諸王事、

【持統紀】曰、二年八月丁亥朔丁酉、命淨大肆伊勢王奉宣葬儀、

○金作部安得　【續日本紀】曰、元正天皇養老六年春三月辛亥、伊勢國金作部牟良忍漢人安得、

○伊勢直大津　○中臣伊勢連　○中臣伊勢朝臣　【續日本紀】曰、聖武天皇天平十九年冬十月丙辰、伊勢國人從六位上伊勢直大津等七人、賜中臣伊勢、

○連姓　又曰、稱德天皇天平神護二年十二月癸卯、外從五位下中臣伊勢連大津、賜姓伊勢朝臣、

○中原友之　正應四年大間曰、能登國權大目從七位上中原朝臣友之（停春宮權太夫藤原朝臣去年給、同十月改任伊勢國中原友之○○○所住、）

○橫田備中守　○橫田十郎兵衛　【甲陽軍鑑】曰、足輕衆には橫田備中守、一代之內手疵卅一ヶ所かうふり、數度の走廻故、殘る卅騎足輕百、御陣の刻は大形甘利備前に被指添、是は信虎公の御代より信玄公へ被石使、武邊いたす御父子の御證文三十四取て、持知行三千貫被下、國は伊勢衆也、又曰、十郎兵衛は、大岡の原美濃守が惣領の子なるを、美濃には子を多とて、橫田備中おのこ子をもたざるにより、聟にして跡をつがせ、原彦十郎を橫田十郎兵衛に仕り、跡をゆづり候、本國は伊勢國宰人、信虎公御代より足輕大將仕り、武篇數度のほまれを國にひゞき候、やう父の橫田備中にも、十郎兵衛おとらぬ足輕大將也、

○北地五郎左衛門　【甲陽軍鑑】曰、山縣三郎兵衛同心北地と申伊勢宰人、身上十六貫取者也、

女流

○伊勢大津女　【日本後紀】曰、從五位下侍從藤原朝臣緒嗣者、贈太政大臣一位百河長子、母從三位伊勢大津女、

僧侶

○房忠　【三會定一記】曰、興福寺房忠、伊勢國人、元慶六年講師、

○增恭　【三會定一記】曰、興福寺增恭、伊勢國人、延喜六年講師、

○林懷　【本朝高僧傳】曰、和州興福寺沙門林懷、勢州人云々、治安元年三月二十八日卒、

○敎圓　【本朝高僧傳】曰、江州延曆寺沙門敎圓、勢州大守藤孝忠之次子也云々、永承二年六月十日順世、年六十九矣、

○明全　【本朝高僧傳】曰、京兆建仁寺沙門明全、俗姓蘇氏、勢州人也、依附明菴、棄陶滋久、遂傳心要云々、貞應二年、誘永平道元、帆海入宋云々、

○平源　【本朝高僧傳】曰、和州興福寺沙門平源、勢州人受業於金勝寺願安、體裁唯識懷抱木叉、延長元年坐維摩會云々、

○長甫　【本朝高僧傳】曰、日州大光寺沙門長甫、宇嶽翁勢州中原人、參乾峰和尙、機語投契云々、延寶傳燈錄又同、

○圓一　【本朝高僧傳】曰、釋圓一、勢州人、歷遊泉涌戒光、戒學勤苦、

○尊空　【本朝高僧傳】曰、釋尊空、號禪林、伊勢人、從照師受息慈戒幹緣、圖十六羅漢像置金山院、

三國地志卷之九十六　終

三國地志卷之九十七

伊州司城　藤堂元甫修

志摩國

舊案

皇太神宮御領志摩國伊雜御浦惣撿校左衛尉物部泰實解申請本宮廳議事、

請殊經上奏停止新儀結構違亂、專供祭御贄備、被令奉行天長地久御願、爲遠　勅罪人岩村部成秀等、背往昔以後行來例、不恐　尊神冥鑑、付御浦緣邊陸地、可進止御海旨、令結構新儀敷網、語集熊野山已下島々漁人等、擬押漁御浦內供祭魚鱗、違例不信、神慮難測子細狀、右謹考案內、當御浦者爲伊雜神戶最中、自神之昔、至人世之今、爲　皇太神宮供祭御贄之料所、某以南以北三十八所、靈神垂玄跡貴御坐、子細異他嚴重尤勝、然間彼緣邊付陸地、或有各別神領、或雖有甲乙人領、往昔以來無進止、御浦之例、專供祭御贄漁進、所被奉祈　天長地久御願也、矣後成秀等乍存知此等之子細、付陸地成進止之企不憚冥鑒、構新儀敷網、語集熊野山已下島々漁人等、擬押漁御浦內供祭魚鱗之條、違例不信　神慮雖測、若御沙汰及豫儀、不被停止新儀者、御浦緣邊甲乙人領、面面成自專企、供祭御贄之備、定無合期之勤歟、神宮大難何事如之、然則早經上奏、停止御浦內新儀違亂、任往昔以後行來之例、專供祭御贄浦、爲被令奉祈　天長地久之御願矣、言上如件、以解、

正和四年十一月日伊雜御浦惣檢校左衛門尉物部泰寶皇太神宮御領志摩本宮廳裁事

請殊經　上奏罪節靜謐神領被全供祭備、爲違勅犯人岩村部成秀清長等、違背本所成敗、相語熊野惡黨等、亂妨當御浦所務、致惡行狼藉間、就神宮訴訟、雖被下數ケ度　院宣、依不叙用、云々

先御代、云々當御代、被放武家、及斷罪御沙汰申間、伊勢志摩國等可爲關東御沙汰旨、就新法自六波羅殿有御注進上者、急可被遂斷罪節子細狀、

副進

一卷本所下知廳宣、嘉元德治雜有敵通、事繁多被備進之、

一通　院宣正和二年二月廿四日、可令遵補泰實事、

一通　院宣同年四月十四日、停止濫妨、可全知行之由、可被下知泰實事、

一通　院宣同年十二月十一日、停止濫妨、可令知行之由、可社下知泰實事、

一通　院宣此事度々雜被仰下、成秀以下輩不叙用勅裁云々、殊可糺其沙汰事、同三年四月十七日、

一通　院宣同年十二月十三日、成秀已下輩不叙用度々勅裁之條、太不天然、嚴密可社沙汰事、

一通　院宣同四年十一月三日、成秀已下輩背度々勅裁及監妨之條、不可然之由可被下知神宮事、

一通　院宣同五年五月十八日、成秀已下輩違背數ケ度勅裁、籠置熊野山惡黨、依致狼籍被放武家事、

一通　六波羅殿御教書同年六月五日、爲有其沙汰、嚴密可被召取進其身事、

○後小松帝院宣

皇太神宮志摩國多志浦、伊雜之浦、的屋美作守申上付而神領相論之事、

奏聞之處事實者太不可然、當浦は爲一圓御神領、四至堺任先例、無相違之處、國人甲乙人等任雅意、押領神領、無故取弓矢之條、無勿體次第也、所詮招罪科歟、於彼惡輩同心之輩者、可所同罪者也、若背上意猶於成違亂輩者、仰付武家、可被加退治之由、天氣所候也、悉之、以狀、

應永卅二年五月廿八日　　故中將在判

的屋美作守殿

○神宮古記錄曰、

志摩國荒島庄阿具志村國應寺雜掌慈哲謹言　上、欲早且任當寺大檀那藤內在衛門入道道妙去元弘元年三月十

八日寄進狀、且就守護御代官御書旨、寺庫知行無相違處、去月九日
御家人須田彥次郎右衛門尉、並同師房等、以寺田貳段號長田內令混領、打入下作人私宅、被搜取資財物等、無術間事、
副進
一卷　次第證文等案、
一卷　守護御代官書下案、
一卷　兵部卿親王令旨案、爲御願寺可停止甲乙人等濫妨由事、
又曰、伊勢國住尼法宗申、
欲早總官御在洛上者、任先規傍例、蒙御成敗、爲駿河國江尻住人定願、亡夫阿久志左衛門入道道妙舍弟、並阿久志島住豐後房不曰實、同道妙舍弟、等、抑留亡夫道妙令出立船四艘、入于船用途日（百カ）余貫、稱可令不沙汰渡于法宗（後家法名、）條、猛惡奸謀無比類上者、於拘留錢貨並船等者、急速被糺渡于日室、至其身者相觸在所、撿斷欲被令處罪科子細事、
右於亡父道妙者無一子、法宗同雖無子、令剃髮守忠、而日在室之內、夫妻同財之故、彼遺財之船錢貨以下、法宗可令得分之條、尤法意之所推也、爰彼豐後房等、縱雖爲道妙之舍弟、閣後室爭可致非分支配之藝（敷カ）行哉、雅意之企猛惡之至也、所詮件四艘舷頭之中、至麻生浦住人刑部大郎者、雖令死去、於泊浦小里住兵衛太郎、（道妙姪聟、）阿久志住九郎三郎、（豐後房聟、）同住松法師三郎等者、令現存之上者、召寄彼船頭等、被糺明之時、云錢貨云船箸、爲道妙遺物之條、不可有其隱者也、然早至豐後房等者、相觸在所之撿斷、被令處罪科、於四艘之船並千余貫之錢貨者、急速被糺渡于後室、欲訪道妙之後生菩提矣、仍粗言上如件、
建武四年六月日

○又曰、
志摩國惡止圓應寺雜掌重言上、
欲早被經御沙汰、預御成敗、光明寺住僧惠觀船積物二百余貫文余、海賊罪科難遁間事、
副進
一通　御書下案（康永二年七月廿一日、）
右彼就惠觀之海賊事、被經一問一答御沙汰之後、○○○狀被○惠觀可及糺明御沙汰之由、令言上處、○○○無音之上者、旦任御奉書違背之扁、預御成敗、於職○任傍例、被本主糺返、至其身者爲被罪科處之、重言上如件、
康永二年八月日　（花押）

○簡禮集曰、
近江國犬上郡貳千貫餘、志摩國答志鄉七百貫、都合三千貫餘事、右全可領知、藏人依忠節、本領永不可有相違、
雖爲幼少、可抽軍忠覺悟、仍申付處也、執達如件、
文保（朱印）元年二月十八日
吉良龜松殿
按、答志鄉古昔吉良家の領知なり、

未勘

○阿古根浦【萬葉集】曰、中皇命往于紀伊溫泉之時御歌、
吾欲之野島波見世追底深伎阿胡根（アコネ）能浦乃珠曾不拾
或歌云、吾欲子島羽（トハ）見遠右撿山上憶良太夫、類聚、【歌林】曰、天皇御製云々、【歌夫木集】曰、
よしさらは思ひもたうし敷島やあこねの浦のたま〳〵
如願法師
伊勢二門極理灌頂阿古根浦口傳、住吉神詠曰、あまつ神伊勢の巽を尋ぬれはあこねの浦を君にしめつゝ下略、
【謠古抄】金札曰、伊勢の海あこねの浦、（所の名也、）
按、阿古根神口訣に、抑阿古根社と云へるは、伊勢國に常世の浪の重寄し時成初し所にして、伊弉諾尊、伊弉册尊天照大神の三柱を祀ると云ひ、又二柱三宮の圖ありと云とも正からず、亦伊勢にをいても其社地社號あるをきかず、且二色の鄉名によつて、浮橋の感通をとくものは附會と云べし、又云、阿古根の洲崎に鎭奉るとあれば恐くは本國英虞の名阿古根に起り、其すさきを云にや雅俗の說を並べあげて、後攷を俟つのみ、
○船寄　能因歌枕曰、志摩國ふなよ也、
按、名所に入れり、
○玉浪島　能因歌枕曰、志摩國たまなみの島、
按、並所在詳ならず、
○白髮部遺蹟　按、清盛紀に出、所在詳ならず、
○國分尼寺　○定額寺　○四十九院　按、並に廢趾詳ならず、

辨疑

○伊良虞島（又伊良湖崎、波賀地濱附、）【萬葉集】曰、麻績王流於伊勢國伊良虞島之時、人哀傷作歌、
打麻乎麻績王白水郎有哉射籠荷四間（イラコカシヅ）乃珠藻苅麻須
麻績王聞之感傷和歌、
空蟬之命乎惜美浪爾所濕伊良虞（イラコノシマ）能島之玉藻苅食
右案、【日本紀】曰、天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯、三品麻績王有罪流于因幡、一流伊豆島、一子流血鹿島也、是云配于伊勢國伊良虞島者、若疑後人緣歌辭而誤記乎、
又曰、幸于伊勢國時、留京柿本朝臣人麿作歌、

柿本朝臣人麿

潮左爲に五十等兒乃島邊榜船荷妹乘良六鹿荒島回乎

【山家集】曰、

いらこ崎にかつを釣にならひうきてはからの波にうかひてそよる

【歌枕名寄】曰、

長　明

鶉ふす嶺の〳〵原を朝行はいらこか崎にたつ鳴渡る

【壬二集】曰、鷹狩、

ひきすへにいらこの鷹の山かへりまた日はたかし心そら也

【山家集】曰、ふたつありけるたかの、いらこふたりすると申けるが、ひとつの鷹はとゞまりて、木のすいにかゝりて侍るとかいひけるを聞く、

すたかわたるいらこかさきをうたかひてなをきにかゝる山かへりかな

はしたかのすゝろにさてもふかさをてすへたる人のありかたのよや

【古今著聞集】曰、正上座行牧といふ弓の上手わたりける時、參河の國より熊野へわたりけるに、伊勢國いらこのわたりにて、河賊にあひけり、

按、此島は三州渥美郡に屬す、然ども今に於て鳥羽侯の領邑となるものは、蓋上古本國　隷邑にして、中古參州に屬すといへども、貢服の使利によつて、今猶其舊に仍るか、歌人往々伊勢國の島とするは、伊勢海のすさきなるを以、泛然と稱するなるべし、古人此島を歌詠するもの少からず、惟其本國をあらはすもの一二を載す、且伊良古渡りの鷹とて、富士おろしの鷹をうつことあり、本國に鷹縣の舊地名のこり、倭姫世紀に取鷲老を載す、彼島つたひにかうようふ大鳥の來ること、古よりありふれたるにや、其歌詠本國の名はみゑずといへども、鷹縣等の舊によつて、一二をこゝに存す、此地屬隷の混ずるものは、風人の泛稱に出るのみ、

○長濱　【古今集】曰、大歌所の御前、

君か代はかきりもあらしなかはまのまさこのかすはよみつくすとも

右仁和御門伊勢國之歌、○按、光孝天皇の仁和元年大嘗會、伊勢國員辨郡悠紀に預るとき、風俗の歌なり、題は地名の祝詞をとれり、

【躬恒家集】曰、延喜十七年、伊勢のさい宮の御れうに、くに〳〵の名あるところ〳〵をかゝせ給へる御屏風のうた、めしありしかは、なかはま、

なか濱にゐてしほたるゝ郭公さ月はかりはあたにさりける

【後撰集】曰、少將內侍歌の返し、

たかために我か余をなかはまの浦にやとりをしつゝかはこし　兼輔朝臣

【金葉集】曰、天喜四年皇后宮の歌合に、祝の心を讀せ給ふける、

長濱の眞砂の數も何ならすつきせすみゆる君か御代哉　後冷泉院御製

【新六帖】曰、

朝なゆふなかるてふあまのみるめたになをほしたらぬ長濱の浦　信　實

君か代のためしとみゆるなか濱のなきさのかひの數もしられす

神代よりいひはしめけん長はまのいけるかひをは君やひろはん

【八雲御抄】曰、なか濱、伊勢兼輔、後冷泉歌、按、長濱も亦三州渥美郡いらこ島より半里程北にあり、右にあぐる歌、伊勢の長濱とするも、いらこにつゞく所ゆゑ、古は伊勢に隷して、齋宮の御領ともなりたるゆゑなるべし、古歌長濱を詠る【夫木集】曰、備前遠江伊勢越後等に同名あり、又【歌枕名寄】に、伊勢三河に同名ありと云、【後撰】以下の、歌名寄に據れり、實に今勢志の屬地には非ず、

三國地志卷之九十七 終

三國地志卷之九十八

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國

公案

○一宮所藏

寄附一宮社領之事、

合百七石四斗、　一宮村中、

割符

高五石　御供料
高貳拾石　祭禮料
高貳拾石　修理料
高拾五石　宮坊
高八石貳斗五升　東神主
高六石七斗五升　南神主
高六石七斗五升　中西神主
高四石五斗　下禰宜　權之守
高四石五斗　こたう禰宜　中右衛門

高四石五斗　仁右衛門
高貳石貳斗五升　一ノ神子
高壹石五斗　大神御子
高壹石五升　小之御子
高壹石五升　讃岐御子
高壹石五升　おしな御子
高壹石五升　かう御子
高貳石四斗　鎭樓料
合百七石四斗
右神領如書付令寄進、就年々之祭禮、執行懈怠有間敷候、仍如件、
慶長十七年十二月八日　和泉守御判
一宮宮坊神主其外書付衆中

一一宮大明神御こし注文

一御こし　二社
一しやうし　八本
一ふんの鳥　壹つ
一きほろし　壹つ
一つはめ　八つ　緒共
一ほうたう　八つ　緒共
一すゝ　八つ　緒共

一かうらん　八つ
一鳥井　四つ
一にしきのはり物　帶かな　貳つ
一御しやうたい　物共　貳つ　緒共
一御かゝ見　卅八枚　緒共
一かさりなは　四筋
一大長持　貳つ
一同ほう　貳本
一御たゝみ　きぬ　やり　貳疊
以上

右之御こし御道具、少茂無相違樣、晝夜共禰宜衆廻番に仕、道具損し不申候樣に、念被入可申候、若無沙汰仕、ねずみなとにくわせ、きす付候者、禰宜衆可爲越度候以上、
元和二年丙辰六月吉日　石田清兵衛判
中小路五郎右衛門
田中林齋判
宮坊　禰宜衆中　參

毋者人御煩に付、於神前祈禱之由にて、御札持せ被越別而令滿足候、早速令御本服候條、可心安者也、
六月廿四日　大學御判

一遠行之時分、駄ちん之儀半分之通、高へわりかけ可申候事、
一御公儀御用人目は、何にても高へかけ可申候事、
一宮之入用さかてなどは、づへいにかけ可申候、並さいせん之儀は、先年のごとくにわり可申候、
右之通惣方がつてんづくに而定之上は、萬事御公儀之儀不及申、宮之そうじふしんの事は、めん〳〵せいを入、夜中によらず可仕候、若萬事に付ゆいこと申候者候はゞ、以來は御公儀に申上、にせに被下候田地も取上、惣方へわつふ可仕候、其主はを國ばらい可申候、此等之趣とくと惣方がつてん可有之候、仍如件、
寛永十六年卯二月十一日　中山金左衛門判
禰宜衆惣中まへる

一宮大明神御社殿大破に付而、宮坊禰宜衆として、國中勸進仕、御造宮に取かゝり被申候、我等初として奉加に入候、何も志次第奉加に入可申、國中之祈禱に候間、おろそかに存まじく候謹言、
九月十二日　鳥崎多左衛門判
本庄太郎右衛門判

寄附伊賀國阿拜郡一宮社領事、
高百七石四斗、在一宮村中、
內
高五石、　御供田、但禰宜中可賄之算用、役人共可沙汰之、
高貳拾石、　祭禮料、右同斷、
高貳拾石、　修理料、宮坊沙汰候、但役人共可知事、
高拾五石、　宮坊、
高八石貳斗五升、　東神主、
高六石七斗五升、　南神主、
高六石七斗五升、　中西神主、
高四石五斗、　下禰宜　こんのかみ、
高四石五斗、　ことう禰宜　中右衛門、
高四石五斗、　二右衛門、
高貳石貳斗五升、　一ノ神子、

伊賀國中所々町　中小路五郎右衛門判
在々　加納藤左衛門判
庄屋　無足人
山廻り
百姓中

高壹石五斗、　大神ノ子、
高壹石五斗、　小ノ神子、
高壹石五斗、　讃岐神子、
高壹石五斗、　おしな神子、
高壹石五斗、　から神子、
高貳石四斗、　鐘撞料、
合百七石四斗也、

右任慶長十七年十二月八日、寛永九年五月廿三日、貞享元年九月十一日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨、全社納、年々御禮不可有懈怠者也、仍如件、

御名

元文二年丁巳八月七日　　御判

宮坊
神主
手付面々

○上野天神宮所藏

寄附伊州上野天神社領之事、

本高拾八石一斗四升三合、目錄別紙、在綾郡上野村中、

內
壹石五斗、　御供料、

拾壹石八斗四升三合、修理料幷鐘撞用共、
別當坊、
宮坊、
神主、
神子、
八斗、

右全令社納事者、無懈怠可祈國家之平安、仍寄進之狀如件、

伊賀少將

寛文九酉年五月十一日　　高次御判

寄附伊賀國阿拜郡上野天神社領之事、

本高拾八石壹斗四升三合、在阿拜郡上野村中、

內
壹石五斗、　御供料、

拾壹石八斗四升三合、修理料幷鐘撞用共、
別當坊、
宮坊、
神主、
神子、
八斗、

右任寛文九年五月十一日、貞享元年九月十一日、寛永元年四月朔日、寛永八年三月十五日、享保十六年十月

十八日先判之旨、全社納、禰國家平安之祈禱、不可有懈怠者也、仍如件、

御名

元文二丁巳年八月七日　　御判

○上野大福寺所藏

愛宕寺寄進之事、

一愛宕寺廻はうしのごとく宛行事、
一なよ竹、　百そく、
一そぎ、　貳万杖、
一米、　拾俵、
一薪柴、　百そく、

右之通念を入可相渡候、但寺廻之儀者、永代遣候間、其通可申渡者也、

元和元年十月六日　　御印

りんさい
せいそん
五郎右衛門

御使僧殊爲眼病祈禱誰摩御供物御禮、御百味目出度く令頂戴候、猶期後喜之時分、恐々謹言、

七月廿日　　高虎御判

愛宕　大福院殿

殿様御氣色爲無御見廻、御狀無拜見候、幷護摩執行被成、御札御上ケ、則遂披露之處、御應に思召候、彌於御寶前御祈念御尤候、恐惶謹言、

八月廿二日　　藤堂兵左衛門判
藤堂四郎右衛門判
藤堂監物判

上野愛宕　大福寺法印　御報

御狀致拜見候、仍愛宕御祈念被仰付候處々、被致執行候付而、態使僧御下し、御百目御禮幷油煙十把御あけ候、則遂披露候處、一段と御機嫌之御事候、彌御祈念御油斷無之通、具に申上候間、左樣に御心得可在候、猶此使僧可被申候、恐々謹言、

九月廿一日　　藤堂兵左衛門判
藤堂四郎右衛門判
藤堂監物判
藤堂采女判

伊賀愛宕　大福寺樣　御報

殿樣、御祈念之御札御捺しを候て御使僧御下被成、御機嫌に思召候、頓而御晦出御登可被成候間、其節可申承

候、拙者方へも御札幷油煙五挺被掛御意、過分之至に候、彌御祈念憑存じ候每年之御祈念之護摩之御札も、津々被遣候よし、過分之至候、委細は使僧可被申候、恐惶謹言、

九月廿一日　　藤堂采女正正次判

愛宕　大福寺様　御報

從今廿日至廿六日、一七日之間、於其地護摩御執行頼存候、右は　松壽院様當病御平愈爲御祈念に御座候、已上、

五月廿日　　米村半介判
箕蒲四郎五郎判
柴田左源太判
山口十三郎判
藤堂三十郎判
井上久太郎判
向日長左衛門判
內田新三郎判
堀島之介判
神田少七判
戸波久三郎判
淵田五郎八判

寄附伊州上野愛宕領之事、

高拾石五升四合、在阿拜郡久米村中、

右全令寄進年、者無懈怠可祈國家之平安、山林境內永可有進退之狀如件、

寛文九年五月十一日　　伊賀少將　高次御判

大福寺

寄附伊賀國阿拜郡上野愛宕山領之事、

高拾石五升四合、在阿拜郡久米村中、

右任寛文九年五月十一日、貞享元年九月十一日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨、全收納、山林境內尤可有進退、彌國家平安之祈禱、不可有懈怠者也、仍如件、

元文二丁巳年八月七日　　御名　御判

大福寺

○上行寺所藏

口上

白雲公爲串宇和郡平地村內に而、五拾石相附候、勤行無懈怠可有之者也、

慶長十年正月十一日　　佐渡守御印

相渡寺領之事、

一高百石、　宇和郡眞出村內、

右白雲公爲孝養寺領に相附候、朝暮勤行幷寺家且修理之儀、不可有懈怠者也、

慶長十二年正月十六日　　佐渡守御印

常行寺　本學坊

口上

東國就出陣、爲見舞使札幷鳥目五十疋到來、不謂氣遣候偏心付從乞滿足候、やがて乞歸陳候て、可申述候、恐々謹言、

六月五日　　御判

本學坊　返報

倘々諸士幷藏入給知庄屋共、

お本學坊高山致御弔處、香奠齋米非時目錄爲揃下候、町中者とももよくから申聞候、具見聞之通、何も拙面之者ども可被申渡候也、

十一月十一日　　大學御判

藤堂出雲殿

藤堂武了殿

加納藤左衛門殿

一其御國上行寺は、白雲様高山様之御位碑所に候得ば各別之御事之間、寺破損之刻は、役大工材木等、各相談之上にて可被申付候、恐々謹言、

三月廿九日　　內堀彌五右衛門判

井關彦兵衛判

藤堂監物判

加納藤左衛門殿

中小路五郎右衛門殿

脇坂三郎右門殿

佐久間九郎右衛門殿

小川次郎兵衛殿

覺

一銀六貫目也、

右者御寺爲御助成被成下候、一割之利足にて借附、利銀六百目宛、來申年より永々年行事大庄屋共より、每暮可相納候間、更納可有之候、以上、

享保十二丁未年十一月十七日　成瀨平馬
水上權太夫

上行寺同道代

○山溪寺所藏

今度祝言付、爲祝儀鳥目到來、令祝着也、
極月廿四日　御判
歸耕

爲歲暮祝儀、胡桃一箱到來、令怡悅候不宣、
極月廿八日　御判
歸耕軒

就歸耕雄長老迁化、爲遺物村庵之墨蹟一幅到來、御終不遂對面、別而殘多存候、恐々謹言、
六月七日　藤佐渡守
獄藏主　机下

今度先師寺領無相違被仰付、難有被存候旨尤に候、因茲使僧被差越、
和泉樣え拾帖一本御上げ、則令披露、使僧卓首座首尾能　御目見仕被申候、恐々謹言、
八月廿四日　中川藏人判
服部儀兵衛判

須知五左衛門判

歸耕菴

○淺宇田八幡宮所藏

寄附伊州淺宇田八幡社領之事、
本高三石六斗、　在目錄別紙、在綾郡淺宇田村中、
壹石五斗、　宮坊、
內
壹石、　神主、
六斗、　禰宜、
五斗、　神子、

右全令社納畢、者無懈怠可祈國家之平安、仍而寄進之狀如件、
寬文九酉年五月十一日　伊賀少將
高次御判

淺宇田八幡宮社領目錄

字地町
一上田壹反、有畝壹反貳歩、高壹石二斗、　又藏、
一上田九畝、有畝壹反拾三歩、高壹石八升有、　彦作、
一上田壹反壹畝、有畝壹反壹畝五歩、高壹石三斗二升、
上田合三反、
有畝三反壹畝貳拾歩、
高合三石六斗、　淺宇田村高之內、

右之通村並每年可有取納者也、
寬文九己酉年五月十一日　中小路五郎右衛門
加納藤左衛門

宮坊
神主
禰宜
神子

奉寄進伊賀國阿拜郡淺宇田村八幡宮畠並山之事、
一宮殿之前馬場之左右之畠、南北は限谷田、都合五反八畝貳拾歩也、
一山之南北東は、限三方之谷者也、
右件畠並山林、所奉寄當宮也、先年羽林高次寄附之神田は、目錄別在之者、每年令收納之神事用途、可祈家國平安之狀如件、
伊賀侍從藤堂
寬文十年九月十五日　高久御判

寄附伊賀國阿拜郡淺宇田村岡八幡宮社領并畠山之事、
一本高三石六斗、在阿拜郡淺宇田村中、

內
壹石五斗、　宮坊、
壹石、　神主、
六斗、　禰宜、
五斗、　神子、

一宮殿之前馬場之左右之畠、南北者限谷田、都合五反八畝貳拾歩也、
一山之南北東者、限三方之谷者也、
右任寬文九年五月十一日、寬文十年九月十五日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十五日。享保十六年十月十八日先判之旨、全收納、彌國家平安之祈禱、不有懈怠者也、仍如件、
御名
元文二丁巳年八月七日　御判
宮坊

○常住寺所藏

寄附伊州長田十王領之事、　目錄在別紙、在綾郡長田村中、
本高九石貳斗貳升、
右全令寄附訖、不可有相違狀如件、
伊賀少將
寬文九酉年五百十一日　高次御判

隆王寺

寄附伊賀國阿拜郡長田村常住寺領之事、
本高九石貳斗貳升、　在綾郡長田村長田村中、
右任寬文九年五月十一日、貞享元年九月十一日先判之旨、今般別扶助米貳拾俵、從者未年乞新加訖、全收納不可有相違者也、

從四位下伊賀侍從藤堂大學頭
寶永元申年四月朔日　高睦御判

寄附伊賀國阿拜郡長田村常住寺領事、
本高九石貳斗貳升、在阿拜郡長田村中、
右任寬文九年五月十一日、貞享元年九月十一日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十八日、享保十六年十月十八日先判之旨、別指助(扶カ)米貳拾俵共、全收納不可有相違者也、仍如件、

御名
元文二丁巳年八月七日　御判

○寒松廟賜長田佛性寺制書

當寺之糸櫻枝をきり候者出在之者、曲事可申付之間、可得其定也、
三月五日　和泉御判

○坂之下村上寺所藏

定　坂之下村

一上寺山、西限赤井谷、北限天王上、東限山之神川、
一寺山之內竹木之儀者不及申、下かりも仕間敷事、
一茶菌樹木に付御年貢在之分は、可爲別格事、
右之通堅可相守者也、
寬永拾五年拾月日　西野佐右衛門
島崎多左衛門
柘植角兵衛
加納藤左衛門

長田村　西蓮寺

伊州長田西蓮寺領之事、
本高四石五斗、目錄別紙、在綾郡長田村中、
右令扶助了、山林境內全可有進退之狀如件、
寬文九年五月十一日　西蓮寺

西蓮寺領目錄

字上村
一上田壹反貳畝、有畝壹反二畝貳拾歩、與助　高壹石八斗、
字ひくら
一上田壹反、有畝壹反四畝五歩、助作　高壹石五斗、
字今市
一上田八畝、有畝壹反貳畝、善右衛門　高壹石貳斗、
上田合三反、有畝四反、
高合四石五斗、　長田村高之內、
右之通村並每年可有取納者也、
寬文九酉年五月十一日　中小路五郎右衛門
加納藤左衛門
西蓮寺

寄附伊賀國阿拜郡長田村西蓮寺領事、
本高四石五斗、在阿拜郡長田村中、
右任寬文九年五月十一日、貞享元年九月十一日、寶永

元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨、全收納、山林境內、尤可有進退者也、仍如件、

御名
元文二丁巳年八月七日　御判

○寒松廟賜長田佛性寺制書

當寺之糸櫻枝をきり候者出在之者、曲事可申付之間、可得其定也、
三月五日　和泉御判

○坂之下村上寺所藏

定　坂之下村

一上寺山、西限赤井谷、北限天王上、東限山之神川、
一寺山之內竹木之儀者不及申、下かりも仕間敷事、
一茶菌樹木に付御年貢在之分は、可爲別格事、
右之通堅可相守者也、
寬永拾五年拾月日　西野佐右衛門
島崎多左衛門
柘植角兵衛
加納藤左衛門

○富永村新大佛寺所藏

俊乘坊江奉掛立願之事、
唯今所掛宿願令成就者、來春早々より堂を建立し、殊望給事奉成唯一色之所願也、速令見其驗、誠精如此、仍寄願之狀如件、
寬永九年六月朔日　藤堂大學助御判

富永村大佛山故跡たるによつて、山林如先規寺付にいたし候、林之儀鹿猿不籠様々致下苅、宮寺破損之入用に可仕候、大木之儀は殘置、造宮之時可用者也、
延寶九酉年九月廿九日　山本忠左衛門判
山中兵助判
石田三郎左衛門判
米村安左衛門判
富永村　庄屋

覺

一大佛之儀、十七年已前先役人出付之通、上人堂修理に付置候事、
一右先役人紙面之通、寺附にいたし、林之儀は鹿猿不籠様に致下苅、宮寺破損之入用に仕、大木は殘置、造營之時用可申儀に候、近年富永村之者共、并大佛之者共、双方より盜山をあらし、古跡之地見分惡敷仕候義、沙汰之限不屆候、以來は宮寺入用之外、盜

取申者在之候はゞ、急度可申付候事、
一此山富永村領に紛無之儀勿論に候、然共我がまゝに山をあらし盜申候に付、平松猿野下河岐よりせいとういたし候由、此村には私欲には不仕、上人堂修補にかり申迄に而、古跡を大切に存候段寄特に候、富永之者共、大佛之者共も、可致其者候也、

元祿十丑年六月廿九日　九郎左衛門判
角左衛門判
忠兵衛判
次郎右衛門判
富永村庄屋
年寄

○上柘植村德永寺所藏

綾郡之內上柘植村德永寺寄進之事、
一定成貳石、　納升但門前畠方之內を以、
一茶貳貫貳百目、　內門前畠之分有之分、
一寺廻竹木、但し樹木共に
右同扶持候間、全可令寺納者也、

元和元年十月四日　御判
德永寺

寄附伊賀國阿拜郡柘植村德永寺領事、
一定成貳石、納升　同前畠方之內、
一茶貳貫二百目　同畠方之內、
一寺廻竹木共、
右任元和元年十月四日、寬永九年五月廿三日、延寶九年二月十五日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨、全收納不可有相違者也、仍如件、

御名

元文二丁巳年八月七日　御判

○下柘植村三社明神所藏

掟

一當宮山竹木、盜伐捕并堀候儀下刈共、堅停止之事、
一牛馬放申間敷候事、
一茶薗あらし申者捕候事、
右之條々堅可相守候、若相背者於在之者、上野江召連可越候急度曲事に可申付者也、仍如件、

寬永十三年九月廿六日　西野作右衛門
加納藤左衛門
島崎太左衛門
柘植覺兵衛

○古郡村常福寺所藏

寄附伊州古那不動領之事、
本高四石五斗、目錄在別紙、在阿我郡古那村中、
右全令寄進畢、不可有相違之狀如件、

寬文九酉年五月十一日　常福寺

不動領目錄
宇うしやかいと一上田壹反五畝、高二石貳斗五升、半三郎、
宇みやきし田一上田壹反五畝、高貳石貳斗五升、忠兵衛、
上田合三反、此者古那村高之內、
高合四石五斗、
右之通村並每年可有取納者也、

寬文九己酉年五月十一日　中小路五郎右衛門
加納藤左衛門
常福寺

寄附伊賀國伊賀郡古那村不動堂領事、
本高四石五斗、在伊賀郡古郡村中、
右任寬文九年五月十一日、貞享元年九月十一日、寶永元年四月朔日、寶永八年三月十五日、享保十六年十月十八日先判之旨、全收納、不可有相違者也、仍如件、

御名

元文二丁巳年八月七日　御判
延壽院

○赤目瀧延壽院所藏

奉寄附瀧不動堂御供領之事、
高合貳拾三石八斗四升、附寺內竹木等、
右領者爲供物并燈明料、然者旦暮武運長久、國家安全之信祈、可抽丹誠者也、仍寄進之狀如件、

寬永十三丙子八月吉辰　御在判
延壽院住侶

寄附伊賀國名張郡赤目瀧不動堂領事、
高合貳拾三石八斗四升、附境內竹木共、
右供物燈明料、寬永十三年八月、天和二年九月、寶永元年四月、寶永八年三月、享保十六年十月先判之旨、全收納、彌國家安穩、武運長久之祈禱、可抽丹誠者也、仍如件、

御名

元文二丁巳年八月七日　御判
延壽院

○諸買賣並野畠新開免書

以上

國中萬うりかひ之儀、上野町并なんばり之町內安越之

町にて、しやうばい可仕候、右のほかわき〳〵にてうりかい、堅令停止者也、

和泉守

慶長十三年十一月五日　御判

伊賀國　上野町中

上野町　名張町　阿保町　島ヶ原町　山田町

上阿波町　佐那具町　上柘植町

右八ヶ所、如先規諸役免許之訖、此旨可令下知之狀如件、

寛文十戌十月三日　高久御判

納藤左衛門殿

中小路五郎右衛門殿

從先年所作來候、上野新開之野畠年貢之儀、先規之通免許訖此旨可令觸知者也、

寛文十年庚戌十月三日　高久御判

加納藤左衛門殿

小路五郎右衛門殿

伊賀國中萬賣買之事、先規之通

上野町　名張町　阿保町

於三ヶ所萬賣可仕候、右之外脇々に而賣買、堅令停止者也、

元文二丁巳年八月七日　御名御判

上野村　名張町　阿保町　島ヶ原町　平田町　平松町

佐那具町　上柘植町

右八ヶ所、如先規諸役令免許者也、

元文二丁巳年八月七日　御名御判

從先年所作來候、上野新開之野畠年貢之儀、先規之通令免許者也

元文二丁巳年八月七日　御名御判

三國地志卷之九十八終

三國地志卷之九十九

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國

舊案

○藤原實遠所領田畠目錄

散位藤原朝臣實遠　先祖相傳所々領掌

田畠目錄事、

伊賀國　在

合

伊賀郡

一處　猪田鄕　四至東限阿我條挌、南限防道岡、西限治田村、北限大內堺、

阿我鄕

一處　比奈村　在條里坪付、

一處　火食村　在條里坪付、

一處　上津阿保村　四至、東限伊勢山、南限伊勢道、西限岡、北限山、

一處　中津阿保村　四至、東限伊勢道口、南限名張河、西限三谷口、北限山、

一處　古郡村　在條里坪付、

一處　上津田原村　四至、東限山、南限山、西限井田橋、北限山、

大內鄕

一處　友生村　四至、東限喰代西山、南限山、西限久米河橋、北限國分寺、

一處　依那具村　在條里坪付、

一處　安佐小田村　四至、東限立閼、南岩前、西大便淵、北限河、

一處　手白駁村　在條里坪付、

長田鄕

一處　字教屋村　高畠垣內段、

便田引町參段、在條里坪付、

一處　神田村　畠壹町陸段、四肆（田カ）段、在坪付、

一處　葦長村　田伍町、在條里坪付、

一處　廿二條一里七坪參段、十二坪一町、十二坪壹町、十四坪一町　十五坪一町、廿五坪一町、廿一坪一町、

一處　字小所、廿三條三里　陸段、

阿拜郡　三田鄕

一處　小田村　田參町肆段、在條里坪付、

一處　助光法師垣內前坪、全近垣內前坪北川原田、

一處　新居鄕染町陸段、在條里坪付、

一處　伙代（印カ）鄕　友延成垣內　便田參町貳段、在條里坪付、

一處　千歲院垣內畠染段、田參段、

一處　信濃堂北田一町、

山田郡

一處　喰代村　四至、東限高山、南限山、西限黑山、北限谷口、

名張郡

件處藥師寺別當大法師隆綱沽與畢了、

一處　矢川村　四至、東限柚山、南限加陀賀明神、西限宇陀川、北限矢川、

隆ヵ綱ヵ沽

件處藥師寺別當大法師陀經侶與畢了延文六年七月六日、

一處　中村　四至、東限山、南限矢川、西限宇陀川、北限供御川、

件處東大寺御房沽與畢了

一處　簗瀨村　四至、東限高岡、南限供御河、西限河、北限剝山、

一處　下津田原村　四至、東限阿保條格、南限山、西限山、北限山、

一處　岸田村　田捌町、在坪付、

或ヵ窄ヵ

右件所々、先祖相傳領掌、而年老亂之間、或荒廢載穿籠、依獨有相傳領掌造ヵ理上、爲得教養、存生之時、讓與即甥養子藤原信良朝臣既畢、仍勒目錄讓文如件、

天喜四年二月廿三日　　散位藤原朝臣在判

依件處分文明白、限ヶ、郡司

名張郡司長谷川在判

在地藤原

左辨官下伊賀國、

應令下遣官使、如舊打牓示堺四至、永止窄籠、傘不役ヵ入國使、免除雜徭、偏採進寺家材木、勤仕修理夫役所領板蠅玉瀧柚黑田庄等事、

右得彼寺去年十二月廿一日奏狀稱、謹檢案內、件庄等者、或除租帳格前所、或官有荷所也、而近代國司狼所爲崇宛展國役貢勘之間、本寺材木不採進已有若亡也、倩案舊記、以件柚材木並庄々之所出坐品ヵ土產之物、多支大破修理、依是不入國使不仰國役也、爰時代推移、人心異變ヵ忽、愁諸佛法、蔑爾本寺之間、在封任國司不致合期之辨、纔有其辨者、是非見色、抑寺家建立之後、乃三百餘載、佛事遶薄、僧侶廢亡、因玆雨露難駐、風霜易浸、當于斯時、以件柚井庄々等所出物、修理破壞、供養佛僧、更無矯謗、盍蒙天恩矣、仍言上如件、望請官裁早下遣官使、寺家所領柚井庄々等堺四至打牓示、永停止入國使并宛國役者、將如本願聖靈額俸、可奉祈天長地久之寶壽、擔ヵ擔護五畿七道之興復之由者、右大臣宣、奉勅宜仰彼國、如舊打牓示、永止窄籠、又不入國使、免除雜役者、國宜承知、依宣行之、不可違失、

天喜四年閏三月廿六日　　大史小槻宿禰

中辨平朝臣

○同年宣旨

左辨官下東大寺、

應早停止寺家所領柚並庄々等堺四至打牓示、而永止窄籠、不令入國使、免除國役、免採進寺家材木、修理夫役事、

在伊賀國板蠅玉瀧等柚井黑田庄、

美濃國　大井　茜部庄、

右得彼寺去年十二月奏狀偁、謹檢案內、件柚井庄々者、或除租帳格別所、或有符所也、近代國司狼所爲崇充負國役、勘責之間、本尊材木不採進已有若亡也、債案舊記、如件柚材木並庄々之所出土產之物、多支大破修理、依是不入國使、不仰國役也、爰時代推移、人心異散、忽諸佛法、蔑爾本寺之間、衣化在封任國司不致合期之辨、纔有其辨者、是非見色、抑寺家建立之後、及三百餘載、佛事遶薄、僧侶廢亡、因玆雨露難駐、風霜易浸、當于斯時、以件柚辨庄々等所出物、修理破壞、供養佛僧、更無矯謗、盍蒙天恩矣、仍言上如件、望請宮裁早下遣官使、寺家所領柚並庄々等堺四至打牓示、永停止入國使并宛國役者、將如本願聖靈額俸、可奉祈天長地久之寶壽、擔ヵ擔護五畿七道興復之由者、右大臣宣、奉勅依本座之寺　國宣承知、依宣行之也、

天喜四年閏三月廿六日　　大史小槻宿禰

中辨朝臣

○藤原信良言上狀

散位藤原信良解、申請　守殿　恩裁事、

請殊被蒙　恩裁、任故馬大夫實遠朝臣處分公驗之理、被正直之御使下給立券給愁狀、

右謹檢事情、件所領田地、元祖父大藏大夫清廉朝臣數年領掌、專无他妨間、罷及七十七、其身死去、其後息男左馬允散位藤原實遠、同以領掌仕間、實遠與信良舅甥之中候上、又養子　數年而實遠孫女、信良相緣、依內外親昵、更无隔心、孝養爲先、相送年月、日夜朝暮孝養之間、以去天喜四年二月廿三日、所々領地、依无一人之正子、偏信良並孫女皆悉處分公驗文書等速讓與了而間以去年四月十日卒去者、望蒙　恩裁任申狀、下給正直之御使、慥被立券給者、謹仰　御威之貴、仍注在狀、言上如件、以解、

康平七年二月十六日　　散位藤原在判

○東大寺封戶調庸雜物案

東大寺牒　伊賀國衙、

欲被早任例、辨濟寺家當年封戶庸雜物事、

使

牒、件封戸調庸雜物等、參期有限、寺用又定矣、仍牒
送如件、乞衙察狀、早任例可被辨濟之狀、以牒、
寛治七年十月十一日　　權都那法師（維脫カ）
別當法師　　都維那法師
上座大法師
權上座大法師
寺主大法師
權寺主大法師

○喜保元年宣旨
左辨官下伊賀國、
應令伊勢大神宮神民並東大寺出作等、段別宛米陸斗、
辨濟所當官物、宛用重色用塗事、
右得彼國司去月十二日解狀偁、謹檢案內、神民及東大寺寄人等、恣出作公田、徵下官物之時、各募本所之威勢、不辨如數之官物、就中當國本自境內狹少、公田不幾、其內前々司任以後新立之庄、已以有數、所減之田、動及三百餘町、然猶神民東大寺之出作又八百餘町、已募權勢不辨官物、百姓作田五十餘町、其外公田七百餘町、已徵下官物之數往年半分也、如起請者、新立庄園雖可被停止、新任之吏、忽難左右、望請天裁、被下宣旨於出作等、徵納如數之官物進濟、宛齋院禊登（祭カ）、諸寺御封加擧踊、三寶布施料、兼又宛用造豊受宮役夫工、並造興福寺舍屋料者、權中納言大江朝臣匡房宣、奉　勅依請者、國宣承知、依宣行之、
嘉保元年十二月十七日　　大史小槻宿禰
右少辨平朝臣

○天養元年官符
大政官符伊賀國司、
雜事伍箇條內一、
一應遣官使、同停廢東大寺興福兩寺押領、字簗瀨眞木山丸柱、並予野村等內、公田參佰餘町、不令辨濟調庸雜物事、
東大寺領
字黑田庄（加納字簗瀨村公田三百餘町、）　眞木山村、丸柱村、
興福寺西金堂領、
字予野村公田三十餘町、島原保、
得彼國守從五位上藤原朝臣信經去月十日奏狀偁、信經去正月廿四日任彼國守、先召在京雜掌等、尋問立風之處（虫喰）公東大寺領黑田庄者、本田廿五町八段百八步也、而近代以降、募寺家威、押領字簗瀨眞木山丸柱三箇村內公田三百餘町、公民一百餘家不輸租稅、不勤課徭、其中簗瀨村者、前司小槻祐後宿禰、任寛治年中始（虫喰）一別保之後、偏號寺領之間、藤原孝淸任云長治三年下宣旨被停廢畢、眞木山村者、（虫喰）爲重朝臣任同下宣旨被停廢焉。丸柱者、源憲明任始所稱彼庄領也、因玆代々之間、每經奏聞、或附使廳、令追却虜掠之徒、或遣官使、被停止加納之地、雖然猶不徵嚴制、猥以所押取也、寄名廿餘町之免田、假奪三箇村之國領、貪猾之甚、爭無禁遏乎、又猪田鄕內予野村公田卅餘町、忽號興福寺西金堂領、同不輸租調、國之蠹害無過於斯矣者聖請天恩、任代々宣下狀、重遣官使、被停止彼兩寺所押領之公田三百餘町者、將伏彫弊之憂者、正二位行權大納言藤原朝臣宗輔
宣、奉　勅依請者、
以前條事如件、國宜承知、依宣行之、符到奉行、
天養元年三月廿九日
從四位上行權右中辨藤原朝臣在判
左大史正六位上惟宗朝臣在判

○柘植川合檢田目錄
柘植川合兩鄕司解申、注進鞆田御庄出作治承元年檢田數目錄事、
合伍拾參町貳段貳百肆拾步、
常荒六町三段內、柘植二丁七段六十步、川合三丁六段六十步、
不作八町四段小內、柘植四丁二段半、川合四丁一段三百步、
川成二町二段大內、柘植一丁六十步、川合一丁二段半、
同人作田參拾伍町貳段百貳拾步、
柘植鄕貳拾伍町一段陸拾步、
損田一丁二段半、
得田廿三丁八段二百卌步、
川合鄕拾一町一段陸拾步、
損田八段二百卅步、
得田十丁二段三百步、
右件檢田數目錄注進如件、
治承元年十二月　日
柘植鄕刀禰散位藤原在判
川合鄕刀禰　中原在判
郡司　散位藤原在判
書生兼柘植郡司散位平在判
吏雅樂允中原朝臣在襄判
代官僧定仁

○治承四年長者宣

伊賀國近代新立庄園充滿國中、依無一頃公田、曾澤式數濟物、仰國司被尋子細之處、當寺領黑田庄本田廿五町餘之外、掠領數百町天地、加之近年偏號庄領、忌乃貢之勤、更不經國役云々、如然者寺僧所行甚不穩便、仍停廢可令從國役之由、殊被下宮符了、若背符旨致對捍者、可被行其科、兼可被下知此旨也、但於封戶者、任舊例、自國衙可令返濟之由被仰下了、可被存此旨者、依攝政殿御氣色、執啓如件、

治承四年十月八日　　左少齋行隆奉

謹上東大寺別當僧正御房

○伊豫守泰經案

伊賀在廳所參洛候也、明後日四日、於院聽可被問注候、寺家所司可令召置給仍上啓如件、

養和元年八月二日　　伊豫守泰經

東大守大僧正御房

○寬治六年名張郡司案

名張郡司丈部（ヘセツカベ）近國敬解、申請預宣旨事、

被載作矢川中村條沙汰者

右今年二月十八日宣旨、同月三十二日到來、仍所請申如件、以解、

寬治六年三月十三日　　郡司刀禰等

刀禰件在判

大村

郡司大部在判

黑田御庄下司檢校藤原在判

○平政氏案

伊賀國守護代家政子息左衛門尉平政氏重申、一欲爲同國名張郡黑田庄領所、令同章庄官以下惡黨等、背平均御式目、並正嘉御敎書、物惜黑黨等上者、早差日限、被召上預所並定用以下庄官等、被處重科、後有關東御注進、如舊被申補地頭子細事、

副進

一通　關東御敎書案、正嘉二年九月、

十一通　御消息案、此外二通者付使者直被進之間、不帶案文、已上十三度也、

一通　別當御房御返事案、去月廿四日、

件惡黨等之事、先々就于令言上十餘ケ度之召文、被召進彼惡黨等於六波羅殿之刻、任被定置之旨、可召渡守護之由、被申御返事之處、全不可召渡守護之旨、沙汰人等雖令言上、猶下召渡守護之由、重被申御返事畢、然而不召渡之間、又申付御文之處、急可有御下知之旨雖有御返事、不及其沙汰之間、近日度々相觸庄家之處、一向不可召渡之由、庄官等可物惜之上、當庄沙汰人馬允定用之親父之時、依企惡黨、被下宣旨、自關東被補地頭之處、自東大寺被歎申歟之刻、被避進地頭職於御寺云々、而不顧先例、又令同意惡黨等之條、重科無双也、就中彼定用爲御家人之間、蒙本所勘發之時者、賜武家之御舉狀、經本所之訴詔畢、今者又背武家御下知、違平均御成敗以下御敎書、令物惜惡黨等之上者、早被召上彼庄官等、不日可被行重科之由雖訴申、無御承引而自今上洛之時者、爲別當御房御計自南都被返下畢、然間云當他國、云洛中夜討強盜以下之惡行、只黑田庄之結構也、隨去五月下旬之比、搦取當國大强盜張本平五馬允於守護之處、惡黨等成集會、而寄政氏親父家政之許、奪取馬允、可打家政之由、令風聞者也、是又名張郡惡黨等、皆以爲同類之間、定不可放者歟、然者早差日限、被召上彼庄預所並庄官等、被處重科之後、有關東御注進、如舊爲被申補地頭、重言上如件、

文久二年六月日　　左衛門尉平政氏

○建武元年案

雜訴決斷所牒　伊賀國守護所、

當國衙雜掌請宗申、柘殖、栢野、長田、上津、田原、薦生出作、山田郡、古山、古郡以下諸鄉保地頭抑留（部カ）年貢正稅事、副解狀、

牒彼輩背　勅裁不（虫喰）濟正給（虫喰）、且究濟之、且可參洛旨相觸候之、可執進面々請文、難澁者、可被注申者以牒、

建武元年十一月廿六日　　左衛門尉中原朝臣在判

左中辨殿原朝臣在判

○貞和四年東大寺衆議案

被滿寺衆議儀、條々寺訴停滯之條、不堪歎憤、及神輿動坐、則閉門遂電之所爲、齋藤左衛門大夫御使可存時宜之由、重々御問答之間、且奉須武命開門戶、執行數ケ御祈禱畢、仍所訴申肝要三ケ條（南北伊賀杭瀨庄、安內、北伊賀庄々濫妨人服部右衛門太郎入道々秀、村田左衛門三郎賴保、村木彥太郎以下輩事者、既就罪名治定、被經御沙汰之間、所捧別紙申狀也、但當國事無守護在國者、所々惡行更不可斷絕之間、寺訴根本斯事也、隨而南伊賀名張郡惡黨人等、先守護被致嚴密之沙汰之時者、悉稱降參順寺命、可全公事課役之由、重々就歎申可存寬宥儀之由、爲雜賀輩人入道西義奉行、被仰之間、存故實之處、伺先守護得替之隙、濫惡更如元、於所々構城槨、不入立寺家使者、押妨所務、言語道斷次第也、

所詮正守護被在國、當國惡黨退治事、自最初所訴申也、急速司被經御沙汰矣、次當寺八幡宮談義斷所、攝津國杭瀨村事、三條前中納言構眼前謀書、就被致濫訴、不被糺明文書之理非、依當時之權威、被付天平　勅施寺領於被彼中納言之條、難堪之間、一流滅亡、猶以及御沙汰者先規也、何況於一寺愁憤哉、然者欲預御執　奏矣、次造東大寺領防洲都濃本郡地頭安富民部大夫貞嗣罪科事等也、此等條々如載先段、齋藤左衛門大夫依爲時之使節、捧事書之上、去年八月宿老企列參、以二階堂伯耆入道々本申入之處、卽被與奪當奉行之刻、世上御急劇之間被閣畢、存故實于今不及驚申、所詮天下旣人安也、爭不被休寺門愁歎、然者且被經伊洲守護在國之御沙汰、如元被退治名張等惡黨人、且被成重御教書、任法被召出罪名治定輩、被處所當罪科、且杭瀨庄事被經御執奏、且爲被行安富民部大夫罪科、重所勒子細也、被經御沙汰之樣、可令洩啓別當宮廳給者、衆議如斯矣、

貞和四年十月廿九日　　年預五師範曉

按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之九十九 終

三國地志卷之百

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國

舊案

○正應元年案

造　內外宮料伊賀國催神部重申、

欲早且被停止新儀非分監訴、且任建永濟例、可究濟內外宮役夫工米旨、被下嚴密　院宣、當國東大寺領築瀨保、百學生在薦生上村青蓮寺保輞田出作念佛堂北柚等神役、背代々割付、捧嘉應文治等毀破文、號　勅免不叙用九ヶ度　院宣、難遁違　勅科子細事、

副進

一通　宣旨案、建久四年、不論先例勤否、不除一庄不漏寸歩、可究催申事、

一通　院宣案、建永元年、子細同前、

一通　建永濟目錄案、當寺領事、

九通　院宣案、雖帶以往免除狀、建永造濟地、諸國一同不被免除申事、八通先進間略之、

件庄保等、皆代々濟例、自由對捍子細、數返言上事舊畢、而任先例可有御下知之旨、度々被下　院宣之刻、依爲一圓不輸之寺領、不勤仕彼役之由、被進御請文之條、絆令參差者歟、二所大神宮役夫工米者、依爲　朝家無双之重事、三代起請之地、三社御領、權門勢家神社佛寺領等、不論先例之勤否、不依證文有無、不除一庄不漏寸歩、可宛催之由、建久四年被下永例不易　宣旨、建永同被下　院宣、代々進濟之條劃付分明也、而今度可任建永例之旨、被定下畢、因茲當寺領帶　勅免歟、不然者爭可申子細哉之由、雖被下數通　院宣、可相觸寺家之由、每度被進同前御請文、別當依被抑御施行、去年五月度々被仰下之所、未被申左右、猶早可令下知給之旨、被下重　院宣之時、同六月號　勅免、被修進美濃國大炊茜部庄事、幷黑田庄杣宛、天永永久等　宣旨案文之間、同七月一日建永濟例分明之間、度々被仰下之所、不事行之條不可然、殊可令下知給之旨、雖被下嚴密　院宣、敢依不叙用、同七月十九日數度被仰下之所、猶以申子細之條、太以不可然、所詮建永濟例分明之上者、早可進濟之由、可令下知給云々、還仰云雖帶以往之　勅免、於建永進濟之地者、諸國一同不被免除、可令存知給云々、如此及至極御沙汰之上者、不可有子細之所、搆事於縱橫、捧先度所令修進之毀破狀、擬申亂數度　勅裁之條、所存之企奸謀也、修而無治術之處致歟、一是、次以周防國椹野庄免除狀、修當國　勅免支證之條、理豈可然乎、縱雖爲同國名各別之者、雖被混合、何況於餘國乎、二是、次以建永年中神部記錄、修當寺領濟例歟、非當寺署判送文、爲神部自由注文不足證、又云此條前後不覺申狀也、建久建永被破　勅免之儀、諸國平均令進濟畢、就中以造宮所割付、代々造宮之時、被召出之、任其旨所被致辨濟也、隨今度諸國庄園、皆任彼割付、致辨濟畢、限當寺領何可及異儀哉、尤仰高察、將又於當國者、遂入部收納之上者、背傍例何可及送文沙汰乎、申狀不知案內也、三是、次御代初退轉御願之條、爭不被驚思食哉云々退轉何事哉、不闕宗廟之造替者、還叶先皇之靈慮歟、何況諸國一同之支配微下最少也、辨濟年貢更不可滅之由、建久建永代々聖代綸言、爲先哲後鏡歟、而廿ヶ年一度臨時微下課役絲底、可及御願退轉哉、是併爲奉掠　國家之詐訴、之頗非正儀歟、申狀奸也矣、以前條々大概言上若斯、抑當寺申狀雖多枝葉、所詮以新儀監訴、可被賞以往毀破　勅免歟、將又任建久建永

裁定、守代々濟例、依九ヶ度勅裁、內外宮役夫工米、不日可究濟之由、被下嚴密　院宣、可全神役歟、用捨之間所仰上裁也、是偏爲私號不言上、爲不闕如　宗廟造替之課役也、仍重言上如件、

正應元年九月　日

○曆應三年馬野雜掌案

東大寺御領伊賀國馬野雜掌了瑚謹言上

欲早被任衆徒御評定、被停止當國住人小田七郎、大西七郎、村木彥太郎、三明寺孫次郎已上不知實名、已下輩濫妨狼藉、全十二大會幷八幡宮轉害會等足間事、

右馬野者、寺家根本十二大會幷八幡宮轉害會之在所、細異他之處、當國名譽惡黨小田七郎、大西七郎、村木彥太郎、三明寺孫次郎已下輩、卒人勢帶兵杖、今月十八日未刻無是非亂入于當所、追捕民屋、苅取作麥、追出御寺公人久長幷定使彥次郎男、結句以後お入居南都使節者百姓等者、悉可燒拂住宅之由、及種々手(虫喰)之間、土民等忽拋耕作之勤、失安堵之計略之上者、早被經嚴密之御沙汰、山寺領之牢籠、爲全重色佛神之料足、粗言上如件、

曆應三年五月日

○曆應三年庄々注進書

注進　東大寺領致濫妨(事カ)(虫喰)

黑田庄　出作　黑田の庄の內、新庄　黑田の庄の內、

三谷龍口　新庄內、

青蓮寺　薦生庄　已上南伊賀、

馬野庄　富永庄　廣瀨庄內(虫喰)寸地、田(虫喰)田、　鞆田庄得(虫喰)袈裟丸兩名、　已上伊賀分、

右注進如件、

曆應三年十一月日

○治承五年注進書

東大寺

注進伊賀國御封米散用支配事、

合所當參佰陸拾壹斛伍㪷之內、

南杣分二百廿石、

黑田村百四十九石一斗四升、簗瀨村三十七石八斗六升、薦生村三十三石、北杣分百四十一石五斗、湯船村四十六石二斗、玉瀧村七十三石、玉瀧寺七石三斗、內保村十五石。

右件御封員數、鞆田丸柱等停廢之後、近來使補之例、大略注進如件、

治承五年六月二日

權都維那法師嚴信

都維　那法師覺永

權寺主大法師定元(覺イ)

寺主　大法師暹覺

權上座大法師永俊

上座威儀師大法師玄嚴

年號未勘

○東大寺年預五師房附狀

伊賀國郡家庄申良寶法印、掠賜禪林寺殿

勅裁、放入使者於庄家由事、以牒送之趣披露衆中之所被衆議偁、兩寺舊好誠不淺、一庄顚倒所驚承也、依之貴寺既寺社閇門剩被交山林之上、當寺同寺訴達闕遲可顯對强之條、於彼法印者、專爲兩寺之讎敵、爲佛法之魔障、早可被(虫喰)遠流之旨、致沙汰之日、若及遲々者、大佛大殿閇樞　勅事　勅願可拋、此條更(虫喰)豫儀之旨、群議如斯、以此旨可令披露衆中、恐惶謹言、

八月六日　　年預五師

○東大寺宿老列參事書

寺領伊賀國惡黨退治事、依及數年之大訴、仁木典厩被補守護職之後、凶黨悉失邪威、寺領漸復舊儀之處、北伊賀惡黨等、交名載別紙先進、失寺領押妨術計之餘、去比作立十八ヶ所僧、雖及守護停廢之企、無御許容之條、寺門一重雖開愁眉、張本罪科事、以去年窮冬御事書之下、連々訴申之處、不事行之間、彼凶徒等誇于御沙汰之緩怠、竹屋又太郎保顯、捐木絲太郎(マヽ孫カ)左衛門尉光保、彌平太左衛門入道道現、村田左衛門三郎賴保、大學助經保、村木彥太郎不知實名、兵衛四郎入道空觀、長田中務丞師保、河合新左衛門尉重家、以下輩、去月亂入(衛カ)當衛代奉寄地、山田庄幷內保庄等、別苅田狼藉(剩カ)、結句群參京都、就致守護違背訴、猶被經再往之御沙汰歟云々、凡伊賀國之治亂、有偏當當寺社之興廢也、如今御沙汰者、一寺之滅亡極此時者哉、抑宗廟兩三年御在洛、衆侶雖拭悲淚、今春歸坐之後、適擺社壇之塵、再挑法炬光之處、依凶徒之秘計、被閣罪科之沙汰間、若輩不堪鬱陶、可奉勸神輿動坐之由、雖及散々之企、纔經九ヶ月、靈神之遷御殊歎存之間、宿老等暫加制止、所申入事子細也、爲國爲寺豈無御驚歎之儀哉、所詮彼北伊賀交名人等、速可處罪科之旨、被成遣御教書於守護方、且又彼等無所憚、令出仕于公方上者、被召捕其身、欲行嚴密之刑罪矣、御

沙汰猶及豫儀者、若輩重令頂戴神輿之條、不可廻踵者哉、宿老事書如斯、

○某至尊綸旨

伊賀國在廳官人、與寺家所司訴申黑田玉瀧兩庄加納田官物率法斗代事、所司等尙欝申旨候之通、依聞食、重被對問申處、兩方陳狀如此、於今者早任證文、取被下知候也、委旨以御使忠行所遣候也者、依御氣色、執達如件、

六月廿日　　豐後守季兼奉

謹上　勸修寺法務御房（德カ）

○天延二年東大寺衆徒奏書

東大寺衆徒等重誠惶誠恐謹言、

請殊被　恩裁、寺領伊賀國黑田庄惡黨淸定、淸直、本所違背、供料抑留、山賊强盜惡行重疊間、及數年大訴、所載配國名字可蒙　仰由、武家申上者、今明急可流遣隱岐佐渡薩摩三ケ國旨、被降院宣狀、

右謹考案內、今此惡黨流罪之條、度々被仰下之間、載配國名守（字カ）可申成　院宣之由、武家評定畢云々、於當參淸定淸直二人者、今明急令遠流之、於逃隱康直者、懸預人等令搜索、召取其身欲被所于流刑、但彼康直日來雖示晦踪之由、於今者今（令カ）經廻國中、令縱橫庄內之由風聞、預人等不召出之條、引級緩怠顯然也、所詮令注進關東、可罪科預人等之旨欲被　仰下、凡今此凶類斷罪遲怠之間、傍輩不恐皇憲、不憚武威、爲寺家爲庄家、致蠢害致不忠、是併最張本等配流遲々之故哉、五ケ年之群訴、于今不達、今明急欲被流罪彼輩、望請　恩裁任申請可流遣彼三箇國之由、被降

院宣者、凶黨赴配所、寺門休鬪訴矣、仍重誠惶誠恐謹言、

被衆徒合議偁、寺領伊賀國黑田庄惡黨金王兵衛尉盛俊江次郎入道禪道、平太入道明心以下輩事、抑留寺用米殺害八帳宮神人、刄傷御輿所善住法師之條、重疊之惡行依純常篇、破却住宅、可召進其身之由、度々雖被成下嚴密御敎書、御使服部右衛門太郎入道持法、當國守護代常茂等、恥惡黨之賄賂、去年七月二日乍賜預嚴密（于カ）御敎書、既涉兩年雖經數月、早今不入部之條、私曲奸濫之至、誠而猶有餘者哉、是併惡黨等以年々抑留之寺用米、致秘計之故歟、將又恐權威歟、倩案傍例、先年興福寺召流大和國二十人惡黨之時、如今依使節之如在室送年序之刻、任彼寺申請、及關東御注進之日、使節罪責致嚴密沙汰畢、然者任彼例、以使節罪科之篇、欲被經關東御注進、不然者惡黨之對治不可有其期者也、凡當庄者、本願勅施入之寺領、一國不輸之寺領也、十二大會以下恒例臨時之　勅願、惣寺別宮之課役、偏以當所支來之所、一圓進止之土民等、敵對本所、惡行狼藉之間、大佛殿長日之佛聖燈油、八幡宮御供同燈油等、百口學侶時折、唐禪院（鑒眞和尙聖照、僧正堂良辨僧正護摩壇、二聖經カ）寶前、長日勤行之供料、本願皇帝御陵御誦任、戒壇院之僧辨料、三十講捧物已下、重色無雙之年貢、顯密修學之惡劇、悉以抑留其足、既及三千餘石之間、寺家之衰微可足賢察、然間欝訴及數十年、武家被經御沙汰、一卷御敎書案一通、惡黨人交名備進之、於覺舜淸高入道已下五人者、雖有配國之號、則悉令歸國、重及惡行之條、前代未聞之珍事不日被召出其身、速可被斷罪者哉、云彼云是、常茂持法等令內通於惡黨、不及嚴密沙汰之故也、然間五百餘歲一圓寺領、爲惡黨被沒（沒倒カ）例畢（彼カ）、天下安全之誠祈令退轉之條、爭不被歎思食哉、抑又役輩者强竊二盜之張本、都鄙無雙之惡黨也、不恐其罪之間、犯每度露顯、申　公家訴武家時者、被縣本所雖有沙汰、敢不拘催促之間、不能召出、是又非寺誰人無沙汰哉、加之以當國隣國諸人所領者輩押領之條、不知其數、所詮早權守護幷持法者、爲傍輩向後被改其職、被所罪科、於惡黨斷罪者任法、被經嚴密御沙汰、有退治之實議者、爲寺門爲天下、專可爲善政之由、預關東御注進、斷惡黨之餘胤（胤カ）、致寺領之靜謐（謐カ）者、彌抽長日不退之懇誠、奉祈萬年無疆之巡運（運カ）、衆徒合議如斯矣、

天延二年（天德カ）六月日　　年預五師顯寬

○長部延利言上狀

東大寺御領伊賀國黑田庄住人長部延利言上、爲同庄住人宇齋宮末守（マヽ）審記（虫喰）訴子細事、

件之者、當御庄住人兵衛尉貞房種々反當（マヽ）惡行依非事、蒙武家御勘（氣カ）（虫喰）、其身之一類被削跡畢、而庄家恐後勘、反可入居如此輩之由書起請之所、被（彼カ）未守審之訴仁貞房之子息護持制者於隱置之由有其聞、猶又其比地頭舘中之家二宇、僅留守者許令居之所、放火事出來（殺カ）、結塞門戶、資財雜物、幷牛生類物、併以擯致畢、是則依爲貞房之舊宅、思其阿黨、被護持制元所爲之條、更以無疑歟、仍且庄家起請文之旨、且權斷之身也、爲後之恐搦取彼審之所、本寺執行代幷庄官等令議云、所搦取尤有其課畢、位（依カ）先例被（彼カ）資財雜物等致追捕令、各々

分取畢、其後經兩三日、彼審俄號東大寺護守八幡宮神人還衆徒御鴨依訟訴、自寺々遣使者、延利之住宅幷家二宇已燒拂畢、舍弟等之住宅二宇者、以代物請留畢、其外公私資財雜物牛馬所領等、悉所被追捕、默(點カ)一宇住人(虫喰)誄中門裏所司賢う申云、大和國仁所被之地頭等、不應衆徒心之間、住徒雖令誄雜(罰カ)、全無其沙汰、是又聞原歟、若有立合事者、無子細中門法花兩堂令與力、進(追カ)罰之由、號有(虫喰)知、如此令燒失追捕畢、抑末守(虫喰)者爲頭之殿又共被催閉所、年來雖罷過、一切不爲神人、又不知其由、始相尋子細末守申(虫喰)去年八月雖罷入神人、末賜任符云々、然(虫喰)非本神人、新加神人停廢之條、(虫喰)吏雖不可用、募神威如此搆申之間、不及善惡、令放免畢、此條本寺御使等所令見知也、已此事以萬雖一言不申神人之由、今(虫喰)之趣(歟カ)顯然者也、一々子細披陳如斯、但爲致虛言之御不審、制起請文言上如件、

○官使下文

下遣伊賀國官使貞道等、

可且停止非法、且誓催廻東大寺領黑田杣內簗

○瀨村　分人夫事、

右件人夫沙汰之間、且停止非法、且誓可催廻之狀、所仰如件、不可違失、故下、

○東大寺三綱解狀(正治二年)

東大寺三綱等重解、申請殿下政所裁事、

請殊蒙　恩裁、早且依舊規先蹤旨、且任證文重疊理被停止龍穴寺所司等相論黑田庄與長瀨庄堺子細狀、

副進　證文案等、

一通寬治二年國司廳宣、

一通同五年寺牒外顯國判、

一通長治元年留守所下文、

返上龍穴寺所司陳狀、加常寺本解、

右三綱等重檢案內、彼所司等陳申之旨、併有詞無理、先彼陳狀之黑田庄者、伊賀國西端也、長瀨庄者大和國東端也、然者兩庄堺者兩國堺也、(然カ)(虫喰)者此條似實事而矯餝也、件兩庄非一向之東西、大旨者是南北也、黑田庄者在東北、長瀨庄者在西南、所各別也、堺分明也、隨則黑田新庄爲國領也、昔郡司近國有指功勞之刻、永宛行龍口鷹尾等也、日國司廳宣云、於田野木屋者、代々御材木之津也、依二(一カ)宗之恐非免除之限云々、其上長治元年成留守所下文畢、二通案文進覽之、田野木津稱以爲伊賀國之條顯然也、隨則自國領之旨々(マヽ)干庄號之今

近國近俊依方無後四代相傳、敢無相違、而長瀨庄住人(之カ)遙越入堺內、擬押領字唐懸田地也條、未曾有之謀略也、加之去延久之比國司依收公庄田三町五反、寬治五年所請免除國判也、寺牒同六年被成依請之外題ノ案文、進覽之、唐懸三段也、彼三町五段之內也、其後數十年之間、令無國衙之收公、況於長瀨之濫妨哉、而今企非論之條未曾有之事也、田地領掌之道、以文契爲先、三綱者曾捧三通之證文、勘進舊規、所司者猥綴縱橫之言詞、以(カ)巧申今案理非之間玄(虫喰)者歟、至于次下之陳狀(虫喰)併無實、悉矯餝也、不足披陳歟、就中以齋宮歸京之橋、稱申兩國堺之處、西度高脇幷齋宮歸京之大路邊田畠、載寺牒請國判畢、已以爲伊賀國之條顯然者歟、於被下陳狀者、所及言上子細、所司等之非據、以先條之虛僞、忝可垂賢察也、望請恩裁早(マヽ)、

○藤原某寄附書

相傳庄壹處事、

在伊賀國名張郡宇中村、

東限山、南限矢川、
四至、西限宇陀川、北限方田繩手、

右件庄、從親父藤原朝臣保房之手相傳處也、而依有各便宜、相博進東南院僧都御房御領、大和國城上郡北鄉大神庄拾五町肆段百捌拾步之處也、但於親父處分帳者依相載尾張國石田庄、不能副進、其旨面少已畢、仍相副調度文書等、永相博進之狀如件、

長承元年正月十三日　　藤原

○左近將監長時附狀

伊賀國御家人名張左衛門入道々證申、爲東大寺領黑田庄預所藏人法橋、燒拂住宅幷下人小屋等、被點定作物由事、守護人千葉介狀(副重)申狀、進上候、此事御家人訴候之間、度々雖相觸彼法橋者、依不事行候、先日申入(虫喰)報々(虫喰)樣可存知(虫喰)御房入寺候者、有申御沙汰可蒙仰候歟、恐惶謹言、

九月三日　　左近將監長時

進上

新院僧都御房

○八幡宮神人附狀

黑田庄八幡宮本神人等謹申、

右子細者、於八幡宮本神人等儀者、臨時課役等、依御寺御業儀候、蒙御免狀候、委細事御免狀見候、如此候上者、於臨時課役等儀者、本神人廿人者、不可宛課之由、以前如申入候、惣寺被執申候可然候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

八月廿四日　　黑田庄本神人等

謹上　　神主殿　御宿所

○年預五師附狀

當國黑田庄惡黨覺舜、清高、道碩以下輩惡行事、重御教書進之候、近日殊遼行過往日之上者、改有か(マヽ)不可被圖之候、早任被仰下之旨、可有其沙汰候哉、承定日可付進宛所人はせ滿事衆議所候也、恐々謹言、

三月廿日　　年預五師賴昭

謹上伊賀國守護代殿

服部右衛門太郎入道殿

名張郡之內當寺領之儀付、預御使札承仰不存疎意候、猶以當國拜領之樣子御才覺候、御肝煎肝要候、此所彌一國平均御成候、不可有御得失候、依青銅百疋御□□畏入候、令預御披露候、恐々謹言、

九月廿日　　筒井順慶(花押)

東大寺年預五師御房

名張郡事、依本所執申、無爲被仰出候、先以畏入候、隨而郡內者共以連判御請申候上者、向後不可有無沙汰候、萬一不法懈怠子細候者、爲本所可被加罪科候、於私不可存等閑候、以此旨可預御披露候、恐々謹言、

十一月廿四日　　澤伊豫守廉滿(花押)

飯尾大和守殿

長瀨庄與黑田庄堺事、其後不被申子細經數日候、何樣御事哉、於今者遣氏院使、可被糺定其堺、可令存其旨給者依殿下御氣色執達如件、

十月廿六日　　左衛門改(マヽ)爲保

東大寺別當法印御房

黑田庄夏燒鄉事、去年被下中川黨　綸旨以符、今被尋藏人權佐候之處謀作御出對仕候上可被糺明之內進請文候、就之重被申　綸旨之旨謀書之各之寺領龍島(マヽ)其科重疊候間、於現蓮之(マヽ)擯出寺張被行嚴密之重科候也、以此趣可令披露滿寺給之旨、御氣色之所候也、恐々謹言、

五月九日　　年預五師御房　　矢□□

○阿波莊最勝講供料事、

右付年々未下、差下寺使於庄家、可糺明奸謀之實否之旨、供僧之訴訟及多年、凡大小諸供料、逐年無正躰之條、不限此料所歟、殊更伊州惣別之寺領、大略令顚倒之段、亦以無不審者歟、而至阿波庄及嚴密之訴訟之條、太以不得其御意、若依供料之米下、可及新儀之評定者、不可限最勝講之供料歟、而於餘方者、末及如此之訴訟至當門跡御管領之地、及每度嚴密之沙汰之條、豈非偏頗之評定乎、然而爲供僧多年之愁訴、又去年去々年命未下事、大方兩年地下之錯亂、專當預所彥四郎康遠、每事緩怠之段、是亦雖無其隱、供料未下、令超過于前々之間、供僧不審彌增其色歟之間、以寺使糺明事被免許畢、此段於門跡者無先規、於餘方者雖无傍例、偏供料事依被思食、異于他被閣萬事御許可畢、既達多年之訴訟之上者且悅申入門跡之御沙汰、急速可及其沙汰之處、重如評定者、被召上古老之百姓等、可相尋前後參差之沙汰、不得其御意者也、如今者訴訟無其期之上者、無處于御沙汰者、畢竟被召上百姓等事、以往猶以不輒、何況於當時乎、就中直被召百姓事者、對給主被殘御不審時事也、而有先規御下知、猶以不承引申、乎應給主違背之御下知、可召上百姓等乎、若非給主所存者、更不可參洛(ヵ)路者也、設又雖參路(洛ヵ)、一庄百姓之進未進中可存知哉、若又爲被明引手寺之奸謀、可召上之由有御下知者、爲給主可致糺明、被召百姓之段、背先規之由可申之段勿論也、於此段者其理必然之間、重不可及御問答、只參差之御問答、而不可事行之上者、爲門跡爲供僧、不可有詮用之由、可有披露供僧中者哉、

東大寺雜掌弘惠申候、伊賀山田本庄事訴狀如此、服部北田入道、高畠平六、山田十郎左衛門尉以下濫妨云々、太子可然、早停止彼等妨、沙汰付下地於雜掌、今月中可執進請取狀、若不叙用者、載起請之辭可被注申、令緩怠者、可有殊沙汰之狀、依仰執達如件、

觀應二年四月十九日　　修理太夫在判

千葉介殿

○曆應二年東大寺領伊賀國庄々注文

簗瀨庄、阿波庄、山田有丸庄、廣瀨庄、湯船庄、內保庄、新別符、馬野村、富永庄、

○東大寺古文書記錄所目錄

一玉瀧杣、

一卷　天平廿年以後國判、五枚、

一卷　天平神護二年國郡勘定、五枚、

一卷　貞觀八年施入帳、二枚、

一卷　昌泰二年券、五枚、

一卷　玉瀧庄券文、十三枚、

一卷　天祿四年玉瀧杣四至定文、六枚、

一卷　玉瀧杣內四ケ村正稅免除國判、四通、

一卷　天德應和　官符、三枚、
一卷　玉瀧庄券文、十三枚、
一卷　同庄券文、十枚、
一卷　同庄券文、七枚、
一卷　天祿二年以後湯船庄券、四枚、
一卷　永祚正曆代々國司勘免、八枚、
一卷　天喜元四年　宣旨、四枚、
一卷　天延二年以後村々所堂寺家寄尊勝院代々長吏免判、廿七枚、
已上十五卷

先日伊賀國司訴申、鞆田司加納事、お所載壽永院廳御下文之六十餘町者、國司任彼裁斷已避申歟、押領之外寺家陳狀不分明、早可令獻詮文候之由、御氣色所作也、仍執啓如件、

後七月六日　　左衛門權佐在判奉

謹上　東大寺別當法印御房

進上

東大寺玉瀧杣官符二通、同公驗一卷、副本解、

右只今行重依罷出候、乍驚返進候、不可陳申左右者也、恐惶謹言、

六月十日　　權中納言顯隆

玉瀧杣內鞆田湯船二村事

右正盛有所申候、就者可爲寺領之證文、可尋叡由、依院御氣色、執啓如件、

八月十日　　左中辨(花押)

謹上　東大寺律師御房

就山門再興之儀、甲州越州南方其外諸國相調候之條、急度可及行候、此旨八箇寺江一札申入候、貴寺之儀別而御入魂所仰候、并御壇那中江以別紙雖可申入候、其案內之儀候之間、可然樣御才覺可爲喜悅候、恐々謹言、

五月十二日　　別當代在判
西執行代在判
執行代在判

佛大寺年行事御房

三國地志卷之百 終

三國地志卷之百一

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

阿拜郡

○天平勝寶元年券文

柘植鄉長解　申常地(當カ)賣買墾田立券事、

合田肆段壹佰捌拾步、柘殖鄉、戸主車持首牛麿墾田者、

付價五貳貫貳佰伍拾文、二段充五百六十文、二段充五百六十五文、

九條三里廿五、小川原田壹段、今治　二段百八十步、廿六、小川原田北西田壹段、今治者、

右田得買東大寺已訖者、依法立券如件、仍具注狀以解、

天平勝寶三年四月十二日　　賣人車持首牛麻呂

取券

大領從六位下敢朝臣安万呂、擬主帳稻置代首宮足、國判聽許已訖、

天平勝寶三年四月十三日

從六位上行目勳十二等山部宿禰鳥養

正六位上行守池田朝臣足麻呂

□四年三月申う　　不入先文

通分

以前墾田賣買人、依法式立券者如件、仍具錄狀申送以解、

天平勝寶元年十反十一日(月カ)　　御長桃尾臣井麻呂(左手食指)
田主敢臣安万呂(マヽ)
證人　王生少椀同姓

○同券文

阿拜郡司解　申賣買伯姓當地墾田立券事、

合田肆段壹佰捌拾步、柘殖鄉、戸主車持首牛麿墾田者、

付價五貳貫貳佰伍拾文、二段充五百六十文、二段充五百六十五文、

九條三里廿五、小川原田壹段、今治　二段百八十步、廿六、小川原田北西田壹段、今治者、

右田得買東大寺已訖者、依法立券如件、仍具注狀以解、

天平勝寶三年四月十二日　　賣人車持首牛麻呂

取券

大領從六位下敢朝臣安万呂、擬主帳稻置代首宮足、國判聽許已訖、

天平勝寶三年四月十三日

從六位上行目勳十二等山部宿禰鳥養

正六位上行守池田朝臣足麻呂

□四年三月申う　　不入先文

通分

○天平寶字二年券文

伊賀國司解　申賣買開田地立券文事、
合地壹拾町、（開田四段、東界朝宮谷、南界驛道、西南畠九丁六段、限角界藤原夫人地、北界山嶺道、）
價錢玖貫文、
右在阿拜郡柘植鄉、左京四條二坊正五位上市原王之地如件、此今爲東大寺家通分買得已訖、仍依式立券參通以一通爲國案、以一通爲郡案、以一通付寺家案、
天平寶字二年十一月廿八日
從六位下行目高屋連朝集使
正六位上行守六人部連佐婆麻呂

○天平神護二年田簿

伊賀國司解　申檢定東大寺田幷地事、
合地卌町二段百一斗、歩數下倣之、
田廿八町二段百一斗、
廿六町八段二百八十斗、　立券所買、
一町三段百八十一斗、　買後所開、
八町九段二百六十八斗、　通分
八町四段四斗、　所買、
五段二百六十四斗、　今開、
十五町九段廿九斗、　不空絹索幷訪料カ
十五町四段三百十斗、　所買、
四段八十八斗、　今開、
三町三段百六十四斗、　律供分、
二町九段三百卅五斗、　所買、
三段百八十九斗、　今買、
地十二町、買爲通分、
右目錄如件、
通分田八町九段二百六十八斗、五段二百六十四斗今開、
阿拜郡
八條四里卅一、長山田九段百歩、
卅二桃原原南西田二段卅二斗、
五里五桃原中西田一段百卅四斗、
六長山北田二段二百八十斗、
七里山田二段百八斗、
十七池段南田二段二百廿二斗、
廿池段田三段百卅四斗、一收三百卅四斗、今開、
廿九池段甑田二段山九十四斗、
卅二池上田三段、一段今開、
六里五池上北田上口田三段百斗、百歩今開、
九條三里廿五小川原田三段百八十斗、二段百八十斗今開、
廿六小川原田北西田一段、
四里一大川原田七段二百八十斗、

二大川原西田五段三百十二斗、
十一茅原田五段百八斗、
廿五山田北田二百八十八斗、
十條二里七畝カ川田南田二段二百十四斗、
十八畝川田七段、
十九畝川北田三段八斗、
卅六殿西田一段二百卅斗、先爲公田、今改無之、
五里廿川原田南田一段百六十斗、先爲公田、今改無之、
廿九川原田七段百七十八斗、
卅道祖田南田百十斗、
卅一道祖田五十斗、
卅二小俣南田一段二百廿斗、
十一條一里十二畝、川南田百六十斗、
十三畝、川荒治田四段十斗、
廿四櫻小田東南田二段十六斗、
廿五櫻小田一段、
右已上通田者、
不空絹索菩薩御料田十五町九段廿九斗、（四段ひいは斗、今開、）
阿拜郡十町三段百九十九斗、
八條三里廿五櫻小田六段六十六斗、
廿六河布理田四段、
四里卅四大見止呂北田四段、
五里三桃原田二段百六十斗、百六十斗、今開、
九條四里十二大川原田北田四段二百十斗、
十三茅原田六段百七十三斗、
廿四山田一町、二段今開、　上
十條二里六凩□段田六段二百斗、
七漆七乎段北田八段、七十二斗、今開、
十八加知西田百斗、
十一條四里漆一生小田一段二百七十斗、
二横佩東田一段百五十斗、
十一漆生小田西北田六段三百五十四斗、
十二漆生小田北田七段三百斗、
十松原東田三段百廿斗、
十五松原東北田二百五十斗、
十二條七里十六雨夜田一段二百斗、
八雨夜西田五段六十六斗、六十六斗、今開、
九雨夜田二段、
十八條三里五大張西田五段、一段今開、
八川原東田七段、
十八川邊西南田百斗、
十九條一里十六冠手西田八段、

伊賀郡田五町一百九十斗、
十四條五里三埴田西田一段百五十斗、百五十斗、今開、
四古家北田二百斗、
五古家田一町、
八古家西田八段百六十斗、
十五條五里廿三楯田西田一町、
廿四神田西田一町、五段先爲公田、今改無之、
十六條四里十六古家北田五段百斗、
十八大豆田西田二段、
十九條十三里廿一年又原東南田七段三百斗、一段三百斗、先爲公田、今改無之、
右已上不空絹索芹御田也、
律供分田三町三段百六十四斗、三段百八十九斗、今開、
阿拜郡
十條五里卅二川俣南田三段七十斗、
卅三隱郷田一段百卅八斗、國司取无（トリナシ）
卅六桃池田一段廿一斗、廿一斗今開、國司取无、
六里六伏見田南田一段、
七伏見田三段百斗、
十八伏見北田一段二百九十五斗、
十九條四里廿九野田東田五段六十斗、

卅二駒田三段百九十斗、
十八條三里七川原田三段、一段今開、
八川原田一町、二段今開、
已上律供分田足
以前田以去天平勝寶元年買爲寺田、而天平寶字二年國司守正六位上夫人ヤ連鯖麻呂、就天平元年圖勘取件田今依天平勝寶六年校圖幷券文改正如前、仍具注事狀謹解、
天平神護二年十二月五日　正八位下行目都努朝臣長殖
從五位下行守勳十二等久米朝臣子虫
校田使
小寺主傳燈進守法師參天（マヽ）
小都維那僧懺教
造寺司判官外從五位下美努連奥大万呂
算師造寺司史生從七位孔立（マヽ）判万呂

○天德三年官牒
太政官牒東大寺、
應永爲寺家所領、停止入造他所材木玉瀧杣事、
在伊賀國阿拜郡、
右太政官今日下伊賀國符偁、得彼寺別當權律師法橋上

人位光智等、去七月廿五日奏狀偁、謹撿案内、東大寺者聖化之所構、西寶塔者神功之所爲也、仰則彌高穿白雲而眼眩、量則玄眇窮蒼天而心迷、本願之昔猶記其妙、末代之今何致斯功、光智等蒙勅宣之後、且幕只焦肝、出入無他念、寢食思此事、依木工寮支度心柱三本、被充山城攝津兩國也、七重材木、大和紀伊伊賀近江丹波播磨安藝等七ヶ國可造進之由、給官符先了、而件九ヶ國申返不堪之由、無造一枝之材、頻雖給催責之官符、更以無承引之、國司諸國共不合力者、寺司廻何方計乎然而依恐勅宣、請取伊賀近江兩國封米、差遣前造齋宮使判官掃守有貞、人件玉瀧杣、造撓心柱三本幷第一二層料材木也、就中心柱三本、以去六月廿日引着塔壇、以七月廿一日構立既畢、兩國封米所請八百七十餘斛也、所造心柱幷二重材木所用之米万一千卅四斛餘也、以彼封米推此料物、雖實不當百分之一、更廻他方術、且所勤仕也、削平峻巖、作撓材木之大路、堀通曲谷、爲流桴筏之巨川、數百餘町、其程遙遠、千万人力、其功難量、今殘五重材木、一向可造件杣、抑件杣本是蔭子橘元實之所領也、而以去年十二月十日、元以施入寺家已了、其施入文云、件杣元是元實等先祖之墓地也、累代子孫相傳守領其來尙矣、經年之間、樹木上繁、自爲杣山、爰延喜御代造東大寺講堂之時、被造運件杣木也、當於爾時元實注先祖墓地之由、愁申公家之日、天恩早降免除先了、既省庶人之競切、全守先祖之舊墳、於是元實幷族類等、不久遭於災禍、各以浮浪他國、定知申妨彼講堂料材木之所致也、適從遠國還向之日、尋事案内、東大寺幷修理職冷泉院雲林院等、料材木各給官符、造運件杣、其官符云、件杣私人所領也、宮城修理之間、給官符今造用云々、無力愁申私歎之間、樹木漸切掃、墳墓作露地、不若永奉施入御寺、令得先祖菩提之道、兼免元實禍殃之祟、仍施入如件者、寺家所司五師大衆共、於大佛寶殿奉納已畢、國宰郡司承知亦了、然則寺家領掌件杣之旨、非無由緣、今臨寶塔造立之時、彌知佛神催入之由。今修理職冷泉院、雲林院等料數千材木、造運件杣之間、樹木漸盡、殘木拆幾而傳承、又法性寺諸堂材木、可被入造件杣云々、謹撿事情、法性寺者是新御願、其寄尤重、所用材木亦非長大、仰造諸國非可背申、東大寺者是古御願、世人隨輕所造材木亦極大長、諸國申返既不承引、寺司貳勅獨以何爲、然則件寶塔料數万材木、自非此杣有非可造遠國、若彼多處入造一山者、塔材木未採之前、山木先以盡歟、非唯御願之難斯兼爲寺家之事費矣、望請殊蒙天恩、任彼本主施

入之志、被止入造他所材木、將爲寺家所領之杣、一向進力造運件寶塔料若干材木、光智忝戴鳳詔、始構應塔、唯依聖德如雨之澤、可期浮圖不日之功者、左大臣宣、奉勅依請、縱修理宮城之間、勿聽修理職之入造者、國宜承知、依宣行者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、

天德三年十二月廿六日　　正六位上行左少史秦宿禰名頓牒

從四位下行左中辨兼內藏頭藤原朝臣

○天德三年官符

太政官符伊賀國司、

應永爲東大寺所領停止入造他所材木玉瀧杣事、

在阿拜郡、

右得彼寺別當權律師法橋上人位光智等、去七月廿五日奏狀偁、謹撿案內、東大寺者聖化之所構、西寶塔者神功之所爲也、仰則云々（已下與前文同、故略之、）可期浮圖不日之功者、左大臣宣、奉　勅依請、但修理宮城之間、可聽修理職之入造者、國宜承知、依宣行之符到奉行、

天德三年十二月廿六日

○天祿二年湯船庄券案

（標紙袖書）件湯船庄券、鞆田相論、明法勘文引寺領證、仍如玉瀧文書耳、

正文在東南院、

阿拜郡司解　申言上立券橘貞子名庄并山地等事、

合壹處、（號湯船庄、）在阿拜郡川合鄉、

四至、東限小穐川、南限藤川、西限高穐山峯并二俣穐、北限國堺、

右被去安和三年三月四日國符到來偁、橘貞子愁狀偁、件庄元故文懷朝臣所領也而被依朝臣敎命男元景元興元實元方等共連署、相副本公驗充給貞子舍子等已了、而元實之男輔弼暗以於妨、望請被下符在地、郡任公驗被立券、將絕相論者、所仰如件、郡宜承知、勘會調度文書、若有理立券貞子（脫乎）名言上者、依國符并右大臣殿御告書等旨、召問輔弼無隨身公驗隨卽無所避申進過契避文等已了、然則貞子得理尤分明也、但庄田町段步數坪付、具注代々本公驗、加以件四至無田地山等此申同見也、仍不注申厥坪付等、今勒事狀立券於貞子名言上如件、以解、

天祿二年五月廿二日

郡判　以永承肆年十一月廿九日

行事阿閇朝臣在判　一男化畧觀御處分□□

國司代阿閇朝臣在判　在判

阿閇朝臣在判

國司代阿閇朝臣在判　掾在判

阿閇朝臣在判　權掾在判

少領阿閇朝臣在判

國判

介藤原朝臣在判

○永保三年廳宣

廳宣　柘植鄉收納所、

玉瀧御杣官物沙汰事、

右件御杣官物、以見米二斗可辨申之由、先日從御杣所令申也、而便補御封□□不可有見米者、早以輕物可令辨申之、拾三斗責者、可停止之狀、所宣如件、以宣、

永保三年十二月廿日

大介藤原朝臣（花押）

○万壽二年湯船莊案

威儀師仁滿謹拜　申請　大僧正御房御裁事

請被賜作刀於東大寺司、任前例如本令記堺四至相傳可領伊賀湯船庄四至內、致分取御寺所領玉瀧御杣上毛田村石安愁狀、

副進前勘文并御判、

右謹撿案內、件庄以先年　御室於內供物御庄彼寺官長之間、御寺使入亂四至之內、號玉瀧御杣之領、勘嶽地子之間、日故中滿法師爲其時領主愁申御室、隨卽下賜作事於御杣刀等扶令勘舊例之口無先例如此之責由勘申已了、任勘狀急除云山判又了、其後无地妨領掌、而任數年之間四至扣已朽撿先改力之回被分取件上毛田村爲愁莫過於斯、望請　御室裁賜作力於寺門、任前例如本、被令糺堺四至者、將知正理之貴、仍注事狀以解、

万壽二年五月十四日　　威儀師在判

件威儀師仁滿所愁申湯船庄事、去正曆之比、爲彼寺門之時、任所帶公驗并杣司勘狀、勘免旣了、而近代令致妨之由云申者當時司早差遣寺家使、如舊令糺四至、任理雖領掌、是則寺家上雖力有可知行宣旨也、仍重與判制如件、

大僧正在判

○天喜四年玉瀧杣解狀

（標紙裏袖書）保安年中忠盛朝臣鞆田予野兩村相論法家勘文、寺家證據多以引之、

寺領庄々出作公田官物見米段別二斗證文等多見之

玉瀧御杣湯船鞆田等四村工等謹解、申請本寺政所恩裁事、

請被殊任　道理、奏聞事由於公家、令杣工等安土各村々愁狀、

右御杣村々工匠等謹撿案內、件杣村々爲御寺　御領經數百年、專無如此國司之妨乎、而當時國司背於舊例、恣燒亡杣人之住宅、損滅所作之田畠等、不令安土者、杣工等文跡於山林難勤仕御寺、例役、殆可亡身命乎、然即國司　所爲甚以左道也者、杣人等爲愁莫過於斯、望請　政所　鴻恩早任道理、奏聞事由於公家、速令杣工等安土各々村々者、將仰　舊迹之貴、仍注事狀以解、

天喜四年三月十日　　御杣工等近江右忠

藤井有式
紀　光左
三蘭正則
尾張有友
頭領山長重正
別當僧　朝齋
惣別堂僧增仁

○天喜六年玉瀧杣司解狀

玉瀧瀧御杣司等解、申請　本寺政所裁事、

請被裁下鞆田湯船兩鄉子細狀、

右謹案事情、旣前司任中皆爲被燒掃、住人工等劍跡不見來候、以今年正月被下仰宣旨之由、官使共被打立牓示、因玆故住人等頗出來、荒野切開雖耕作、國　使頻罷入、可出國役申文之由連日也、因玆田堵工等捨鋤鍬、各抱歎、望請　本寺裁定、且廻安堵之心、兼又國司被仰下、將企一定之計、仍注事狀以解、

天喜六年三月廿九日　　別當賀茂延安
惣撿校賀茂眞末

○延久元年廳宣

廳宣　東大寺玉瀧御杣司、

可早進上御杣本公驗事、

右去治曆五年三月廿三日、下五畿內七道諸國官符偁、寬德二年以後新立庄園、永可停止者、加以雖往古庄園、券契不明、有妨國務者、嚴加禁制、同以停止者、官符到來之日、早可進本公驗之由、先日雖加催、于今不進上者、重所仰如件、嚴制重疊不可延怠、故宣、

延久元年閏十月十一日

大介藤原朝臣（花押）

○平忠盛案

此下文乃狀爾、下　鞆田御庄爾と書は、承德爾所打取之十四丁八段百八丁歩也、次に東大寺御領鞆田庄家訴申と云は、立券之外四十餘町也、件十四町八段餘乃相論未切以前殘乃四十餘町、募被威不隱寺家、仍其時乃別當勝覺僧正、依被囑其子細於忠盛朝臣之許、忠盛所成送此下文等也、然而不用家貞等之、遂被押籠也、右者張帋記之、

○從備前守之許送寺家解狀

鞆田御庄住人等解、申請　本家政所　裁事、

請殊任　道理被裁定給乍攺東大寺便返抄、今年自寺家八十石御封米、可辨濟國衙由、被切出不安子細狀、

副進結解二通、

右住人等謹撿　案內、當御庄爲東大寺御杣之內、以出作公田官物、被切宛彼御封、勤寺役寺役之間、罷成院御領之後、雖勤御庄役、於彼御封米者、如本請募辨濟寺家、此中貧弊之民、相寺使擬令致沙汰之間、依无其催自然以來進、而自寺家背前例、八十石米被除之條、未知其理、望請　政所御裁、被示送寺家於此由、當年八十石被越入給寺家之使、辨濟封戶、於其殘者、進濟國衙歟、仍爲蒙裁定注進如件、以解、

天永二年十二月十四日　　石　道

佐　肝（花押）
中　臣（花押）
檢　前（花押）
僧　（花押）
僧　（花押）
僧　（花押）
仕　□（花押）

小長（花押）
萬于（花押）
僧（花押）
壬生（花押）
藤井（花押）
泰（花押）
營立（花押）
安州（花押）
多次（花押）
坂上（花押）
僧（花押）
僧（花押）
和氣（花押）
藤井（花押）
日牛（花押）
林（花押）
僧（花押）

按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百一　終

三國地志卷之百二

伊州司城　藤堂元甫纂

伊賀國　舊案

阿拜郡

○永久三年長者宣旨

應令東大寺進上證文、寺領伊賀國玉瀧杣內字鞆田村分田陸拾餘町、幷杣工肆拾餘人、混合六條院御庄事、

右得彼寺去二月廿四日解狀偁、謹撿案內、玉瀧杣者、自天平年中以降、爲寺家領歷數百年、雖無指免田、以杣工作田爲雜役免所勤來也、所謂玉瀧村廿町、湯船村十五町、鞆田村六十餘町、杣工玉瀧湯船等村十五人、鞆田村卅人也、代々之間敢無牢籠、爰去承德二年依備前守平正盛奇(寄カ)文、以鞆田村內田廿町、被立券六條院御庄已畢、其後天仁二年同村田十三町、都合村田卅餘町暗被押籠之後、卅人杣工稱其作人、併駈之仕間、全不隨寺家之所勘、但於國司者、每年檢注之後、依例勘除至于所當官物者、以寺家封戶百卅一石所率補也、而作人等乍募官物、不辨其代、雖進雜役(遁カ)、不勤其替、誠雖似田堵之對捍、偏是隨庄家之進止也、但如杣工申狀者以庄田十五町支配卅人、號其作人所押仕也、早被除庄田、永欲遁雜役者、何混合十五町之庄、可虧掠六十町之作人乎、而間造大佛殿料所召大少材木、雖有其數、依件等妨、早難採進、雖三ヶ杣、以鞆田爲宗之故也、就中件村所請募封戶代、石別見米三斗辨濟寺家、殘七斗所立用杣食也、然而依無其勤、慥可令辨濟之由、雖加催促無心辨濟、長治二年以後未進已及三百餘石、云雜役云官物、寄事左右、共忌其勤所爲之旨、旁涉狼藉、望請天裁、任先例被裁免件等事者、永斷後代之牢籠者、左少辨源朝臣雅兼傳宣、左大臣宣、奉

勅宜令彼寺進上件證文者、

永久三年四月卅日　　左大史小槻宿禰(花押)奉

○永久三年注進文

注進

柘植川合兩鄉山內出作田目錄事、

合

柘植鄉山內出作四十八丁五反百步、

川合鄉山內出作廿丁五反六步、

右件兩鄉山內出作注進如件、

永久三年五月廿五日　　直大判官□(花押)

散位平朝臣(花押)

源朝臣(花押)

源朝臣(花押)

平朝臣

源朝臣

○永久四年公驗正文案

應令東大寺進上公驗正文、寺領伊賀國玉瀧杣內字鞆田村分田陸拾餘町、幷杣工肆拾餘人、混合郁芳門院庄事、

右右中辨源朝臣雅兼傳宣、左大臣宣、奉

勅宜令彼寺進上公驗正文者、

永久四年三月十四日　　左大史小槻宿禰(花押)奉

○平平盛(忠カ)下文

鞆田御庄政所

下　鞆田御庄政所、

可早致沙汰東大寺、御領鞆田庄家訴申對捍寺領御地子幷所役事、

副下寺家書狀一通、

右如寺家訴申者、當御庄寄人等乍耕作寺領、逐年或不辨濟所當地子、或不勤仕巡來所役之由者、仍早可隨寺役之旨、度々令下知之處、寄事於左右、所澁爲宗之由重有此訴、何輩所行哉、如此事雖不令下知、爭不存知不可之甚責而有餘者、任所當且令辨濟地利、且可勤仕所役、若有背此旨之輩者、慥注交名、可言上子細、爲加誡也、御庄司等宜承知、勿致重訴、以下、

天承元年四月十六日

備前守平朝臣(花押)

○同下文

鞆田庄訴事、重下文謹進上之、不承引候之條、返々不穩便候事也、重又可召仰沙汰人候也、縱雖非道事、於仰者更不可勿諸之由、深所存候也、

東大寺修理事御作の五百勤仕可事候也、早可仕候事を可注下給候也、恐々謹言、

九月七日　　備前守忠盛え

○同下文

下　鞆田御庄司、

可令早任度々下知旨、沙汰東大寺、御領鞆田庄家訴申寺領地子幷所役事、

右件所役任先例可勤仕之由、度々雖乞下知、彌以所澁御封米之由有其訴、若有由緒者、任子細可言上之處無辨定、致對捍之條、甚不穩便事也者、且任先例乞勤仕寺

役、且可停止狼藉之狀、所仰如件、宜承知、勿違失、以下、

長承二年九月七日

備前守平朝臣(花押)

○同下文

下　家貞所、

可早令致沙汰爾豪法師、濫行二箇條事、

一鞆田御庄內東大寺御封屓田所當物所治下、

右件所當物請作彼御封屓田、御庄民等有限令所濫御封米之條、甚以不穩便、早任道理可令致其沙汰也、

一爾豪法師所作田事、

右件作田東大寺御封屓田也、而寄事於御庄領、有限不令辨濟所當御封之由、從寺家有其訴、次召上京都致沙汰之處、院御熊野詣御共之間、暫停濫行、且押御封米、且停所作、還向之時召上京都、糺決之後、可令左右之狀、所仰如件、宜承知、勿違失、以下、

保延三年十月十二日

美作守平朝臣(花押)

○造內裏勤仕案

行造內裏事所、

可早勤仕所課材木以下雜事等事、

長橋廊五間、

北杣出作　伊賀國、

柱一本、長一丈五尺、口一尺四寸、尺二寸　一支、長一丈、尺一寸

三支、二支長一丈一尺、一支長二丈二尺扉四寸、四寸半板一枚、長一丈七尺扉六寸、一寸半板六枚、長一丈五尺、比曾四十四支、椙樽二百寸、一丈、繩卅方、比皮五十七枚三尺三寸、石灰一石二斗七升四合、絹四丈、上、釘九寸六隻、八寸十五隻、中二隻、比皮釘一隻、七寸、十二隻、大瓦　鐙七枚、擔六十枚、平廿四枚、人夫十人、五月中旬役十分日、

間(虫喰)直米廿三石二斗六升七合六夕七才、

比皮大工(虫喰)食一前、上棟同斷、

右宮城之製作者、邦國文經營也、仍庄公平均被徵下既畢、然則三月廿六日上棟、八月十日可有遷幸、存其旨無懈怠可勤仕、若背下知之旨、不致合期之者、且令停廢庄號、且可改定領家之由、所被宣下也、更勿致、

懈怠矣、但件材木等、相逢國行事、可取進木屋返抄之狀如件、

保元二年三月　日　　左官掌紀(花押)

左史生紀(花押)

○造大神宮作料米案

造伊勢大神宮作料米、

三月十六日、工食料、件日以前運送本宮、可取進造官便返抄、

伊賀國公田、

號東大寺庄北杣出作田百一丁半、東大寺庄押領仁惠得業沙汰、

所當乃米廿五石二斗六升二合五文、

仁安四年二月廿五日　　右官宰在判

右史生在判

左大史在判

右大史中原(花押)

○源惟義下文

在判源惟義國務之時免判也、雖奉行國務非國務、仍無大介之位所、

下　伊賀國在廳官人等、

可早奉免東大寺領鞆田庄出作田所當官物事、

右寺家訴狀云、件所當米便補當寺封戶、經數百歲、而平家押領當庄之後、被停止彼封戶云々、如狀者尤以不便也、縱雖無先例、大佛造營之間、爭無結緣之志哉者早任舊跡、募寺家封戶、可令奉免之狀如件、留守所宜承知、依件行之、以下、

元曆元年八月九日　　在判

○右大將賴朝下文

下　伊賀國鞆田庄住人、

可令早停止遠兼地頭職事、

右當庄載平家沒官領注文、自　院給預候、其狀云、鞆田庄六條院領焉、而件注文不下賜以前、昔可爲東大寺領、院廳御下文相觸之時、天下不落居之比、理不盡奉免之間、自院家以此領成寺領無道之由、依領院奏、被仰下之日、決子細之處、院領年尙平家知行矣、仍可隨院家之由、地頭補任之次下知之、而重爲院家領否之條々不私裁斷、早達　天聽、可待　勅定、就者可爲寺領之旨、有勅許之時、雖當地頭停止之理、當時不令左右者、似無谷、仍停止遠兼所職之狀如件、以下、

文治五年四月七日

○同案

大佛殿御材木間事、委以承候了、兼又衆徒訴申候伊賀國鞆田庄事、元寺領にて候らむするをば、爭取敢て六條院領にてこそ候らめとは申候べき、件庄は平家領沒官注文に入て、自　院給預て候也、其注文に六條院領と被注載可候也、件證文顯然候而御注文不下給之前、自寺家以　院廳御下文觸遣候間、天下不落居之時、無左右奉免して候間、自六條院無道之由院へ申さて、又

自然訴仰下候之間、且相尋子細、且自院注文慥に候へば可爲院領之由を乞下知可、乞補地以候了、おと者東大寺領にて候べしとも、六條院領にて候べしとも、私難成役候也、其故は其佛寺領と可然候由を訴申候へは、一方に令付候かた私之沙汰宜く恐候事候、只經　奏聞、重可被承　勅定候事也、大佛御事奉仰候とて、六條院領を難取放候也、いかでか如然之偏頗をはし候べき、子細は衆徒へ所々返答候也、兼地頭補任之條、縱寺領にても强不及訴候へども、示遣事似無音て候へば、地頭訴をば無左右所成敗停止候べく候也、寺領之條只可有重勅定之狀如件、

四月七日　　在判

○同案

伊賀國鞆田庄事、自院前大藏卿奉行下給平家沒官領注文之時、彼庄慥注載之上、爲六條院領之由顯然候、隨又神社佛寺權門勢家御領、爲令成敗狼藉、被下預注文候ひしとも、彼庄爲六條院領之旨顯然候、仍以他遠兼補地頭候之處、東大寺訴訟其恐候へば、於遠兼者即令停止了、當時庄下關東可候也、院家寺家兩方之間御相論事者、私以難進止候、於　院廳且召出鞆田庄住人、可令尋被子細候也、兵以佛寺之相論也、賴朝事可申左右哉、可乞申院給之狀如件、

七月十一日　　在判

○東大寺寺領正文目錄

自藏人大進許請預寺領文書事云々、

合

一伊賀國鞆田庄、

院廳御下文一通、壽永二年、

伊賀國司廳宣一通、同二年、

前右大將家奉免狀一通、同三年、

源惟義免判一通、元曆元年、

院宣五通、三通　壽永三年、二通　文治二三年、

國司信平朝臣當庄檢田枚目錄一通、

已上十通正文、

右云々、

建久九年三月十五日　　權寺主大法師光信

寺主大法師　隆玄

○建仁元年東大寺正文目錄副輪（軸カ）

伊賀國寺領文書正文自記錄所返下、玄蕃頭申狀、

伊賀國與東大寺相論庄々事相違、所司委尋承子細候了、所進文出於正文者、所司殊申旨候之間、以檢案文返付所司候了、仍言上如件、

建仁元五月十二日　　玄蕃頭小槻山險庵

○同正文目錄

東大寺

進上記錄所寺領伊賀庄々文書正文目錄事、

合

一玉瀧杣內鞆田村、

一卷　永久三年以後　宣旨等、七枚、

一卷　延久元年以後國郡解狀、九枚、

一卷　保安四年法家勘狀等、十一枚、（數カ）

一卷　治承元年國檢田使任符枚目錄、二枚、

一卷　壽永二年　院廳御下文等、十二枚、

一卷　元曆元年枚目錄、三枚、（數カ）

已上六卷、

都合云々、

右文書正文等依召、進上記錄所如件、

建仁元年五月　日　　都維那　法師

權寺主大法師

權寺主大法師

寺主大法師

權上座法橋

上座法橋

○五箇所定神人案

定置

北伊賀寺領五箇所御油神人事、

鞆田　玉瀧　眞木山　湯船　內保

右件庄々者、皆以　勅施入（虫喰）杣々也、住民本自爲大佛遮那（虫喰）之奴婢、今又寄身村鎭（虫喰）八幡宮神人、可勤御油役之可請申也者、以法華堂寂滅房（虫喰）愼興院爲拒捍使、早可隨神役（虫喰）於九月三日御祭者、當宮嚴重法會也、件日必企忝會、可隨御（虫喰）役之狀、所定如件、庄家宜承知（墨印）、勿重失、故定置、

嘉祿元年十月廿六日　　吉川（花押）

○東大寺八幡宮神人注進文

注進　鞆田御八幡神人方、

合三人者、（たかはしのこれちか　ふせのみつくに　ゐのもりひこ）

右任恒例可勤行、注之如件、

嘉祿三年八月　日　　公文

百姓等

年預五師下文

東大寺古文書曰、

下　北伊賀寺領五ヶ所八幡宮神人等可早自明年御祭時
　百人神人參上御共事、
右爲五ヶ庄神人役、每年御祭之時參上御共之外、更不可有別役之由、先度御下文狀分明也、仍自今年可參上百人之由存知處、兩寺同門之間事依卒爾不加催之間、今年御祭之時十五人參上之條、返々不當次第也、早可自後年者、百人神人可參上之由、可出請文之旨、依卅人衆議下知如件、
　安貞二年九月廿四日
年預五師(花押)
按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百二終

三國地志卷之百三

伊州司城　藤堂元甫纂

伊賀國　舊案

阿拜郡　附山田郡

○權僧正顯覺案
記錄　平等寺間事、
　在伊賀國三田鄉內者、
右當事者、自祖母尊阿彌陀佛許所相傳之也、而宇忍房慶覺可成僧所之由令申之間、所隨喜也、仍爲興法利生、令勸進甲乙人寄進田畠等者也、一向爲長老之進止、可宛于佛供燈油僧食修理料等、且代々尊靈爲離若得脫也、然者以不退勤行之善業、偏可祈彼菩提、雖經後々代々門弟等、不可成其煩、仍爲後代之龜鏡、所記錄之狀如件、
　永仁三年二月　日　　顯覺(花押)
權僧正法印大和尙位
○千葉介胤宗禁斷狀
伊賀國三田鄉內平等寺櫛內殺生禁斷事、向後於彼櫛內

自守護方不可殺生之狀如件、
　正安二年三月八日　　平(花押)
按、僧正顯覺以下、並に西澤村民家に藏む、
○文保二年前僧正名欠讓書
讓與　平等寺久成名田畠事、合一所平等寺、一名久成名田畠、
在伊賀國三田鄉內、右件平等寺久成名田畠者、故僧正御坊顯覺自祖母尼尊阿手有御相傳處、舜忍坊慶覺同爲尊阿孫子之間、依爲重代先祖氏寺、以彼寺爲持戒止住之地、且奉訪御母儀菩提、且可訪尊阿等代々亡魂菩提之由依申、殊致隨喜灌感淚、仍先師御意同所讓與也、然者於每年少分之燈油者、向後可令停止也、且非無運送之煩之故也、是偏奉爲先師御菩提也、平等寺幷名田等次第證文等、悉以令讓與舜忍坊慶覺也、早爲通三寶物、可興行佛法者也、然者先師之御門徒、幷實聰門弟等、故以不可致違亂、若於背此旨輩者、內者放三寶之冥衆、外者蒙四社之神罰、爲後代之龜鏡、注老筆之鳥章錄狀如件、
　文保二年四月十日　　前僧正(花押)
○沙彌大圓案
伊賀國平等寺文書等紛失事、今月六日在地談判之狀加一見候訖、此事云被盜取之段、云櫛內櫛外田畠、當知行之篇顯然之上者、爲向後支證、依爲近隣畫判之狀如件、
　元應貳季三月七日　　沙彌大圓(花押)
○元德三年案
伊賀國三田鄉內平等禪寺規矩法式事、
一住持職事、檀那寺僧相共評議、而於門徒中以器量仁可請也、
一寺僧中不和合出來時者、檀那寺僧相共平定、以穩便之儀可追出彼人、
一云此門弟、云本願餘流、成水魚思、可致公私御祈禱、
一三時勤行四時坐禪、不可有懈怠者也、
一流通物入置法衣一兩、香色、幷聖教語錄等、其外寺內納之佛具等、不可出寺外、
右此寺者、云本願舜忍上人志趣、云崇覺禪門本意、於末代者可令興隆禪法之處、將又崇覺禪門お(ママ)知(ママ)止平生契約狀明白間、爲後代住持聊誌之、
　元德三年五月廿九日　　圓(朱印也)
○足利直義案
建武以來建立諸國寺塔每國各一所事、去年二月六日　院宣如此、所被下通號也、早改當寺本號、可爲伊賀國安國寺之狀如件、
　貞和二年六月六日　　左兵衛督(花押)

平等寺長老

○高師直案

諸國利生塔安國寺事、建武以來異他之御願也、且爲勅願被下通號訖、仍定置警固人、可專興隆之由、所被經評議也、早於伊賀國安國寺者、柘植新左衛門尉相共致其沙汰、隨雜掌申請、止甲乙人之妨、且全寺領之所務、且可注進造營之成否、將又有違亂輩之由訴申者、縱雖不遣奉書、每度鎭狼藉、裁起請之詞、可注申子細、若寄事於左右、有非法之儀者、可被處罪科之狀、依仰執達如件、

貞和二年七月廿日　　武藏守(花押)

服部右衛門太郎入道殿

按、前僧正以下並某家に藏む、

○伊賀國樂音寺緣起

夫當山者、文德天皇御勅願、慈覺大師開基也、古カ右時天慶三年十月、鴈判官代範親、於篠峯邊奉行値金色藥師如來之條、成奇異之思處、則乘移竹笠御坐之間、令安置臥木上、捨弓箭致禮拜祈念云、年來雖有造立之志、年カ干今未遂其願、送季序之所、幸今奉謁生身本尊之條、可知宿緣之所令然也、明日猶可有御座此地者、早令洗淨衣可參御迎云々、仍翌日令參向之處、金色藥師行向之間、彌致信心、奉扈如來、過當山之處、中路有大木之倒伏、於彼木暫令休足之後、欲超宿所之處、如來敢不令動給、其時範親尋申云、令坐此砌、可被濟度衆生、如來則令領掌給、仍奉入當山、寂初藥師堂相並根本木像奉安置處、恐本佛飛移東間御坐、仍奉安置脇間、而應和三年頃、本堂爲雷火燒失之間、範親令馳參、奉尋本尊之處、草堂前小塚梧桐下、南向令立給、奇特无比類、又圓融院御宇天祿元年十月、國司被經奏聞、以正稅官物立精舍、奉安置彼尊、加之後一條院御宇之吏務、被卜居所權當山麓之處、長元六年於彼廳屋寢殿邊、有藥師經轉讀之聲、成希不思議思、相尋彼聲之處、折節深雪也、其上有跡次第見之、則尋行處、本堂內東間有其跡、國司崇敬餘、被寄附料田之間、長日勤行于今不上清カ令退轉、加之久安三年四月、三昧僧一和尙倩富奉搜本尊御躰長三尺許、溫氣嚴重之間、忽身毛竪、則雙眼盲閇畢、悲歎餘三年不出堂內、令祈念、兩眼如本平愈屬晴明云々、如此之奇特非一、希代之瑞氣是多、効驗不可勝計、利益難盡記錄、而間永仁年中、於當寺四至內、禁斷殺生伐木、可令停止諸方使入部之由被下院宣、至元弘年中、重又申賜安堵綸旨畢、加之當守護殿下千葉介、於當寺四至內、禁斷殺生伐木、可止守護使入部之由、迹書嚴密狀、剩以守護領山寄附當寺畢、其後又山田入道爲國司入部之寂前、令寄附三昧供料、將又在國間、靈佛之効驗、眼前之奇特、令露顯之間、信敬餘重以國領寄當寺畢、是則歸敬生身如來故也、云院宣云守護御下知、是以明鏡者歟、何況當將軍家元弘年中、於寺內軍勢等不可致狼藉之由、被下御教書畢、凡當國者靈地寺社、雖及數箇所、生身伽藍奇特佛閣限吾寺處也爲天長地久將軍家繁榮、法花寂勝仁王等諸大乘經、長日轉讀无懈怠、爲將軍家御宿願、於六十六箇國、可有御建立塔婆之由風聞間、當寺者自去建武四年、當守護所殿構城郭於寺內、晝夜朝暮御用心之刻、南伊賀名張之凶徒、度々雖寄來、寺僧等捨一命參御方不顧勤勞也、仍且仰靈佛威光、感寺僧之忠勤間、御入部寂前被停止守護使入部、剩以守護領山并丸柱保、篠峯限西水境限、被寄附當寺畢、既送三ケ年星霜、至今構城槨御住寺之上者、何寺相諍可及競望哉、此上者早被立塔婆於當寺、可被付料所於吾寺者也、若然者以此趣預御注進、彌可奉祈將軍家并御家門繁榮矣、仍粗言上如件、

曆應二年八月日

此一軸者、岩本先達演永法印、依嚴命不顧愚筆令書寫者也、偏生身藥師如來靈像奉祈値遇而已、

于時寬永十四年仲秋天　　醍醐寺密嚴院權僧正堯政書判

伊賀國樂音寺住僧等謹言上、

欲早被優恕生身本尊、且依代々崇敬旨、且任仁木禪門寄附先例、被付丸柱保於當寺狀事、

副進院宣案、禁斷殺生伐木、停止諸方使入部事、永仁七年三月廿七日、

一通　關東御教書案、守護使入部停止畢、千葉殿御返事案、

一通　當守護殿下御狀案、禁斷殺生伐木、停止守護使入部事、元弘二年二月六日、

一通　當將軍家御教書、於當寺軍勢等不可致狼藉之事、

一通　安堵綸旨案、元弘三年五月廿九日、

一通　山田禪門爲當國々司來時供料寄附狀案、

建武元年十二月九日、

一通　同禪門重國領寄附狀案、

建武二年卯月三日、

一通　仁木禪門爲當國守護送當寺狀案、停止守護使入部幷殺生伐木事、

建武四年七月十四日、

一通　禪門守護領山寄附狀案、

一通　禪門丸柱保寄附當寺狀案、

建武五年八月廿一日、

此外代々國宣幷守護代狀數通雖有之、依繁不能備進、
右當寺者、天慶三年十月鴈判官代範親開墓云々、院宣云、守護御下知旁以明鏡者也、分既當將軍家元弘年中於寺內軍勢等不可致狼藉之由、被下御教書、於當國者靈地雖爲數ヶ所、生身如來之伽藍奇特之佛閣者、限吾寺處也、然則代々守護國司崇敬之靈地也、依之仁木禪門守護之時者、只非停止守護使入部、剩又寄附丸柱保於當寺、若然者當守護殿下任先例、以彼保被付當寺者、可奉祈御家門之繁榮者也、言上如件、
一代々守護國司崇敬異于他、然則仁木禪門之守護所時停止守護使入部、剩又被寄附丸柱保於當寺處也、若然者當殿下且任先例、以彼保被付當寺者、彌可奉祈御家門繁榮也、爲蒙貳世之御祈禱、爭無御優恕之儀哉、依如件、
右添目錄古本者緣起興有之、雖然依古本書改之者也、
寬永十四丁丑年仲穐天、
按、樂音寺緣起以下、並國分寺に藏む、

○一宮黑黨次第案

天文十三年甲辰十二月廿一日、俄御鉾被指申候而、同廿四日御鉾迎仕候、是者三人不被勤候而、持者御頭を勤申候、同天文十四年乙巳五月十二日御湯使、同十八日御祭禮也、同廿一日御鉾を送申候、

就一宮御頭御役次第之事、
　御家子
小杉彌太郎
金壽丸（第イ）
石川開葉
宮千代丸
　御的立
波田　御沙汰なき衆
菊田殿　西山殿
河合　隨兵　三郎五郎殿
彌地殿　與一殿
　御出仕立之仰人數之事、
石河
今堀殿　濱川殿　岡本殿
我等子宮松丸したては、喰代もう地殿おちの御僧かん侍者と申御方、御沙汰にて被下候、高鞍小者中間人數五十人斗、御したて候而くたされ候、是者一段之御重忍にて候、
出仕御人數之事、
地下　地下
越中守殿　中林殿　富川殿　河崎殿
地下　湯舟　湯舟
其家斬　富本殿　富寶殿　藤山殿
槇山　同　ひそかはち　ひそかはち
岩屋殿　新介殿　音羽殿　糸河殿

河合　あらき　井田
蘭川殿　兵部丞殿　小糸殿　森田殿
間杉井添　頭人之子
內田殿　宮松殿
　御さしき入之御人數之事、
濱川殿御內方　孫七郎殿御內方
磯屋殿御內方　濱松殿御內方
孫七殿御內方　奧殿御內方
長喜殿御內方　槇山　市介殿御內方
同　內保
直田殿御內方　米地殿御內方
間杉　河合
吉衛門殿御內方　十郎左衛門殿御內方
韜田
山尾殿御內方　同之使殿
以上十三人
　築地之內酌御人數之事、
のま　湯舟
岡村殿　音羽殿　岡本殿　藤山殿
河合
彌十郎殿　御出夜之酒、
　夜宮之夜酒、
府中
佐野殿
御宮方へ積米五石にて候を、十五石遣候處、少殘申候、白拍子にとらせ申候料も、以上九貫六百文上候、
以上料足使足九十貫文宛、
以上米之使足百石餘也、
一黑裝束之事、
　奈良に而かり申候、
我等かれる道具、まこたて（くイ）の道具、貳貫文の損領御座候、
按、玉瀧村良民家に藏む、

○黑田新莊代官職請狀

　請切申伊賀國新莊御代官職之事、
一於御公用錢者、任請狀每年拾二月無不法解怠、伊賀錢之內隨分請錢仕、壹貫五百文宛可致納所事、
一自然於此庄內、御公用以下さんかう仕、出儀在之者請切外可加增申事、
一同此在所より別々諸成物出儀在之名聞付次第さんかう仕、御公用錢請切之外可致增進事、
一萬一請切申候公用錢之內、少も或は末を仕、或者致無屆錢在之者、何時にても以面向之儀、急度可預御催促事、
一右條々御請申旨、聊以無僞候、自然相違之儀在之者、雖爲何時、御代官職之事、可被召放候、其時免角不

可申一言之儀も、仍爲後日請狀如件、

御奉行所　　承禎(花押)

永祿參年庚申九月日　　惣持院英海(花押)

尊勝院殿御內　田上源三郎殿御中

按、東大寺尊勝院寶庫に藏む、

○天正元年佐々木承禎案

今度到音波相誠候之處、路次送并種々機遣候馳走段、不可相忘候、殊更切に見舞、尤祝着候、彌入魂肝要候、猶磐岡可申候、恐々謹言、

九月廿一日　　承禎

友田山內殿

○同案

近年窄籠仁付、種々馳走候祝着候、則可有奉公旨之條、先年以直書知行分院遣置候、今度石部下野寺館に令籠城處、有入城被抽粉骨段神妙之間、最前宛行知行仁只令乞加增、以目錄加扶持候、向後之儀聊不可有相違之條如書立永代全領知不可有異儀候、猶鯰江滿介入道可申候、謹言、

拾月二日　　承禎(花押)

伊賀　河合山內殿

○同案

知行分目錄

一大塚內介分同寺庵、

一大塚次兵衛尉分同寺庵、

一大塚一介分幷大塚諸本分同寺庵、

以上

天正元年拾月二日

伊賀　河合山內殿

○佐々木義治案

就當國逗留儀馳走出張之時、可被供奉之由祝着候、然者配當貳拾五石事、從觀音寺山村南可申付候、向後無相違可有知行候、委細河合田面可申候、恐々謹言、

五月十一日　　義治(花押)

鞆田山內殿

按、承禎以下、並山內某家に藏む、

○筒井氏案名欠

今度佐那具ひやうこ屋敷取申候付而、城之同名こなし申候刻、寺社之旦那こなし申候、其上知行五石之通從國永代出申候、然者手前にて知行可有之、此等之趣少も相違有間敷候、仍證文之狀如件、

天正十一年癸未六月十六日　　國奉行

城主甚助殿參

按、友田村良民家に藏む、

○筒井氏案名欠

今度佐那具ひやうこ屋敷取申に付而、喜久永同名被成刻、寺社之旦那に成申候、其上知行五石之通、從國永代出し申候、然者手前にて知行可有候、此等之趣少も相違有間敷候、仍而證文之狀如件、

天正十一年癸未六月十六日　　國奉行惣在判

喜久永與左衛門殿まへる

按、友田村良民家に藏む、

以上

一筆令啓候、然者爲知行百石遣候、猶依奉公重而加增可遣候、仍如件、

慶拾六年二月晦日　　掃部在判

法花甚兵衛殿

按、法花村良民家に藏む、

附　山田郡

○二階堂義延案

爲領知伊賀國以山田鄉五千町所申付之訖、全可爲支配之狀如件、

永享元年八月十一日　　義延判

伊賀平六左衛門殿

按、曾我尙祐書札拔書、及稻澤忠簡札集に出たり、

三國地志卷之百三 終

三國地志卷之百四

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○大神宮御領舊案

伊賀國名張郡夏見鄉刀禰等解申、注進伊勢太神宮所領地山河四至事、

一四至、東限高岡河、其河後伊賀國阿保村主、南限大和國水堺、西限栗河在夏見鄉夏見村主、北限大池頭在、

一四至所在地名、比奈知、針生、長木、布乃布、大野、大良牟、色豆、上家、菅野、土屋厚、曾兒、高羽、

一荒田新開等、在所所所〇〇注〇〇、

一柚山等、東在馬背柚、南在柚不知名、

一河西在栗河、中在橫河、

一鷹巢一所、號色豆巢、

右太神宮所領地山河野等、幷四至、依郡符旨、如舊注申如件、即太神宮司使被淸奉幣、建傍示已畢、仍注事狀注申、

承平四年十一月十九日　　刀禰夏身 余世

夏身 貞宗
宮カ
前勾當式部卿官侍伴 友高

郡判

勾當伊賀朝臣 是直

撿校稅臣 秋實

擬領名不今益

國判

守滋野朝臣 在判　權掾橘

目日置 豐秀

權目高橋

謹辭　諸神侍御牒壹紙事、

（以光明寺舊記補之）

被載不可（勘取太神領山地子物狀字太良手山內」

右被今月十五日御牒、同十七日到來偁、件地爲太神御領馳經年序也、而衙號私地、其居住人人等强功勘地子物等、爰得磯忠安則、沙彌仁勢等欠月十三日愁狀云、立田前郡司號吾地、其地子物等被勘取其遺令進期狀者依愁狀案物意所被行尤無道也、其由何之明知　太神御領地何被稱吾地哉、以之謂之　太神御領地、似被奪取也、仍牒送者、爰依有先祖傳領侍內無他妨、而來牒旨太神領山內者、然則未知此由之間領侍也、然而有四至步數之內、更不可有妨、仍勤事狀謹解、

天慶六年十一月十九日　　前郡司伊賀 良茂

伊賀神戶長部解、申請　祭主裁事、

請被永停止以公浪人、被補任　太神御領名張山預職狀、

右謹案物情、件山爲　太神御領、不切一本之木、不作一步之地　之間、山內至居浪諸人、爰任名意有用途切木爲其數　超、即以古公驗稱吾地、或立新公驗成已地如是構謀居輩等也、謄此辭令入勘御牒調備黑葛黃攸幷篦、一向居住諸人等同心合力爲使到人云陵嚼寃吏無隨進、爰注此之由、嘱盡意愁申於太政官、其時被大務在地郡司科中祓一向奉寄之由、官符於國即如下符清祓奉寄已畢、相次定四至打牓示、使故撿校石部興恒清里、數日所定也、後時其折如然清人等、吾地已財被奪取云々、爲怨敵者等也、而偏宮司被成上件小預、然則從神辭擬入勘使打陵此預等大愁也、其何者且爲嚴依　太神御威、又爲被御德也、望請祭主裁、永被停止件山預、盡功能以神戶預等子弟、長奉件預、仍注愁狀請裁、以解、

天慶九年八月廿六日　　司監馬工 茂實

撿校馬工 利實

判

依愁狀撿案內、神戶預等所申尤有理致、其故何者、

件山已　大神宮所領也、而何以公民充預哉、判下如件、宮司宣承知之、自今以後停止公民、以神民堪事之輩充補預職、一向令勤仕、不可違失、祭主神祇大副大中臣朝臣在

伊賀國移神祇官文、所々字依朽損失不書之、

右神宮古記錄にあり、

○應和二年慶進牧地等事、

轉經院慶進牧地等事、

合貳所

一所在伊賀國名張郡、　　宇薦生者、

地

新開治田、

荒廢田、梁瀨貳所、在字本公驗、

四至、東限垣田河幷壺野少峯、南限小鮎瀧梁瀨幷安峯、西限笠間河幷大河、北限高峯、

一所在大和國山邊郡、幷伊賀國名張郡堺、在字本公驗、

地

新開治田、

梁瀨一所、在字本公驗、

從河東牧地幷山、號蟲曳野者、　新開治田、在伊賀國名張郡內、

四至、東限水堺山、南限高山、西限大河、北限水堺幷道路谷、

地、從河西牧地山等、號廣瀨牧者、　新開治田、

四至、東限大河、南限石屋幷少野石村笠間河、西限高峯、北限路瀨幷道、

右件牧地幷新開治田等、依有故僧都御遺言、度進勘解由長官殿如件、

應和二年八月廿日　　院司僧

法師能聖

法師眞光

大法師

○名張郡司請文

伊賀國名張郡司解、申請勘解由長官殿御帖事、

合一枚　被載可與使者共牓示四至立券、言殿御所牧地、幷新開治田等之狀、

在大和國山邊郡堺、號廣瀨牧、薦生牧者、

右被今月十七日御帖今日到來偁、件牧地等元故轉經院退彌僧都所領也、而今於傳領宅既畢、仍帖送如件、宜悉之與使者共牓示四至、立券宅名、可報示其由者、須郡隨御帖旨、任所被下公驗、定四至立券言上、而於件薦生牧地者、東大寺所領板蠅御杣之爲四至之內、殿御所領牧地、其牓示內也、因之不堪與使者共立券言上、今須殿與御寺理非相定、被下之日立券將言上、但至今（日カ）

于廣瀨牧、從河東者依无他妨、立券言上、仍注事狀、
所請如件、以解、
康保元年九月廿三日
田畯撿校伊賀 在判
撿校伊賀
國司代伊賀

○和州山邊郡刀禰等券文

大和國山邊郡都鄕刀禰等解、申請勘解由長官殿御帖并
郡符事、
被載可立券殿御名言上、廣瀨薦生并兩御牧狀、
一所在大和國山邊郡堺、并伊賀國名張郡堺、
地
新開治田、
梁瀨一所、號廣瀨者、
從河東牧地并山、號蜷拾野者、新開治田、在伊賀國名張郡內、
四至、東限水堺峯、南限高峯、西限大河、北限水堺并道路、
從河西牧地山等、
地
新開治田、
四至、東限大河、南限石屋并少野石村笠間河、西限高峯、北限路瀨并道、
右蒙殿今月十七日御帖到來之偁、件御牧地等、元故轉
經院退珍僧都所領也、而今轉領於宅既畢、仍帖送如件、
宜悉之、與使者共牓示四至、立券宅名、可報示其由、
以勿違失者、又郡同廿二日符到來云、件御牧地新開治
田等、依勘解由長官殿御帖旨、件薦生廣瀨兩御牧立券、
彼殿御名言上、其上其由者、廣瀨御牧立券言上如件、
但至于薦生御牧、雖券文四至堺代々傳領明白、東大寺
成相妨、仍未定之間、名張郡不立券奉行、仍、他堺刀
禰等、急難立券、件薦生御牧、但相論一定後、將立券言
上、又薦生御牧四至堺、更假木載申言、以可言上、謹解、
康保元年九月廿五日　刀禰六人部廣吉
前權非違物部在判
田所判官代物丁
內竪高田總蔭
郡判
惣行事山邊在判
大領兼頭行事依羅
行事多末

○板蠅杣四至紕繆狀、

康保元年九月廿五日記
號東大寺所領板蠅杣四至紕繆狀、
右件板蠅杣山と云は、是名張河より西方爾來會、笠間河

西方乃高峯超太留山也、又薦生牧乃四至、東限垣田河并
萱野小峯、西限笠間河并大河、北限高峯者、又東大寺
稱杣、四至は東限名張河、南齋宮登道大、西限薢尾野并
小藏立、北限同長張河并八多高峯者、同之撿案內紕繆
尤多、故何者東大寺使所陳、四至內爾所有田地山林皆
所領也者、件四至內併彼寺領掌者、此四內敢有他人所
領、然而百姓口分并私田地、他人所領亦臣多也、而不
據領件他領、尤一紕繆也、又刀禰等件薦生牧內、先例
專不聞東大寺領之由、如以件杣より東隔一峯并笠間河
天、相去薦生牧之程、已五十餘町也者、紕繆數多也、仍
爲後日記、
記使四世淸忠王
件四至相去實也、刀禰
六人部廣吉
前權非違惣在判
田所判官代物部
內竪高田總蔭
郡判依刀禰證署明白與判之、
惣行事山邊在判
大領兼行事供羅　行事多末

○同四至告狀

東大寺告　伊賀國名張郡司、
不可募寺家事妨申勘解由長官殿薦生御牧事、
右得彼殿今月十日御牒偁、如彼牧立券、使淸忠王并郡
司刀禰等勘文者、件牧不可入御寺領、而如淸忠申詞者
所被差遣之寺家使所申之詞、虛言多端、因茲不能立券
者、寺家之板蠅杣四至有其限、又彼殿所領御牧四至有
限、而煩有被杣送遣彼殿御牒也、然則至有杣便宜之地者
令領於杣、有彼殿御牧便宜之地者令領掌彼御牧、仍所仰
如件、宜承知、不可募申寺家妨由、不得路略故告、
別當小僧都　都維那
上座　目代
寺主　康保元年十一月十五日
權寺主
正文印請留了
田畯檢校伊賀 在判
檢校伊賀保相
國司代伊賀 在判

○夏見鄕刀禰等請文

伊賀國名張郡夏見鄕薦生村刀禰等解、申請郡符事、
被載任本公驗可立券進勘解由長官殿所領、
合壹帋　薦生御牧狀、

在伊賀國名張郡夏身鄉號薦生牧者、

一御牧壹所、
地
新開治田、
荒廢　田、
梁瀨貳所、一處號小鮎瀧瀨、一處號蓮瀨、
四至、東限垣田河并壺野小峯、南限小鮎瀧梁瀨并高峯、西限笠間河并大河、北限高峯、

一墾田伍町玖段貳佰漆拾捌歩、在同鄉、町段四至又在本公驗、

一栗林參所、在同鄉者、町段四至又在本公驗、

一野地壹所、

右被今月廿三日郡符同日到來偁、彼殿今月十七日御牒今日到來偁、件牧任公驗可立券之由、帖送先了、而稱有東大寺妨無心立券、今撿案內、郡司所陳尤無道理、故何者若有事疑、先令出本公驗、糺彼此紕繆可一定者也、而依偏彼寺任意符告無由辨定、阿容カ偏頗已以多端仍相副彼寺不妨之由告書帖送如件、宜承知之、早立券宅名、兼免除牧內居住浪人臨時雜役、以勿カ疎略者、又東大寺今月十五日符偁、勘解由長官殿牒偁、如薦生牧寺カ立券、使清忠王幷郡司刀禰等勘文、不可入御守領、而又如清忠王申詞者、所被差遣之寺家使所申詞虛言多端因之不能立券者、寺家之板蠅杣四至有其限、又彼殿所領御牧四至有限、而頻有被送遣彼殿御牒、然則至有杣便カ使宜之地者、令領於杣、至有彼御牧使宜之地者、令領掌彼御牧者、所仰如件、刀禰等宜承知之、任彼カ御寺下符、宜立券進者、任本公驗立券勘錄所進如件、

康保元年十一月廿三日　右兵衛伊賀垣滋
東大寺杣別當栗田良□

郡判
田畯撿校伊賀在判
撿校伊賀　在判
國司代伊賀　在判

○右衛門督朝成所領田公驗

夏身鄉刀禰解　申勘錄言上右衛門督殿朝成所領田地事、合

一墾田伍町玖段貳佰漆拾捌歩、
十條一里廿、林本東六十歩、廿三榎本北三百歩、
廿一榎本北田一段、
已上參坪田元多貴內親王治田、
墾田一段二百八十、多貴內親王、
二里十六高生東田三段七十歩、田公田一段二百廿歩、

廿一稻垣北三段二百廿四歩、
件田弘仁十一年二月廿日、郡司伊賀興成等勘定申、
多貴內親王王田一段三百廿四歩、
文云坪內三段二百廿四歩、
漢入牛甘治田一段、公田一段者、而
延喜三年面注坪、
內田三段、治二段、公一段、
廿八稻垣田五段百歩、多貴親王田、
十一條二里十四門代西南田四段百九十八歩、同親王田、
十五門代田四段百歩、治田三段百歩、多貴內親王田二段、名張息長田一段百歩、公田一段、十九針小田一段二百八十歩、多貴內親王田二百歩、南名張息長治田一段、同淨野治田今圖所注、八十歩、廿三門代西南田五段六十歩、
件田弘仁十一年郡司申文注坪內田五段六十歩、多貴內親王田四段六十歩、
淡海廣川治田一段者、延喜三年面注親王田一段者、
已上坪々已荒、
廿八御太田二段、廿九御太田下百廿歩、卅御太田下百八十歩、卅二御太田南東三段二百歩、卅三御太南九段二百歩、

三里四引背下一段百五十歩、九引背中二段二百七十歩、
十六引背口三段二百歩、
件八坪內無國面數即荒野也、雖然同親王領地八十町之內也、

一栗林參所、
一所壹町捌拾歩、在夏身鄉津野林者、九條二里內、東限百姓地本、南限道、四至、西限溝公田、北限溝并百姓治田、
一所地玖拾參町、在夏身鄉比奈知村鍬置栗林并山者、東限小鮎瀧、西限辰尾、四至、南限楹口名張川南、北限田原川、
一所地陸町參段佰肆拾歩、在夏身鄉宮栗栖、東限栢迫谷南大谷、南限蒜生谷、四至、西限蒜生谷口、并百姓治田公田、北限公田、
件林元二品淳人親王領地、而今林地參町、空地參町也、

一野地捌拾町、東限辰尾、南限高松峯引背、四至、西限眞木尾、北限伊勢往舊道、
件地四至內新古兩道中、百姓家地七段、水海宅富子地者五、同四至內相交在百姓治田并公田等者、
右郡告四月五日符、同年十二月十九日到來之、勘解由長官殿所領田地、任公驗牒示四至言上者、彼殿使相共仕告延長五年九月十六日同鄉刀禰并郡司等勘文勘錄、

件町段牒示四至言上如件、
康保二年十二月十九日　　刀禰　伊賀忠光
　　志貴在判
　　國司代正六位上伊賀在判
郡判
田畯撿校正六位上伊賀直在判
領兼勘濟使從六位上伊賀朝臣在判
國司代從六位上伊賀直在判

○夏見鄉刀禰勘文

伊賀國名張郡夏身鄉薦生村刀禰幷夏身鄉刀禰等、勘申、右衛門督朝成殿所領薦生御牧與東大寺所領板蠅杣山、各四至舊狀、

一薦生御牧四至、
東限垣田河幷壺野、南限小鮎瀧梁幷高峯、
西限笠間河幷大河、北限高峯云々

一板蠅四至、
東限河、　南限齋宮上路云々

右件杣四至、幷御牧四至、相分尤顯然也、其故何者、所謂板蠅杣者、是在笠間河西方、燒原杣者笠間河東方、笠間河者是從南流北、其末出會名張河、是即薦生御牧西四至也、御牧是有領主、又牧內治田新開田幷公田、本自任面帳公驗牧可領之、以牧領掌他人可領之、以其人領掌公田、又官物租稅每色幷進其來尙矣、注各公驗而以先年東大寺前別當僧都、爲令造大佛殿、角木入座、件板蠅杣被造出、件角木卽曳出笠間河、名張河川合西方山下、其次放使令牒示四至、板蠅杣東四至其所立、薦生御牧辰巳方名張河流字櫻瀨南頭、卽稱云件板蠅杣東四至是河也云々、然則薦生牧可入杣四至內云々、無人相爭已經十餘ヶ年也、爰以去康保元年被下郡司所寺家御告書云、本自板蠅杣四至、薦生牧四至、任舊例各可令領掌者、郡司下符薦生村刀禰等、爰被郡符之任舊例、勘糺牒爾四至言上其由者爲不僞、任舊例勘糺牒爾四至言上先了、抑重撿案內、名張河是或流北、或所流丑寅、或所流戌亥、或所流西、或所流未申、隨其所々方流未不同也、但至干薦生御牧、件名張河始從櫻瀨頭流北、造箕輪流至未申方、笠間河川合、件御牧卽此箕輪內地也、然則治田新開田幷公田等、是廻薦生御牧南四至高峯嶮如帶添宣山下牧地是從田此方從河南方也、中有陸地、人住其地、以是爲御牧地、但板蠅杣東四至、若栢名張河南四至、指齋宮上路者、其內地併寺家計町段步數可被領掌者也、件東南四至內、敢不可有他領、然而件名張西薦生御牧上方、添山所在寺神領田畠、私人領地公田、其數已多、或號大屋戶、或號夏燒、然而其領主各別也併非東大寺領、以有其紕繆、又以笠間河指板蠅杣東四至者、相去御牧數里、又玄蕃也、又燒原杣者、是薦生御牧南四至越高峯去數里所有山也、然而以先年前別當僧都、取被指入板蠅杣四至內也、然則各四至已以分明、自爾以來古老所相傳誠仍注在狀所勘申如件、
康保三年四月二日
　　伊賀單明
　　右兵衛伊賀恒滋
　　栗田良恒
　　夏見鄉刀禰等
　　宇奈根社祝磯部在判
　　伊賀忠光
　　志貴重則
郡判
田畯撿校伊賀在判
勘濟使　伊賀在判
國司代　伊賀在判
按、應和二年度進帖以下、並東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百四 終

三國地志卷之百五

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○長保元年東大寺別當文書

某謹言、所被仰之伊賀國名張郡板蠅杣內薦生村御領薦生御牧事、須令引勘寺公驗申其由、而公驗納所或勅封或綱封倉輒難取出、但如下給御領公驗者、見不入寺領之由、仍不論是非、寺使不可寄徵之由召仰已了、吏有何妨具由(其カ)(含カ)食　御使僧、每事怠々不宣、平崇謹言、
長保元年六月廿一日　　東大寺別當

○同請文

請薦生御庄事、
右件御庄者、板蠅杣四至之內、已見寺文書、而所下給文書、故平崇別當時、其論已絕者、仍更不可令啓左右、又無遣仰之事、仍言上如件、
初一日　　別當少僧都在判

○名張郡司券文

伊賀國名張郡司解申立券言上薦生廣瀨兩牧事、

在當郡幷大和國山邊郡堺、

一牧地貳所、

一所在名張郡　號薦生牧者、

地

新開治田、　荒廢田、

簗瀨貳所、一所號小鮎瀧、一所號葦瀨、

四至、東限垣田河幷壺野小峯、南限小鮎瀧瀨幷高峯、西限笠間幷大河、北限高峯、

一新開治田、

簗瀨壹所、號廣瀨、

從河東牧幷山、號蝮曳野者　新開田、

四至、東限水堺峯、南限高峯、西限大河、北限水堺道路谷、

一治田野北栗林等、坪付在別帋、

右被去十月　日國符偁、得右兵衛督經道殿御牒偁、件兩牧元故三條中納言朝成所領也、而今傳領於家向可立券之狀、牒送如件、乞衙察狀、早立券家名者可立券言上之狀、所仰如件、郡宜承知、依仲立券者任公驗狀、立券言上如件、以解、

萬壽二年十一月日

國司代小川在判

○萬壽三年僧眞範文書

進上

廣瀨薦浦等牧事、

右件牧本券文等、進上如件、

早可令立券領掌給者也、恐惶謹言、

萬壽三年十月八日　僧眞範

進上　右兵衛督經道殿　政所

○黒田莊出作領主左馬允實遠請文

謹辭　申請東大寺政所御下文事、

右去月廿九日御下文今日到來云、黒田庄出作田者、是往古寺領也、而近來相副本公驗、寄進伊勢大神宮御厨之由有其聞、若實者甚以非常也、隨令申子細可致於其沙汰也者、謹所請如件、抑件事齋宮寮前大助大中臣朝方、相語於伯父僧忠耀男眞頼、可建件御厨之由雖有普聞、實遠聞其由、乍驚令停止畢、隨又於本公驗者、去萬壽五年二月廿八日、私宅燒亡之次、名張所領非一所多公驗皆悉燒失畢、件田在地皆所見知也、而以何文書寄他所哉、只以此可還迹也、如此無實出來條、所成恐也者、謹所請如件、

長久肆年十一月五日　左馬允藤原(花押)

○同請文

謹解　申請東大寺政所御下文事、

右去月廿九日御下文今日到來云、黒田庄出作田者、是往古寺領也、而近來相副本公驗、寄進伊勢大神宮御厨之由有其聞、若實者甚以非常也、隨令申子細可致於其沙汰也者、謹所請如件、抑件事者齋宮寮前大助大中臣朝方相語於伯父僧忠耀(男カ)號眞頼、可建件御厨之由雖有普聞、實遠聞其由、乍驚令停止畢、名張所領非一所、多公驗皆悉燒失畢、件由在地皆所見知也、而以何文書寄他所哉、只以此可有還迹也、如此無實出來條、所成恐也者、謹所請如件、

長久肆年十一月五日　左馬允藤原在判

○天喜元年宣旨

左辨官下伊賀國、

應令官使拔前前司藤原朝臣顯長任以後庄園牓爾、催徵官物事、

右得彼國去年十二月三日解狀偁、謹案事情當國狹少之地三弊之境也、而前司公則朝臣、悉打立每鄉庄園牓示之間、百姓遁避官物不叶國務、因茲以去年經上奏、隨則以同年十月二日可停止之狀、雖被下官符、猶張各本家之威勢、敢無叶國務之輩、倩檢案內、當國已四ヶ郡也、之中管名張郡爲興福寺東大寺所領立券本田三百餘町、見作二百町也、去今年官物未辨進合夕、同管伊賀郡爲伊勢大神宮新免田、右大臣家東宮大夫家侍從中納言家等所領、不辨進官物、同管山田郡見作田百餘町、同爲內大臣家按察大納言家民部卿家等所領、去今年官物敢無其辨濟、同管阿拜郡內東大寺柏原庄幷平柿庄新免田拾餘町也、是等已前司公則朝臣之立券所々也、加之經數年庄伊勢大神宮六十六町免田、東大寺玉瀧杣修理職杣、平柿免田貳拾町也、如此住人從庄田外入作公田、不辨進官物、不勤仕公事、如此之間當道洛物敢以難辨濟者、望請官裁、早任道理、且被拔新庄牓示、且被催徵對捍之輩、將仰憲法之貴者、右大臣宣奉　勅、宜遣吏生且拔弃牓示、且催徵官物者、國宜承知、依宣行之不可違失、

天喜元年三月廿七日　大史小槻宿禰

少辨藤原朝臣

○同宣旨

左辨官下東大寺、

應令如舊領掌庄家僉(帳)糺返本寺使所押取官使山重成紀安武等隨身雜物事、

右得伊賀國去月九日解狀偁、管名張郡今月八日解偁、(參カ)

同月七日國符到來偁、大判官代壬生正助忝府申云、東

大寺使等到來如本打立鄉廿五六町許籠已了者、先日依官府宣旨下向官使顯長以後庄園所被停止也、而度々從本寺可加事用意之由雖示送、何背官符宣旨給者令知國司可改六牓示也、官使相具召問實否、依實正可令停止件牓示也者、所請如件、抑隨國符之旨、同日夕部相具官使山重成紀安武幷大判官代正助等、罷向件黑田村庄屋之後、出來彼村住人物部時任、相次本寺知事僧公、釋隨卽國符之旨令仰知官符宣旨之間、寺家下部不知姓名男出來、相搦正助之身、打縛使部重成等從者、擬搦捕正助郡司範輔身之間、重成乘鞍尻射骨射立於失次安武狩衣左方袖射代也、兼又重成等隨身馬二疋、乘鞍二具、狩衣二領、禎袴二要月、烏帽子二頭、帷二領、沓二足、行騰二懸等所押取也、卽又放火彼村住人私宅二宇也、如此之間不知正助行方、爲存身命相具官使等、範輔向大和國、尋深山之道僅所逃脫也、仍言上如件、望請國裁任實正之旨、被定具注大略言上所爲甚以不審也、謹案事情、當國本自狹少之地、管四ヶ郡十七鄉之內、三分之二已成高家庄園、不隨國務、仍先日注子細言上事由、隨顯長朝臣以後庄園司止官符宣旨明白也、史生作成通任官符宣旨之趣、拔捨於顯長朝臣以後庄園等牓示先了、其後重言上國解爲拒捍使於成通可徵進國內永承六七二ヶ年作田官物之由被下宣旨也、如此之間雖加譴責、伊勢大神宮神戶、幷東大寺高家所領作田官物、更不辨進、常成濫行不善、而今東大寺從儀師不知名、今月三日隨身數十八（人カ）、背於官符宣旨所改立也、爲令相尋件事根元、所差遣於使部重成、幷書生正助、郡決範輔等也、不辨決事實否、射打於官使等、追迷山野僅所存命也、所爲甚以不審也、爲蒙裁定重言上如件、望請天恩任實正道理之旨、被裁下給、將仰恩裁之貴者右大臣宣、奉　勅件庄准新庄庄、縱令停止本寺先注在狀可請官裁、而恣放使者□官使打縛從類奪取雜物須任犯過各處罪科、然而依有恩詔會赦已了、殊誡將來更勿令然、但於庄家如舊早可免除之狀、下知彼國已了、於官吏等押取雜物者、徒以糺返取進請文者宜承知、依宣行之、不可違失、

天喜元年八月廿六日　　大史小槻宿禰

權中辨藤原朝臣 在判

○天喜二年東大寺衆徒言上狀

東大寺言上、

請被重蒙　天恩、下給官使於伊賀國司小野守經朝臣糺改立、以判官代桃原久與爲使、恣拔弁寺家名張庄牓示之狀、

右謹檢案內、件庄前司棟方朝臣請申、可停止顯長任中以後庄等宣旨之次准自餘新庄、雖拔弁其以示、爰寺家卽尋　本願　聖王　勅施舊文、幷存長元之比新官符之旨、而請　官裁之日、任舊如本可爲寺領　宣旨、以去年八月廿六日下了、仍國司請　宣司官符、檢名張河流而依其瀨改變不定、以河爲堺、且以荒凉者、任理正尋舊流限四至、既止被（彼カ）此愁、爲寺家領　奉免先了、而當時國宰守經朝臣、以去五月廿二日入部於名張郡、恣拔弁件庄牓示、幷住人等准平氏充貴方々色々雜役者、進背　本願　勅施、兼違　當帝宣旨、是則失朝威生世亂之基也、望請　天恩、早下給官使、且公遲々問判官代桃原久興兼任（還カ）迹、令改立件名張庄限四至牓示、請狀言上如件、

天喜二年六月五日

都維那師從儀師傳燈法師位淨秀
寺主　傳　燈　大　法師位慶退
權上座傳　燈　大　法師位玄好
上座威儀師傳燈大　法師位慶尙
別當權律師法橋上人位　有慶
各自筆

○天喜二年宣旨

左辨官下伊賀國、

應停止東大寺所領宇黑田庄四至外自去年打籠數拾町公田不令勤國役事、

右得彼國去月廿六日解狀偁、今月廿二日留守所解（傳脫カ）、件庄阡陌東限名張、河南限宇陀河、西限山、北限薦生渡瀨者、而前司之任被拔弁諸庄園牓示之日、同以被拔弁也、其後日彼寺家申成改成之宣旨、如本被打立、以去年九月之比官使下同之日、須任先例本牓示所打立者也、而官使與庄內司等各成向背不辯決、還向之後、彼庄司等任恣、公地數十町之程、打籠牓示之內、始不承（進カ）公引事、因玆前司時任道理欲被亂定之間、任限有近上道既畢、而今新司下向、尋實本所雖被打牓示、彼寺家家文已以明白也、隨則不承引者、公損之甚莫過於斯者、何寺家恣打籠公田公民、可爲寺領哉、世間之監吹唯緇徒之中先爲下乎、望請天裁、早下遣官使、斷彼非橫者、右大臣宣、奉　勅國宜承知、依宣行之、

天喜二年七月廿五日　　大史小槻宿禰

權中辨藤原朝臣

○天喜三年廳宣

廳宣　名張郡田堵久富、

可早辨進黑田大屋戶兩村當年作田肆拾捌町漆段貳佰

步所當官物、兼(又カ)文依便宜辨進東大寺御封物內事、
右檢案內、去年徵下件兩村官物之自稱官省符、不致其辨之間、注子細奏聞　公家之處、任本公驗之理、可辨定之由蒙　官裁之後、彼前別當與國司共在京而令辨定之日、件官符幷免判等、稱被納　勅封御藏無其沙汰、而各分散之後、于今未辨定之間、彼年官物已以未進者、今案事情公驗者是任見作之數每年勘合之例也、依何萬納□希代勅封之官藏哉、定知以縱橫之詞、欲窄籠定限官物之計也者、至于今者、早進納國庫、兼又依便宜、可辨濟彼東大寺御封物之狀、所宣如件、郡宜承知、依件辨進不可違失、故宣、

天喜三年十二月十九日

大介小野朝臣(花押)

○天喜四年廳宣

廳宣　黑田杣司、

可早以天喜二年官物內、辨濟東大寺封物後、申請公鄉內田畠事、

右檢案內、人民之與□者田業爲宗、官物之究濟者民烟爲力、而件杣住人等乍存其旨、偏寺盛爲宗、忽諸國務之間、相矛盾是非之程、庄內者無田畠、以何爲存命之使、公卿者加制止、依誰湯耕作也、所翰而令當別當御勵忠勤之者、仍非無其會□者、於于々(今カ)者先任徵下官物之數辨濟後御寺封物之後、可申請之狀、所宣如件、宜承知、依件辨濟、可取重本寺判請文、不可違失、故宣、

天喜四年三月廿八日

大介小野朝臣在判

○天喜四年案

謹牒　東大寺　政所衙

來牒壹帋

被載欲任道理糺定寺家御領黑田御庄居住菅原是吉妹官女羌父同松國許麗上間、爲飯高延行勾引取狀、牒、今月十七日衙牒、同廿五日到來偈、菅原是吉所進申文云、件官女以先年之比父松國許麗上之間、在京之程慮外被勾引取、其後黑田御庄內住母尋之間、十餘ケ年已求得也、卽飯高延行所稱從者、延行所爲甚以不當也者、任實正被糺定矣者、抑依　御牒之旨沙汰、欲令申子細之處、高嶋利光以去年二月廿二日訴於祭主、請太神宮司檢非違使宗任、今月廿六日到來卽利光愁狀云、以去永承二年十二月之比、不意之外利光女子宮犬女、罪失其行方難尋求、專不知行方、而以去正月之比、慮外爲延行勾引取之由聞得、利光幷兄弟二人追取也、而伊賀國住人田中田富、伊勢國住人僧定圓稱勾引由、押責取襖一領、衣一領、小刀二柄、爲延行押取者、依察主外

題檢非違使宗任幷定之處、不取之由利光申了者、彼辨定之後、又欲沙汰之間、御使件是吉利光宮犬女等隨身、無音罷歸已了、就中是吉利光等所愁申尤縱橫也、何者是吉進於　寺家政所申文、件宮犬女之父菅原松國也、利光訴於祭主狀中利光之娘也、亦以不取之物禰被取之由者、旁相違尤多是似構之事、殊可在　御推量也者、牒送如件、乞察之狀、今勤狀謹牒、

天喜四年三月廿九日　　前石見守大中臣朝臣(花押)

○天喜六年廳宣

廳宣　名張郡司、

可早拔辨黑田杣隣示事、

右如聞者官史生伴成道稱有　宣旨、恣公地打立牒示定東大寺所領黑田杣之四至云々、若國司雖不奉行、使獨可打立之由有別　宣旨歟、就中前司任中、件成道爲諸庄園拔隣示之使云々、何不經幾程、更當任可爲打改隣示之使哉、然則兩度之使節、旣不得其心、如以去天喜三年被下知諸國之　宣旨乎、寄事於寺社、以公地謀成庄園之輩、早進搦其身、若其力不及者、可注申姓名之由、奉行先了者、以是謂是、當國更可不下可打改隣示之綸言哉、國司申請旁大事、于今未蒙　裁定、仍早可拔弃之狀、取宣如件、事旣有理、不可違失、故宣、

天喜六年正月八日

大介小野朝臣

按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百五 終

三國地志卷之百六

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○治曆二年東大寺房官下文

下　爲延所、

早可令開發之田代荒野等事、

合壹所者於　在見作田拾漆町貳段餘歩、殘无數荒野也、

在名張郡簗瀨鄉內、

四至、東限寺上尾、南限貢御河、西限大河、北限剗山北辻、

右件田代荒野等、神戶住人實遠朝臣扈物代、元興寺大僧都御房辨進地也、而爲令開發所大部爲延宛行也者、開發三ケ年間地利免除、其後者於官物者可辨濟國庫、於壹段別一斗御加地子者、可辨進領家者也、於作手者可爲延之子孫相傳領地也、仍爲後日沙汰、所御下文成治御也者、存此旨可令開發之狀、下知如件、

治曆二年三月十一日

房官上座大法師 在判

○同三年券分

謹解　申注進所領新券分事、

合

壹處、

在伊賀國名張郡簗瀬村、

四至、東限高岡横尾、南限供御河、西限名張河、北限剝山、

右件所領、元者故馬大夫散位藤原朝臣實遠先祖相傳所領也、而任處分之文理、佐保殿修理司散位藤原朝臣信良所傳領也、爰東大寺別當大僧都御房、故實遠朝臣所進之文書、貳百卌餘石之内、限佰捌拾石所貢進如件、但至于處分之文者、依有類地不渡進、仍勤事狀以解、

治暦三年八月十一日　　散位藤原朝臣 在判

○當麻氏所領券文

謹辭　請伊賀國領所等直事、

合准米貳仟斛、

右伊賀國名張郡矢川中村田畠直、如員所請如件、

延久六年七月六日　　當麻氏さんのこ

相知人僧(花押)

○同券文

當麻三子(サンノコ)解　申賣買進相傳所領事、

合貳箇處、

在伊賀國名張郡、東限柚山、南限加陀賀明神、西限宇陀川、北限矢川、

一處　字矢川、四至、東限柚山、南限加陀賀明神、西限宇陀川、北限矢川、

一處　字中村、四至、東限山、南限矢川、西限宇陀川、北限供御川、

右件伊賀國所所領掌、元者先祖故大藏大夫清廉朝臣所領相繼、息男故馬大夫藤原朝臣實遠傳領相繼、甥散位藤原朝臣信良傳領、而三子爲實遠孫上、信良朝臣得處分文(道カ)、已依有旁理領掌、就中代々傳領之間、窪件領所四至之内、敢无他之妨矣、而今依有要用、限直准米貳仟斛、永沽進藥師別當大法師隆經既畢、雖須相副本公驗處分帳等度進、依類券文不能副進、仍立新券文沽進如件、以解、

延久六年七月六日　　當麻氏さんのこ

相知人僧(花押)

判　同年十月廿日

造興福寺次宮兼大介藤原朝臣(花押)

件券文明白也者、有國判、仍郡司幷在地刀禰等加署名者也

承保三年三月廿二日　　刀禰等

伴(花押)

大村(花押)

○承保二年中村矢川國領注文

注進、件苧桑等任郡司注文、奉免院畢、仍可隨藥師寺別當(虫喰)所勘、在地郡司承知(令カ)勤也、在判

名張郡中村矢川國領苧桑等事、

郡司長谷(花押)

合

矢川一所　祐好垣内、苧參畝　桑、中村一所

爲光垣内四段、桑參拾伍本、

僧良圓垣内五段、苧伍畝、桑貳佰本、

僧慶圓垣内三段、苧參畝、桑漆拾參本、

依忠垣内二段、苧貳畝、

延末垣内五段、苧伍畝、桑陸拾本、

右件國領所注進如件、

承保二年五月廿六日　　郡司長谷 在判

○承保二年廳宣

廳宣　名張郡司、

仰下　故信良朝臣所領田畠作人等事、

右彼田畠等、藥師寺別當御房傳領明白也、早隨彼所勘之狀、所仰如件、作人等宜承知、依件令勤也、以宣、

承保二年二月廿六日

大介藤原朝臣 在判

○承暦三年藤原保房處分案

宛行領處壹所事、

在伊賀國名張郡、

右件所領、從馬大夫實遠孫女房之手買得、無他妨領知而不慮之外身受重病、數年之間惱亂、其間舍弟藤原保房孝養之誠、尤以勝他人、其恩報何世哉、仍件所領宛處分如件、

承暦參年十月五日　　大法師(花押)

伊賀ふみともたてまつる、のこりはおなしく女はるにつねなり渡へく候、

承暦三年十月十四日　　使僧快尊(花押)

○應徳元年矢河中村四至案

左辨官下伊賀國、

應令藤原保房領掌、管名張郡可領(所カ)貳箇處事、

壹處字矢河、四至、東限柚山、南限加陀賀明神、西限宇陀川、北限矢河、

壹處字中村、四至、東限山、南限矢河、西限宇陀川、北限供御川、

右得彼國司去年十二月廿九日陳狀、以下略、

應徳元年三月廿二日　　大史小槻宿禰 在判

權中納言藤原朝臣 在判

○應徳三年廳宣

廳宣　名張郡司、

可令領知伊世四郎所領田畠地子幷苧桑之事、

右任公驗理、可令領知之狀、所仰如件、仍宣、
應德三年閏二月十二日
大皇太后宮權大進兼大介藤原朝臣 在判
○寬治元年廳宣
廳宣　名張郡司、
可早令免除院藏人所領畠桑等事、
合陸處、
由好垣內　有大丸垣內　良圓垣內　重圓垣內
爲光垣內　延季垣內
右件所領畠桑等、稱國領致妨之由、有彼人之訴者、任前司免判之衍旨、可令停止件妨也、兼又件畠內抑等今年押取之由、同可令停止之狀、所宣如件、故宣、
寬治元年十一月三日
太皇太后宮權大進兼大介藤原朝臣 在判
○寬治二年廳宣
廳宣　留守所、
可早免除國見杣篦字龍口幷鷹尾山栖事、
合貳所者、
在伊賀國名張郡矢川條字卅坂本又々南、限東國見峯際、限南檜皮峯南谷小河（野イ）、四至、限西足字戶河（今出川、清水川）北限居柳道、
鷹尾、限東樫尾際、限南樫迫小河、限西田野小津（野イ）、限北足字戶川、
右件龍口幷鷹尾山御鷹者、是國衙之進退也、然郡司近國、大膳式御修理料材木內、尺三寸木十支、比延之裏板百枚、大工作料凡絹三疋令進國畢、公用之友甚以莫大也、然則任所望之旨、彼兩所幷鷹栖等令免除畢、隨在家人等御鷹守護也、宿直无爲方之由度々所訴申也、然者爲優民、於自今以後者、雖爲往古之國領、非國衙之進退、而可爲近國之私領也、但於田野木屋者、代々御材木之津也、依公家之恐、非免除之限者、留守所宣承知、依件行之、以宣、
寬治二年三月十六日
大介源朝臣 在判
○同年定使先國請狀
下留守所、
於加地子者、可依先例之由下知先 在判
名張御領所定使懸光國解　申請　國裁事、
請殊蒙　國裁、任道理破廳許、御領所住人等可依故
馬大夫直遠朝臣例號有廳宣、住人等不隨所勘愁狀、
右光國謹案事情、件眞遠朝臣之例、在地古老者召問子細之所、彼眞遠爲當國猛者、諸郡有彼眞遠之所領、仍郡之令三田屋所宛作細也、國內人民皆爲彼從者所召仕（ヲカ）也、仍不取加地等、至于他在京領主者、皆所令徵取加

地子也、隨當御領所故藥師寺別當御房御所知之時、被立春以降於加地子者、每年所辨濟來也、其後無他妨、何當御任俄可依彼眞遠之例乎、近則東大寺法印御房簗瀨御領所者、是故眞遠朝臣之所領也、雖然不致加地子雜事之訴、何當御領所一處、可依彼眞遠之例乎、是住人等在廳官人致追從、如此之訴致也、兼又東大寺黑田御庄住人相語公民、致如此之訴云々、爲愁何事如之乎望請　國裁、不隨件住人等所勘之條、被裁許矣、仍注事狀以解、
寬治二年六月十九日　　定使懸光國
○同年廳宣
廳宣　留守所、
可停止寶光妨藏人君所領垣內事、
右件垣內、須領主進退也、何作人等致其（虫喰）哉、仍早可令領主進（脫カ）退之狀如件、留守所宜承知、依件行之、故宣、
寬治二年六月廿三日
大介小槻宿禰 在判
○同年廳宣
廳宣　留守所、
可先早令免徵藏人君所領加地子事、
右件加地子、可令免徵之由、先日成外題了、而在廳宮人幷住人等、尙以不承引云々、是有何由緒哉、仍先於加地子者、早可令免徵之狀、所仰留守所、宜承知、依件行之、故宣、
寬治二年七月十三日
大介小槻宿禰 在判
○同年廳宣
廳宣　留守所、
仰下藤藏人所領沙汰事、
右件所領田於加地子者、任先例可令免徵之由下知先了孝之條可依前司時例之狀、同以下知、仍早尋先例、且任先判可沙汰、但十四ヶ條訴之中、或有無所據事等、至于件等條者、追以可裁下、於非法者可停止之狀、所仰如件、留守所宜承知、依件行之、故宣、
寬治二年十月卅日
大介小槻宿禰 在判
○寬治七年宣旨
左辨官下伊賀國、
應任度度宣旨幷相承理、停止金岑山寺妨、令藤原保房領掌菅名張郡所領宇矢河中村等事、
右得官底去寬治六年九月十九日勘狀偁、如寺家所進宣

綱文書者、長曆二年四月左馬允藤原實遠以相傳所領名張郡周智鄉地一處、賣與宣綱父大中臣朝方之由、郡司幷在地刀禰等如證署、但無國司與判、不副直請文、所載券文直絹七十疋者、而件絹七疋字頗似他筆、又東南四至之下、載大神宮御領幷舊御領杣字等、件字同似他筆、又件券二枚之內端奧之枚頗似別紙、隨亦續目年號之處、無請印、件等條非無疑殆、又宣綱假名馬工福景、(未進カ)天喜二年官物進未勘文所副進也、件勘文載鄉鄉作田、其中名張郡作田十二町九段餘歩者、雖有郡名、不載條里幷鄉名、凡長曆以後領掌證驗詳無所見、去年始注爲相傳領之由、請在地幷在廳官人等署判、所寄進寺家也、爰宣綱進寺家申文曰件所、元者自故養祖父實遠乎、故親父朝方去長曆二年買得領掌立券分明也、而親父先年之□下向鎭西、經數年上道、不經幾程死去已畢、宣綱又幼少之間、不敢其沙汰、祖父實遠朝臣依有傍所領暫令所知、祖父死去之後、宣德相繼可領掌之處、自姉當麻氏許(手イ)、藥師寺前別當號買得之由掠領、因之爲致沙汰、籠本公驗於高家年來不返給、然間申返彼公驗及三四年隨與不知名藤藏人、擬相沙汰之處、從去寬治二年有所勞、不知大小事、雖然以他人之領地、不可沽却之由、云遣姉女許之處、件事暫相語人五僧君所爲也、更自知無沽却、早可沙汰領掌之由、度々返事分明也、以之謂之、件女相知縱雖沽却、敢無可領掌之由、加之田畠沽却之道、以在地證判爲先、兼又爲始終之沙汰、令觸知子孫恒例也、而件五僧君構謀計文書、令傳領藏人之旨、不知其理者、如所副進之姉女書狀、名張事早可思立、於自者不可爲苦之由也、宣綱可傳領之子細幷五僧君所爲之由、詳不見彼書狀、又如保房所進文書者、天喜四年二月、散位藤原實遠、注伊賀國所領田畠等、讓與養子藤原信良、是有相傳理之上、爲得孝養者、鄉々司與判其內件名張郡所領二ヶ處(一處矢河、一處中村)同所注入也、其後康平七年二月、信良注實遠處分之旨、請國判、延久四年閏七月、以件所領、處分妻當麻氏、同六年七月當麻三子、以名張郡所領、限直准米二千斛、賣與藥師寺別當隆經、其由國郡司幷在地刀禰等加證署、承保二年、國司下知名張郡司廳宣云、故信良朝臣所領田畠作人等、可隨藥師寺別當所勘、依傳領明白也者、承曆三年十月隆經相副調度文書、處分舍弟保房、應德元年三月、可令保房領掌之狀、被下宣旨、其後依宣綱妨、停止件妨可令保房領掌之狀、今年二月十八日、幷四月廿五日、兩度被下宣旨已畢、如件等文者、保房相傳領掌之趣、似無疑殆、三子君以朝方買得之文書、不令知宣綱、恣沽却隆經者、三子傳領之旨可謂非常、而令如次第文書者、三子傳領之旨、相違宣綱申狀、天喜四年實遠處分信良、延久四年信良處分三子、三子依信良處分、沽却隆經、謂其相承似無違亂、但實遠、信良等處分文、依爲案文暗難辨決、被相尋彼正文、可有裁定歟、件正文等稱爲類券之由、三子所不副渡隆經也、抑作券文賣渡隆經之條、三子不知子細、兼又三子男平致遠不加署之由、宣綱所訴申也、然而如彼券文者、三子加假字名字之上、依直物沙汰度度送隆經之書狀明白也、於致遠者雖不加署、隆經買得件所領之後、出請文、耕作彼領田其由致遠請文幷書狀尋文以顯然也、然則縱雖無致遠之署判、非可疑三子之沽却、但三子其身在者、且被尋問子細、且召彼處分正文、下給法家、可被勘決歟者、同七年九月七日、官問注當麻三子申訖記云、三子申云、件所、元者祖父左馬允藤原實遠租傳所領也、而實遠存生之時、處分甥信良件信良、即三子夫也、而信良死去之刻、又處分三子、其後領掌無他妨、然間藥師寺五僧良算、爲後夫、經一兩年之間、件良算以三子所領等、賣與要人之處、三子申云、子息有其數、隨此名張所領者、不可放與他人之由、再三雖制止、良算旁成忿怨强所賣與藥師寺別當隆經也、隨即書券文良算加署、三子同可加判之由依申候、愁以假名字加判所令賣與也、但於直惣者、件僧三子相共宛私用了、如此之間宣綱全不申有公驗之由、何況所不致沙汰也、但此兩年之間宣綱以件所、奉寄金峯山寺之由所承也者、復問云、辨申之旨不理給故、何者如宣綱解狀者、件所領不令知三子、良算暗作新券、賣與要人之由、三子申送者、而今如陳申者、擬沽却之刻、再三雖加制止、賣買之日遂加假名判者、就之謂之三子偏不知之由、所不見也、陳狀之旨相違多端、加之宣綱所進之三子書狀、早可致沙汰之由所見也、慥辨申如何者、三子申云、先條辨申之外全無別事、但宣綱所副進之假名書狀者、後夫良算離別三子之間、所申送歟、分明不悟者、復問云、件所領實遠處分信良、信良又處分三子、而件處分正文不副渡隆經、然者件正文留置、三子詑歟、且辨申子細、且令進上者、三子申云、件處分正文、於實遠處分帳者、五僧良算撰取稱有可沙汰之事、渡與能登權守賴任之由所承也、其後良算離別之間、不知給子細、又信良處分帳者、娘姉子許候歟、慥不悟候、凡如此文書等、預給件姉子也者、權中納言源朝臣俊明宣、奉　勅件所領如三子陳狀者、宣綱領掌似無理致、宣任度度宣旨幷相承理、停止金峯山寺妨、令保房領知者、國宜承知、依宣行之、

寬治七年十二月廿五日　　大史大江朝臣在判
中辨藤原朝臣在判

○同八年小槻祐俊案
名張御所領事、
右令領知給之條、宣旨有限、不可左右候事也、但非先例被宛課非法雜事之由、田堵等依來訴候、成廳宣候許也、至于有道理事者、不可依廳宣、早可令沙汰給當國者、今年間依役夫工才百姓無術計候、如此之間旁非例又以無術者由所申來候也、可然之樣可令沙汰給候、恐々謹言、
寬治八年四月廿日　　伊賀守小槻祐俊（也カ）狀在判
畠方同可依前司時之例之

○寬治八年廳宣
廳宣　名張郡司、
可早令沙汰藏人催責加地子事、
右件加地子、至于黑田御庄出作田堵等者、早可令辨濟於公鄉百姓等者、不可令辨濟者、彼郡內田數雖有其員偏稱出作不勤仕公役、催殘公田廿餘町也、仍可令停止加地子之狀、所宣如件、宜承知依件行之、故宣、
寬治八年十二月十日
大介惟宗朝臣在判

○同年伊賀守某案
獻上
名張廳宣一紙事、
右出作加地子可辨濟之由、廳宣催至定公田者、今年依足カ追カ有宛催臨時大事料乏、近々自明年者早不論庄公田等、可令徵給之由、國司所示給也、於廳宣者及彼收納期、重可令獻也、爰可令相傳給之由所候也、謹言、
十二月十五日　　散位惟宗在判
謹上　藤藏人殿

○同下文
下　官使惟清、
不可入沙汰東大寺黑田御庄出作畠事、
右件畠之地子、非國司所知、仍不可入沙汰、兼又雜物等非道押取之由、出作人々愁申者、所申有實、慥可返與狀如件、
嘉保三年五月廿七日
伊賀守惟宗朝臣在判
按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百六終

三國地志卷之百七

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國

名張郡

○康和元年請凶徒誅伐案
伊賀國名張郡凶徒事、押領東大寺領黑田已下之條、違背不極之上者頗難遁重科、早催當國地頭御家人、急速可加誅伐、若致緩怠者可有殊恐之狀如件、
康和元年十二月十三日　　心川
千葉介殿

○同二年宣旨
左辨官下　東大寺、
應停止興福寺役、致寺家修理勤、伊賀國黑田杣工等事、
右得東大寺去七月廿三日解狀偁、謹檢案內、件杣者是以天平勝寶三年四月一日寺家之修理料、依勅定所被施入也、隨則任起請之旨、所令勤仕本寺之役也、而造興福寺之間、可令雇仕之由被下宣旨、爰本寺修理久絕已及大破、於于今者興福寺將及造畢、因之如舊欲修補本寺破損者、爲被裁許注子細言上者、大納言源朝臣俊明宣、奉　勅停止興福寺役、致寺家修理勤者、寺宜承知依宣行之、
康和二年八月十二日　　大史小槻宿禰在判
中辨源朝臣在判

○康和四年廳宣
廳宣　名張郡司、
可令領知伊世四郎所領田畠地子並苧桑子事、
右任公驗理、可令領知之狀、所仰如件、仍宣、
康和四年九月二日
大介高階朝臣在判

○長治元年下文
留守所下　國見杣行事所、
可早停止龍口山檜皮峯材木造事、
右件龍口雖爲住古之國領、去以源藏人殿任中爲償公用、於郡司近國永却渡、而於自今以後不可進退于國衙之由、放券之御廳宣并廳判明白也、而近日號行事所下知、杣工等亂入、而鷹栖喰本等切倒之由、近國訴申歟、事實者似國判之輕、慥以可停止、隨件所事不幾之上、近國

務奉行之其一也、但於當時造進之材木者、出請文而借請可津出也、
急速之御用也、雖然令不可成恒例事也、於自今以後者永任先判之旨、可停止亂採也、行事所宜承知勿違失、故下、
長治元年五月十一日　判官代猪 在判
惣代裁官代佐排具 在判
散位桃原朝臣 在判
散位平朝臣 在判
目代散位小槻宿禰 在判

○黑田鄉杣工請文
黑田鄉杣工等解申請本寺政所裁事、
請被殊蒙鴻恩、任先例裁定給、於御杣眞田上官物辨濟殘不幾、國司訴申未進亘多由不安愁狀、
副進官物結解事一通、
右謹檢案內、御杣眞田官物者、段別見米二斗准米四斗二升三合也、而東大寺御封米百八十石、辨補之殘令辨濟國庫、尙不堪之輩以輕物令辨進時、代々國司皆見米二斗代絹一疋、准米五斗代絹一疋、令徵納事承前之例也、爰當任之收納使背先例、見米代々絹一疋者五八升減納、准米代絹一疋者二斗五升或三斗減納者、工等中無刀之輩(虫喰)懷愁歎、近々其辨如此等非法、敢以不可勝計、如先例率法勘於進未結解之所無幾未進、何可訴申未進臣多之由哉、望請被任先例道理裁定給、且尋代々例兼令安堵工等者、將仰　正理之貴、仍錄在狀以解、
長治三年三月廿八日　御杣工等
藤井成道
安部安重
清原成元
頭領葛木友成

○天仁三年宣旨
左辨官下東大寺、
應早進上長治元年以後、天仁二年以往六ケ年、寺領伊賀國黑田庄加納田官物返抄、兼又伊勢大神宮神戶出作洛二斗米證文正文等事、
右大納言源朝臣俊明宣、奉　勅件正文等爲勘定彼庄加納官物進未、宣仰彼寺早令進上者、寺宜承知依宣行之、
天仁三年二月廿一日　大史小槻宿禰
中辨源朝臣

○永久二年宣旨
行造東大寺事所下　黑田杣
仰下條事、
一可令早究濟大佛殿修造料材木事
右者天永二年支配下知已了、而未令究濟云々、且注結解且可令採進之、
一官使有範早可出庄家事、
右早可被召向之由、去廿三日被下　宣旨了、左衛督藏人辨奉行也、
一早勤農業兼杣工等可安堵事、
右辨濟二斗米之證文被下　宣旨、所令召官庭也、官使有範忝濟(洛カ)定言上子細歟、然者國司非法不可承引、殊守知(下脫カ)宜且勤農業且可令安堵之、
以前條事所仰如件、不可違失故下、
永久二年五月廿八日
長官右中辨藤原朝臣 在判

○永久二年廳宣
廳宣　名張郡司、
可早令免徵矢河中村田畠加地子幷苧桑等事、
右任先廳宣等、隨領主之所勘、各可令免徵公驗有限、宣旨顯然也、郡司宜承知勿遲怠以宣、
永久二年七月廿日
大介源朝臣 在判

○永久三年下文
行事所下　黑田御庄、
可令早停止雜役免田堵稱公卿在家、背先例宛課國役事、
右件田堵等、雖居任(住カ)公卿爲雜役免、無勤國役之例、而今背先例、令宛課之由已有其訴、就中近日修造大佛殿間、人夫之役連綿不絕、從有舊跡須令停止、況於非法哉、仍且以此旨賜國使乎可(早カ)禁遏、且不承引、早可曳進御寺材木等之狀、所仰如件、故下、
永久三年三月廿四日
次官中原朝臣 在判
寺主威儀師 在判
都維那法師

○同下文
行造東大寺事所下　黑田杣
不可承引公卿保長郡司等、稱在家夫則重弘元、宛催國見杣夫役事、
右彼杣解狀之國見杣夫者、率公田所催仕也、而今年始宛在家、追捕弘元等、押取內財之間、已無其理者、如解狀者國使所爲頗不隱便、何背先例始可宛行哉、就中修造大佛殿之間、夫役重疊豈可然乎、觸示此由專不可承引仕、於押取物慥可注進色目、早經奏聞爲令糺返也、

杣工承知、依件行之、故下、
永久三年八月十九日
長官右中辨在原朝臣 在判　判官左大史 在判
次官中原朝臣 在判

○同黑田杣工請文
黑田御杣工等解　申、重請　行事所裁事、
請被殊任例裁免御封石別三斗見米子細狀、
先例被裁免之例、
故勸修寺僧正御房別當時三ヶ年、二年皆免、一年半分免、
故東南院法印御房別當時二ヶ年、一年皆免、一年半分免、
故禪林寺律師御房別當時、御塔修造之間、被裁免
件見米之上、徵下材木皆悉所被下行直物也、此外
麥畠加地子被免除也、
右言上子細先了、雖然依未蒙裁定、重注子細言上如件、
抑先例被裁免件見米者、或時依年穀不熟之愁被裁免、或
時依所役繁多之訴被裁免、而今年相當大佛殿大修造之
時、杣山川之役爲一日(虫喰)休息時之上、依去七月十六
日洪水、田畠作物皆以不登也、仍件辨無爲方、但往古之
例、諸徵下之材木、皆定直法被立用御封辨庄田官物、所
謂二會板一枚直米一斗、方(虫喰)木一支直米(虫喰)也、
而近代無如此之立用、所被召下之大物虹梁少材木等其
負數千也、若不蒙裁許者爭廻跡令勤仕杣役哉、望請恩
裁、任先例爲被免件見米、注子細重以解、
永久三年十一月三日　御杣工清原成元

○大治元年廳宣
廳宣　名張郡司、
可令早辨濟僧晉助訴申中村所領加地子事、
右任文書之理令領知、於所當官物者、可令究濟國庫之
狀、所宣如件、郡司宜承知依宣行之、
大治元年十二月日
大介源朝臣 在判

○同二年廳宣
廳宣　名張郡司、
可早任先度廳宣、辨濟中村田畠加地子米事、
右件中村田畠等、爲領主(虫喰)經年序、然者但任度々カ
宣旨、且依公驗之理、隨見作辨濟加地子、可隨領主所
勸之狀、所仰如件、田堵等宜承知、依件行之、故宣、
大治二年二月三日
大介源朝臣 在判

○大治四年下文
留守所下　名張郡司、
可早令停止往古國領宇龍口開發田畠及國見御杣等俄

大野庄住人等企妨事、
右件龍口往古以降代々間、爲當國名張郡國見御杣之內
嘗カ含无有窄籠、何暗稱大和國大野庄之內、猥致妨哉者、
寄力郡司刀禰百姓等、可令停止件妨之狀如件、宜承知、
不可違失、故下、
大治四年五月十二日　　散位源朝臣 在判
藤原朝臣 在判
源　朝臣 在判
源　朝臣 在判
目代仲原 在判

○大治五年河成四至文書
東大寺牒　伊賀國衙
欲任天平施入文并度々官符宣旨等、如本限舊河跡
爲東堺、被免除其內田地所當官物等、領名張郡字
黑田杣狀、
河成地四至、東限舊河跡、南限牓示尾、西限新川流、北限供御河、
副度々官符宣旨并坪付等、
牒件杣者本願聖靈寶感神聖武皇帝天平之比爲大伽藍建
立、以名張河爲東堺、所被勅施入也、而往古以降每度洪
水、件大河押穿庄內、其流移改經數百歲之間、彌漸頹奇
西高山之麓杣領田畝、追年流減、居住民烟如無殘地、如
長和三年坪付者、庄內見作田三十三町一段百八十步也、
件北尙不及本領之半、今何況近年所殘僅十町許地也、
爰本堺舊河既成桑田、代々之國司、限新流次第收公如
此之間、度々雖被下　宣旨立牓示、彼土民等寄事於左
右、爲道寺役、爲誰國務故好不爲本庄也、此則爲國無益
於寺有損、件地雖成故疇、猶古河古堺以爲其宇、所謂鮎
瀨鮎土河合河原田淵尻溝口并庄迫等也、近年國檢田坪
付等其宇明鏡也、且欲慰出作巨多之論、兼爲散本庄耗減
之愁、早任天平施入文并度々官符宣旨等、如本限舊河
跡永爲庄領、被免除所當官物者、將祈國家太平、遙傳
伽藍法燈矣、乞衙察伏、牒到准狀、故牒、
大治五年六月十日　　權都維那威儀師(花押)
都維那法師(花押)
別當權少僧都
上座大法師
權上座大法師(花押)
寺主威儀師
權寺主大法師

○天承元年廳宣
廳宣　名張郡司并百姓等、
可令早停止傳法院領大野庄住人亂行事、

右如郡司刀禰等解狀者、彼庄住人等越往古之堺、國領之地龍口村發來、致亂行之由有其訴、抑國郡堺不可有私左右、舊跡有限歟者、早停止彼庄住人等非道之妨、可勤國役、兼又國堺內移住之輩、可追却之狀、所宣如件、

天承元年七月廿八日

大介源朝臣

○長承二年僧源祐券文

僧源祐謹奉渡　所領一所事、

合

在伊賀國名張郡宇矢河中村者、（四至載公驗面、）

右件所領相傳領掌之後無他妨、而爲往古東大寺負田之上、寺家修造至要基也、因茲親父保房爲資冥途之苦患（覺カ）、以件庄公驗不可出寺外之由成遺言、讓與大法師禪覽、隨禪覺付囑於源祐既畢者、任保房本意、永所奉渡東南院僧都御房也、仍爲絕向後牢籠、相副本公驗、立新券之狀如件、

長承二年正月十七日　　僧（花押）

○天承二年官符

左辨官下　伊賀國、

使右史生紀有季　　從參人

使部貳人　　從各一人

右內大臣宣爲令實檢伊勢大神宮領六箇山幷東大寺領黑田庄等境、差件等人發遣如件、國宜承知、使者給彼之間、依例勤供給官符追下、

天承二年七月二日　　右少史中原朝臣（在判）

中辨平朝臣（在判）

○長承三年新莊取簿

注進　新御庄矢川中村夏見公畠取帳事、

合五拾參町陸段佰捌拾步者　之中

（虫喰）畠陸（虫喰）段

行（作カ）畠貳拾肆町參百步、

損畠五町一段陸拾步、

得畠拾漆町五段半、

所當御加地子麥拾漆石五斗五升者、

一矢川條公畠

合

米支名

三谷口麥一段、　得一段卽門麥一段半、損半

居內麥二段、一段　近貞內麥一段、損小、得大

近正內得半、　加波井南得一段半、

同東得一段卅、　加坂本東麥一段半、損小、得三段、

一井得半、　米支內麥二段半、損小、得半、

國員作得小、　中上野得二段、

東上野得大段、　西上野得一段大、

二切麥二段、損半、得一段、同西麥小、損六十步、

小井乎南麥半、損六步、

今枝名

近成作麥三段、得半、卽居內麥四段、得二段、

同西垣內麥二段、　卽門得小、又得六步、

寺前得二段、　同北荒三段、

又同下麥小、二段半、　加波井下麥二段半、損小、得半、

一井得一町五段、　又同東麥三段大、損大、得六段小、（十步カ）

上野麥半、損六十、得六下、　加波井南得一段、荒八段、

同上得二段半、　岡西秋時得小、

岡東安近荒一段、

永久名

三谷口得一段半、（十步カ）　又同取麥大、得一段小、

岡前得六下、　米員作麥二段小、損小、得大、

寺垣內麥四段、損半、得半、守國內麥四段、損半得一段

一井得二段、　加波井南荒二段、

中上野米員得一段半、正重內麥一段、損小、得一段、

守支（友カ）內麥三段、損一段、得一段、

爲末內麥四段半、損半、得一段、

冷水得大、　東上野麥一段、小損、（得二段半、意三段、）

大萬麥四段、損小　又大萬上野、得三段半、

岡南得半、　一木南得一段大、（大萬作）

冷水上麥一段、損小、得二段、　同上麥一段、

則久北麥大、　近元麥一段半、損半、得一段、

則久北又麥一段、損小、　正支（友カ）得六下、（十步カ）

長坂正支（友カ）得三段、

一瀧口　得麥、荒二町、

一各寺

小落南　永　得麥　政所下田東頭得二段半、（殖桑廿本、）

又末支（友カ）作得二段、　大落東脇荒二段、

已上　得畠四町九段、損畠九段、

得畠九町三段小、荒畠五丁一段、

一中村條民畠、

合

寬童名、

木屋東麥三段半、損一段、得半、

居內麥大、損六下（十步カ）、得大、

加波西麥二段小、損小、得大、

近安名

國任內麥二段大、損小得三百大、

木屋比垣內麥一段、損半、得小
即垣內麥半、得半、　安貞作　得一段大、
板淸麥四段半、損一段半、得一段半、
常土爲支麥三段半、損一段、　宗貞寺東麥二段、
爲支內麥二段大、得二段小、安貞作麥半、得小、
又爲支內麥一段大、損大、　又同西枝淸作麥一段、
又同西爲成作麥大、　又安貞作麥一段半、
次弘作麥一段、　芋生南重則麥二段、得段、
墓原脇安貞麥一段半、損半、得一段、
壇未元麥二段半、損半、得二段、
同西支爲麥六段、損一段半、得二段、
櫻井麥三段大、損大、　未元東爲末麥一段、得六卞、
未元又東得二段荒、　江奈子麥一段小、得小、
同又南麥一段半、
山本爲末麥三段半、損半、得二段、
同南枝淸一得半、　山本東金輿麥一段小、損小得一段、
爲成內麥一段半、損六卞(十步カ)、得半、
同西安弘內麥一段、損半、得二得、
屈池久支麥一段小、(虫喰)　同南久支麥半、得六卞、
同西成次　得半、　同南成正麥大、損六卞、
則末內爲支麥二段、損半、　柚井得麥、

延久法師壇上麥一段、得一段、　大萬伏木南麥大、
武方麥一段六卞損半、得半、　離岡廻得三段半、
同北麥小、得二段大、　池內西麥一段半、損小、
池內北麥一段大、損大、一段半、
同東枝淸麥半、損六卞、得一段、
爲成作麥小、亡損(虫喰)、　同東爲成　得大、
同西行枝麥六卞、亡損、荒一段半、
友久居內西東麥三段半、損一段、得一段半、
武成作　得一段、　藏知得一町、
一切北得小、　安貞作爲未麥一段半、
又安貞作麥二段半、(虫喰)三段半、
國行名
江奈子麥一段小、
相義名
成次南麥一段半、損半、得一段、　西野田麥、(虫喰)
常樂寺敷地一段、(虫喰)半、
今枝名
木屋南麥一段、損大、荒一段、
永久名
安光內麥三段半、損半、得一段、　一本得一段、荒一段、
安光東大萬、得二麥、　同西麥小、得五段、

正支前、得六十步、
下延國名
永久內麥二段損半、得一段、
是吉西麥一段小、損小、得小、　棚比禮荒四段、
末支名
一木西得四段、荒大、
德住法師名
旣內麥三段小、
國夫名
是吉北麥大、損亡、得一段、　永久內麥三段、損一段、
同西麥四段、損大、　馬渡南麥三段半損一段、得一段、
未依北麥二段半、損小、
是吉名
居內麥一段半、損一段、得二段大、
則末內麥二段大、損大、　黑石垣內麥一段、
壬生寺
敷地麥一段、得一段、
貞恒名
棚比禮寺敷地麥二段、損一段、得三段、　道北得一段、
馬渡東麥一段半、損半、得一段、荒二段
同西麥一段、損半、得一段半、　棚比禮支元作得半、

馬渡南麥五段、損一段、荒一段、　經智房內得一段半、
同西麥三段損一段小、得一段、
重恒名
雜師垣內麥半、損亡、得半、
棚比禮二段、損一段大、得三段、
小屋垣內麥一段六十步(虫喰)、得六十、十步(虫喰)
不依作(虫喰)　藤迫中尾　得二段、
恒貞作
同尾得麥、　芋生東麥六十步、損亡、
依支名
居內得大、　棚比禮得一段、
勢瀰名
袖井得一段小、　雜師西麥一段大、損一段、
雜垣內得二段、　經智北麥一段、得大、
末依居內麥六十步、得一段小、　藤迫北尾得二段、
棚比禮得一段、　永久居內麥一段、損少、
京元名
棚比禮麥一段、損半、得二段、
有元名
棚比禮荒二段、
松吉名
有光內麥一段小、得小、　爲近內麥六十步、

永久居内麥一段大、損大、得小、
爲支麥二段大、損大、得小、
恒行内麥二段定大、損大、得六十步、
恒行北麥二段、得六十步、
則包名
即内麥二段、損半、得一段、
一青蓮寺
下延國名、　西杣口得二段、
是永名
富坂脇麥小、得大、　下田北取一段カ大、
國津神戸得六十步、
安行名　富坂脇麥六十步、得一段小、
末正名
下田西得小、井手得半、川合麥小、得一段大、
三郎丸名　下田南得小、後山得小、得一段、
垣元名　下田東得二段、
友久名　是水東得一段小、
近房名
川合南得大、居内得小、荒二段、杣口得一段、
垣友カ支名
川合南得小、杣口西得大、同南得小、

怏久名　後山西得一段半、川合北得小、
同延名　上田得一段半、
清貞名　寺窪得一段、
末貞名　落西脇得大、
嚴智名　落南脇得大、
是正名　溫谷得六十步、佐田得一段、
末元名　溫船谷得小、
已上　得畠十一町三段大、
損畠三丁五段三百步、
得畠十三丁九段半、
得畠一丁七段大、
一夏見條公畠
合
寬同名
小路口東麥三段、　同面麥一段半、損半、得半、
安澤麥五段小、　石神麥三段、損一段、得半、
率都婆戸麥一段、是重田麥一段小、損小得小荒小、
吉與麥一段小、損段、　時吉内麥小、得半、
井口麥一段小、損一段、
下延國名　方田北麥大、損小、得半、
重恒名　永松垣内得四段、

已上、得畠一町二段三百步、損畠六段百卅步
得畠八段、　荒畠百廿步、
右注進如件、
長承三年七月　日　　專當伴
刀禰僧(花押)
公文僧(花押)
下司内藏(花押)
散位大江(花押)
御使僧(花押)
按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百七終

三國地志卷之百八

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○永曆二年黑田庄出作田案
黑田御庄
重注進簗瀨請作内注落出作幷號押作往古出作田等事、
合參町漆段陸拾步、
一先日注進注落坪田五段、
中村條字池田、爲行カ名、
一號押作往古出作田三町二段六十步、
矢川條四段、國岡名號今枝名、
中村條二町等、
枝時名五段、號未垂名、字綾滿坪、時末三段、號同名同坪、
清貞一段、號垣行(恒カ)栗穴坪、永光二段、號未垂字綾滿坪、
友カ支重一段、號名垣名星川、友カ支久二段、董荒東、

是吉三段、同坪荒田、　垣重二段、號眞光伊豆田東、
清永一段小、
夏見條七段三百步、
清永二段、谷口坪、　爲行三段半、屋廻南號眞吉、
眞延小　木本東、　上切二段、

右件田往古出作田也、而近來俄號押作准公田、所當官物幷臨時雜役所責勘也、仍任先例爲被出作、注進如件、

永曆二年二月日

○同案

黑田御庄

重注進簗瀨請作內注落出作幷押作往古出作田等事、

合參町漆段陸拾步、

一先日注進注落坪田五段、

中村條字池田、爲行名、

一號押作往古出作田三町二段六十步、

矢川條四段、國岡名號今枝名、

中村條二町爾、

技時名五段、號未並名字綾滿坪、　時末三段、號國名同坪、
清貞一段、號恒行栗穴坪、　永光二段、號末並字綾滿坪、
友カ支重一段、號石垣名星川、　友カ支久二段、董荒東、

是吉三段、同坪荒田、　恒重二段、號眞光伊豆田東、
清永一段小、
夏見條七段三百步、
清永二段、谷口坪、　爲行三段半、屋廻南號眞吉、
眞延小、木平東、　上切二段、

右件田往古出作田也、而近來俄號押作准公田、所當官物幷臨時雜役所責勘也、仍任先例爲被出作、注進如件、

永曆二年二月日

○簗瀨莊官物濟否文

下　公文所、

可勘定、在判　勘合

散位大江朝臣在判

注進　簗瀨御庄承安元年官物濟否緒解文事、

合徵符田漆拾肆町一段佰捌拾步、

除十四町五段大、內號十六丁內七丁二段、公文一丁、號比奈知押作幷神領六丁三反百廿步、

定田伍拾玖町伍段參佰步、

所當米佰拾玖斛一斗漆升、段別二斗、

所濟佰二斛參斗二升陸合、

國庫納六十五石四斗七升六合、在小返抄七枚、御封立用三十四石八斗六升、

井料三石、

勘合了、散位大江朝臣在判

未進拾伍斛捌斗參升肆合、

依無國於不知損得不(虫喰)裁許、

右件未進之足、依無不作幷干損水損爲方、于今遲々、雖然徵出退可令返抄取進之狀如件、

承安二年八月日　公文馬土在判

○同三年文

下　公文所、　在判

可勘定、　勘合了、

散位大江朝臣在判

簗瀨御庄去年作田官物濟否結解事、　承安二年

合徵符田漆拾肆町一段佰捌拾步、

除漆町參段佰貳拾步、公文立用一丁、號比奈智神押カ作幷神領六丁三段百廿步、

定田陸拾町捌段陸拾步、

所當米佰參拾參斛陸斗參升肆合、段別二斗、

所濟佰拾二斛二斗貳升伍合、內在見小返抄九十九枚、

收納使納五十六石九升二合、內但無宗清之五石、依名主他行返抄、

御封立用三十三石二斗、

恒例井料立用之石、

未進貳拾壹斛肆斗玖合、

右大略注進如件、　勘合了　散位大江朝臣在判

承安三年四月十五日　簗瀨御庄土

○承安四年大內役免除文

謹請

東大寺領伊賀庄々修造大內役免除事、

薦生村、　湯船玉瀧村、

名張郡公田、　簗瀨村、　黑田杣、

右早如被仰下候、可下知國宰之狀、謹所請如件、

承安四年五月廿六日　左少辨兼光奉

○承安四年廳宣

院廳下　伊賀國在廳官人幷東大寺所司等、

可且依文書、且任國司廳宣、永爲當寺領、同所司等訴申當國名張郡黑田庄出作幷同郡內新庄等之事、

副下國司廳宣、

右彼所司等今月　日解狀偁、謹撿案內、件田畠內黑田庄出作者往古寺領也、所當官物便補當寺御封之外、所濟來國庫也、然而當任國司所殘之官物不幾之上、依寺家訴訟不絕、永奉免大佛畢、次於新庄者、又同雖爲寺領、動近來企收公之間、專寺他寺之惡僧等、互企押領之間、爲國旁證譁不盡之故、任文書之理、同可爲寺領之由成廳宣畢、爰寺家任廳宣狀、各雖令領知、後代之牢籠猶非無疑殆者、永停止向後之牢籠、任國司廳宣可爲寺領之由、欲被成賜御下文而已、當寺自往古彼國寺

領、偏宛來修理興法用途之所、若件寺領率籠出來者、當寺又令滅亡者歟、望請廳裁、且依文書道理、且任國司廳宣、件出作新庄等、停止一切勅事國役、可爲不輸寺領之由、被成賜廳御下文者、將仰　皇恩之無偏、彌奉祈万歲之寶祚者、且任文書理、且任國司廳宣、永以當國名張郡黑田左出作幷郡內新庄、爲當寺領之狀、所仰如件、在廳官人幷當寺所司等宜承知、不可違失、故下、

承安四年十二月十三日　主典代大藏大輔中原朝臣在判
別當權大納言兼中宮大夫藤原朝臣在判
判官代左少辨兼右衛門佐平朝臣在判
權大納言藤原朝臣在判
左衛門權佐藤原朝臣在判
權大納言藤原朝臣
左少辨藤原朝臣在判
權中納言兼左衛門督藤原朝臣在判
兵部大輔藤原朝臣
權中納言兼右衛門平朝臣在判
權中納言兼左衛門督平朝臣在判
參議右兵衛平朝臣在判
大皇太后宮權大夫藤原朝臣在判
右近衛權中將兼皇大后宮權亮藤原朝臣在判
修理左宮城使左中辨藤原朝臣在判
散位高階朝臣
遠江守藤原朝臣在判
權右中辨藤原朝臣

○東大寺學生供料案

東大寺

定置以寺領伊賀國名張郡黑田庄出作幷同新庄等所當、永相宛當寺常住學生百口供料事、

右件田畠內黑田庄出作者、往古寺領也、所當官物內便補當寺御封之外、以所殘所濟來國庫也、同新庄者又本雖爲寺領、近來爲國被收公以來、專寺他寺惡僧等互企押領之間、爲寺爲庄依誼譁不絕、偏停止向後窄籠、爲令無事之寺領殊入公私之力、所申成一色不輸　院廳下也、於今者須叱當寺御封就國猶雖可加其催、頃年國領不幾之間、國若不濟之者、還依可爲斷絕因緣、任舊只以出作所當內便補御封、以所殘幷新庄所當等、永所定宛常住學生百口之供料也、於公事者猶如本、隨本庄之催促可令勤仕、更不可有新議者、仍限永代所定置如件、

承安五年二月　日

別當法印大和尙位前權大僧都在御判顯惠
法印大和尙位前權大僧都在御判敏覺
權大僧都法眼和尙位　御判雅寶
法眼和尙位　在判寬眞
前權律師法橋上人位　在判實惠
權律師法橋上人位　在判明遍
法橋上人位　在判景雅
法橋上人位　在判慶宗
傳燈大法師位　在判
傳燈大法師位　在判
傳燈大法師位　在判

○安元元年廳宣

廳宣　留守所、
可令早停止亂入黑田庄內國使幷地頭等事、張カ
右國司使相語興福寺惡僧等亂入庄內、旅行濫吹之由、自彼寺家所訴申也、事實者甚以不穩便、但件條且一切不下知、且雖不知子細、任御敎書狀、可令停止彼濫行之狀、所宣如件、留守所宜承知依件行之、以宣、

安元元年十一月廿日

大介源朝臣(花押)

○興福寺政所下文

興福寺政所下　東大寺領伊賀國黑田庄出作人等所、可早任　院宣停止旁新儀沙汰當庄出作事、

右件出作事、去廿一日　院宣、同廿二日到來、偁伊賀國黑田庄事、

東大寺別當申狀幷所司解狀副證文等、如此、如狀者尤以不便、早可令停止彼新儀沙汰之由、可令成進寺家下文者、早任　院宣之旨、可令停止新儀沙汰之狀、可所仰如件、庄民カ等宜承知勿違失、故下、

安元元年十一月廿二日　知事法師

上座大法師(花押)　權專當法師(花押)
寺主大法師(花押)　權專當法師(花押)
寺主大法師(花押)　大知事法師
權寺主大法師(花押)　知事法師(花押)
權寺主大法師(花押)
都維那威儀師(花押)
都維那法師(花押)
權都維那法師

○東大寺衆徒愁狀

東大寺衆徒誠惶誠恐謹言、

請殊蒙　天裁、被　宣下、三箇條愁狀、

一伊賀國司信平朝臣可被行罪科事、

右謹檢庄內、當伽藍者封戶庄園昔雖遍五畿七道、綏(マヽ)所殘寺領今在二三ヶ國、其中以伊賀國名張郡黑田庄一所修造興法所支万事也、回茲梵宇不傾法輪久轉、然則聖武皇帝施黑田之杣山、永宛寺家修造料、良辨僧正破笠置之磐石、下泉川之材木筏、當初依本庄狹少、杣山住人尋(虫喰)漸出作者、便補寺家御封之外、所殘官物年來辨濟國庫、而去年冬之比前別當顯惠法印被申下

院宣狀云、於名張郡黑田庄出作幷新庄所當官物者、奉免大佛舍那可、爲百學生之供料者、而當任國司忽不經幾時節、忽背

院宣、相語興福寺惡黨成廳宣了、任興福寺別會取下知可停止東大寺東南院南方妨、件狀所副進也、依之自十月下旬至十二月上旬、三十餘ヶ日之間、興福寺中綱士丁古今頭二三十人、帶弓箭兵杖亂入黑田庄、追捕庄民押　財雜物、連日惡行不可稱計、仍一庄大略如顚倒、取行左道何事如之哉、依經奏聞被尋問子細之處、正乍成廳宣、都不知給之由申奏事、不實罪重過難遁、一庄爲彼滅亡、大佛舍那之大怨敵也、早停任國司配流之罪可被行也、

一　請永止奏事不實、重被宣下築瀨村事、

右件村者其名雖(虫喰)即黑田庄出作之內也、爲往古寺領之上、治曆三年散位藤原實遠依沉寺家之屓、黑男信(田イ)良爲償其屓物、限見米百八十斛、永所渡寺家別當有慶大僧都也、其後慶信法印、覺樹僧都、惠珍僧都、聖慶大法師等、代々相傳領掌年尙矣、是名張郡之內黑田庄出作最中也、去年所成給　院宣有漏之乎、往古寺家證文、去年　院宣、尤足爲龜鏡、爰信平可停止東大寺東南院兩方妨之由、依成送廳宣、別會五師云善重所成下也、云彼云此謀計之甚也、被寄百學生供料之內、別相分件村所當官物、被宛三論卅講供料也、既是致鎭護國家之勤、殊奉祈　太上法皇万歲千秋者、任代々相傳、准去年宣下狀、永停止國衙妨、可爲卅講供料之由、重欲被宣下矣、

一可早召禁獄伊賀國長(名カ)張郡司俊方幷子息三人事、

右俊方年來之間、招集十方盜賊殺害之輩、連々惡行時々無絕、近日與國司相共寄事於興福寺威、將顚倒黑田庄依　奏聞子細、付國司被召其身之處、又今月五日午時俊方男三人、引率隨兵二三十人、行向彼庄所住當寺修學者彼文海住處、即殺害文海、資財資具悉盜取、近隣在家濟燒失、其中牛馬七疋被燒害畢、白中惡行未曾有如此事、爲傍輩爲向後、早可被召禁獄也、

以前三ヶ條言上如件、凡計伽藍之不退、誠是國家之德化也、抑　國家之無爲宣非伽藍之擁護乎、金光明四天王護國之寺其名實哉、本願記文我寺興復者、天下可興復以代々國王可爲我寺檀越者、忝非仰　皇澤者、豈念佛閣乎、望請　天裁、任去年宣下狀、往代領掌之旨、永被停止方濫(方脫カ)妨者、住持一寺佛法、奉祈　万年之寶祚矣、誠惶誠恐謹言、

安元元年十二月日　　衆徒等

○養和元年黑田新庄田數四至案

東大寺

注進黑田庄出作新庄田數四至事、

合田數貳佰捌拾玖町貳段佰參拾步之內、

矢河條五十六町七段二百五十步、

出作三十八町七段六十步、

新庄十八町百九十步、

中村條百十七町九段二百卅步、

出作九十六町九段五十步、

新庄廿一町百八十、

夏見條四十町四段六十步、

出作三十三町二段二百四十步、

新庄七町一段百八十步、

佐久田條十三町五段六十步、出作亡、

築瀨條六十町五段三百步、出作亡、

已上五ヶ村四至、方券契注之、

東限寺領杣山幷鳥居小野、

南限鹿高明神、

西限本庄、

北限剝山、

右承安四年賜　院廳御下文之內、往古寺領出作田數四至如此、重爲被載　廳御下文、注進如件、

養和元年八月　日

權都維那法師嚴信

權都維那法師覺永

權寺主大法師定元

寺　主　大法師暹寬

權上座大法師永俊

上座威儀師大法師玄嚴

○養和元年　院宣

東大寺申黑田庄出作幷新庄所當事、

國衙申旨區分裁許遲引之間、寺家封戶百學生供料參期欲過、任先度廳御下文、且可令催沙汰者、依院宣上啓如件、

養和元年十月二日　　左衛門權左光長奉

謹上　東大寺別當僧正御房

○正治元年案

東大寺三紀大法師等（綱カ）重解、申請　攝政殿下政所裁事、
請被殊蒙鴻恩、任往古舊跡幷數通證文、停止
傳法院領大和國長瀨庄住人等、越堺道押領寺領伊
賀國黑田庄内多町田畠新議者道子細狀、
副進
寬治二年伊賀國司廳宣案一通、
同五年依寺牒所成國判案一通、
長治元年同國留守所下文案一通、
返上狀加當寺本解、
右黑田庄者、聖武天皇　勅施入之寺領也、歷四百餘年
長瀨庄又傳法院往古之所領、年序不知幾許、兩庄卜隣、
卽以兩國爲堺之所、年來自長瀨庄方全無堺相論之
妨、而當庄内字北龍口幷唐懸、此兩所田畠等、可爲長
瀨庄領之由、今年五月之比、彼庄民等始出訴之日、以
件折帋別當僧正依被觸送當寺、件濫妨爲僻事之子細副
證文、度々令陳申已畢、然而不用其陳狀、去八月十五
日興福寺中綱下向彼庄、引率住人等忽亂入當庄、無左
右黑田庄内立札、欲押領之刻依令言上子細、別當僧正
被召下龍穴寺所司等陳狀之時、此事不可及新議之由賜
御敎書畢、長瀨之妨已爲新議之間、於黑田庄民等者早
蒙御裁許畢之由、日來所令存知也、仍其後不言上子細
之間、驚今度之御敎書、所進覽證文等也、重檢舊貫件
北龍口者、是往古國領也、而郡司源近國、寬治二年自
國司乎（手カ）永可爲私領之由、成得廳宣之上、又長治元年留
守所同成免除下文了、仍近國多年領掌之後、以件龍口
讓與男近俊了、近俊又一期領知之後讓男俊方、俊方爲
三代之郡司無相違領知之間、至于承安年中、件龍口依
院宣被加寄于黑田庄已畢、今號新庄是也、龍口其新庄
之最中也、其時俊方改郡司之本名、爲新庄之下司、其
職雖攻其領末變、俊方亡沒之剋、以件龍口又讓與男兼
俊了、仍近國近俊俊方兼俊四代相傳、漸及百餘年之間
昔爲國領今已寺領也、長瀨庄何年何日令領知件龍口哉、
自傳法院宛行近俊之由以外大無實也、若爲長瀨庄領者
已可、而大和内伊賀國司爭輒可宛給近俊、尤長瀨庄尤
其時可出訴歟、縱又其時雖無沙汰、承安年中可爲寺領
之由、被下　院廳御下文之時、長瀨庄何又不致其訴乎、
今年始企非論以之無道之條暗可有違直歟、又唐懸者是
黑田庄往古之所領敢無異論、而延久二年伊賀宰吏欲押
領之日、成寺牒依令觸國司、寬治六年五月廿一日之免
判已了、其後又百餘年、未聞他妨、今年始有相論、誠
新議中之新議也、今所進之證文件等子細顯然歟、隨又
龍穴寺今度陳狀云、兩庄堺者卽兩國之堺也了、而寬治

二年伊賀國司賜龍口之廳宣於近國、同六年同國司成唐
懸之免判於寺牒、又長治元年有留守下文、旁相論地爲
伊賀内之條、何可及疑殆哉、但兩方可遣使（使カ）之由、僧正
依被牓送堺已分明也、兩寺便（使カ）下向之條、向後可止異論
之基歟、有何事哉之由、三綱各令申沙汰之所、兩寺便
令下向者、其時長瀨庄者興福寺威勢押可打牓示之由令
支度之旨、自以披露之間、當將使者下向之議思留畢、
隨則中綱下向依令懸札、件風聞非僻事之由所令合點也
宇陀郡司之繪圖判行之條、是又不是、披陳大和國郡司、
誰可背興福寺下知乎、抑雖如此令言上、猶御不審者、
召兩庄官可被遂一決也、一決若難切者、其時被實檢地
頭之所、不經次第之沙汰、無左右可遣御使之由被仰下
之條、難得其意歟、兩方理非上仰賢鑒而已、望請鴻恩
任件等證文、永被停止長瀨庄非論者、將仰正理之不朽
矣、以解、
正治元年十一月日
按、以上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百八 終

三國地志卷之百九

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○東大寺所司問注
養和元年八月十八日問注東大寺所司伊賀國在　廳等
申詞記、
源兼信
右問兼信云、去三月日東大寺所司等解狀偁、去年十二
月南都滅亡、今月一日先所領庄園如元可令寺領之由被
宣下之所、至于伊賀國黑田庄、國司尙不承引、重所停
廢也、國解之趣黑田庄本免之外、寺僧無指故掠領數百
町公田云々、言上之旨詐稱之甚也、故何者彼庄本田之外
號出作新庄者、寺家自元依寄得地主券契、八十人杣工
等以此地爲居所、永被免國役、一向勒來寺役、尙於所
當官物者、依爲寺々工之負田、不准餘公田、減官物於
二年代之内分、其所當先便補當寺封戶、其外纔以前殘

所令辨濟國庫也、子細見于所進官府國判等狀、而爲徵納件官物國使亂入之間、寺彼勤（役カ）及闕怠、所濟爲國雖不幾爲寺極煩也、依爲年來之愁、別當顯惠法印知行之時、御封便補之殘事、觸訴子細於國司之赴、次第依有之、宜令成奉免廳宣之上、爲斷向後之牢籠經奏聞之所、承安四年一向可爲寺領之由、被成下廳御下文畢、于時法印任舊以出作所當內、便補御封以前殘并新庄所當、永所定宛當住學生百口供料也、募其供料、於鎭守八幡大菩薩寶前、揮一百人學侶、披三十座之講筵、法味添三所之莊、惠日有再中之慶、加之嘗六十口僧徒、三ケ日之間轉讀三部大般若經、彼是共爲每年之例事、遙契後佛之出世、捧其講讀之薰修、偏祈法皇之御願事非抑（聊カ）爾、何忽失墜乎、隨則件出作等本自是寺領也、不似一向之公田、又已蒙廳裁畢、何稱僧徒之押領乎、國司乍知此子細、去年秋頃以後、背廳御下文猥企停廢之條、非啻輕吾后之御威、亦非奪百僧之資緣乎、罪障之甚只在斯事、伏思事情昔聖武皇帝之施一萬町之水田也、歷五百歲而未改、今我后法皇之賜百學生供料也、隔七箇年而豈變、古今雖異歸依可同者歟、件子細依實并申如可棄信申云、先黑田本庄停廢之條以外無實也、去正月依惡僧之謀叛雖被下沒官之宣旨毛、別豆加優恕不檢注四至內須、所

免除所當也、就中如元可爲寺領之由被宣下之後、彌不及沙汰須、其旨寺家所進去四月廿日乃留守所下文仁見多利、件本庄波田數廿五町八段百八十步也、黑田安倍田大屋戶此三ケ村仁有利、全不令停廢、又新庄止申波本自爲國領豆辨濟官物志、所勤來國事也、自承安四年之頃所號新庄也、非舊庄號須、至于出作者、官物段別三斗於辨國衙豆、雜事波所叶寺家也、以件地利便補大寺御封志豆、以其殘波所辨公方濟物也、而前々司信廣乃任仁別結解仁申請云々、奉免寺家之條、彼任中仁不承及須、次乃守信平乃任仁、有前司廳宣之由始豆所承也、仍彼信平朝臣經奏聞、可停止彼妨之由、被申成院廳御下文畢多利、任其狀豆當任國司申請官府豆可被停廢也、承安四年仁被成院廳御下文奉免之由、全不承及候須、被付國豆候波牟於波、盖存候哉、此沙汰之時仁古有始天出來候倍、就中不被注田數、不被定四至牒（等カ）示、暗掠領數百町田畠畢多利、仍御奉免之由在廳等不令存候止申、

大法師參曉　東大寺前司

問參曉云、以汝之解狀問在廳之所、辨申旨如此、子細辨申如何、參曉申云、本庄不停廢之由辨申之條、以外乃僞言也、改定庄官志豆補任他人志、入收納使豆徵取官物幷引出物、以廳小目代豆使止志豆不入寺家使須、過之多留停廢波何樣可惟（爲）哉、新庄出作等同前仁候、又國司廳宣幷御下文於不觸留守所留事、本自爲寺領豆更無相違、其所當段別二斗也、立用當寺御封之外、以所殘之少分豆辨來國司留、而其少分所當依有事之煩豆、信廣之任仁成奉免之廳宣天令施入畢多利、任其狀別當法印顯惠經院奏豆、宛百學生料、被申下文御下文畢多利、依無新立之儀豆不觸留守所須、又信平任仁被停廢之由在宣申須諸無實也、寺家更不承及、又承安二年廳宣、同四年廳御下文仁不載田數之事波、本自寺領顯然之故也、寄事於左右押（押カ）取數百町田地之由、國司申之條甚矯餝也名張一郡往古寺領二百八十九町二段百三十步、（薦生出作外、）代々立券檢注國衙注文等顯然也、件等證文十通進之、其內去天治二年國檢田目錄、（在國司判、）件狀仁寺領田數已以顯然也、而捍（押カ）籠數百町之由爲令經院奏仁、注加無實田數之條尤不當也、又以阿拜郡寺領田申如新庄內之條甚不當也、即是天平勅施入以後無相違之寺領也、令非名張郡內須此沙汰之時、不可出來事也、爲加增田數所混申也、今在廳加申候簗瀨村田畠波、彼二百八十九町加內也、今如在廳所進之安元廳御下文者顯惠法印乃申下出作田數之外有出作歟、若然者可停廢之田顯然也、然者彼外無其出作、已不可寺領停廢之由乃證據候、又本庄乃三ケ村名字前後相違不足言事也、前陳狀仁波玉瀧板蠅黑田止注申、何以阿拜郡玉瀧可書加名張郡本免廿五町內哉、隨又今度陳狀仁波黑田安倍田大屋戶村止申、變々之條似不知子細止申、

兼信申云、如先條幷（辨カ）申久寺家所進之留守所符云、黑田田庄外云々、以之思之本庄不停廢之由已以顯然也、本庄作人兼作出作之間、依催其所當豆如此訴申歟、又注加他郡田事波、惣自寺家依成妨所注申候也、又以安元廳御下文仁不載田數之事波、本自寺領顯然之故也、寄事於左右押取數百町田地之由、國司申之條甚矯餝也名張一郡往古寺領二百八十九町二段百三十步、（薦生出作外、）代々立券檢注國衙注文等顯然也、件等證文十通進之、其內去天治二年國檢田目錄、（在國司判、）件狀仁寺領田數已以顯然也、而捍（押カ）籠數百町之由爲令經院奏仁、注加無實田數之條尤不當也、又以阿拜郡寺領田申如新庄內之條甚不當也、即是天平勅施入以後無相違之寺領也、令非名張郡內須此沙汰之時、不可出來事也、爲加增田數所混申也、今在廳加申候簗瀨村田畠波、彼二百八十九町加內也、今如在廳所進之安元廳御下文者顯惠法印乃申下出作田數之外有出作歟、若然者可停廢之田顯然也、然者彼外無其出作、已不可寺領停廢之由乃證據候、又本庄乃三ケ村名字前後相違不足言事也、前陳狀仁波玉瀧板蠅黑田止注申、何以阿拜郡玉瀧可書加名張郡本免廿五町內哉、隨又今度陳狀仁波黑田安倍田大屋戶村止申、變々之條似不知子細止申、

兼信申云、如先條幷（辨カ）申久寺家所進之留守所符云、黑田田庄外云々、以之思之本庄不停廢之由已以顯然也、本庄作人兼作出作之間、依催其所當豆如此訴申歟、又注加他郡田事波、惣自寺家依成妨所注申候也、又以安元廳御下文仁不載田數之事波、本自寺領顯然之故也、寄事於左右押（押カ）取數百町田地之由、國司申之條甚矯餝也名張一郡往古寺領二百八十九町二段百三十步、（薦生出作外、）代々立券檢注國衙注文等顯然也、件等證文十通進之、其內去天治二年國檢田目錄、（在國司判、）件狀仁寺領田數已以顯然也、而捍（押カ）籠數百町之由爲令經院奏仁、注加無實田數之條尤不當也、又以阿拜郡寺領田申如新庄內之條甚不當也、即是天平勅施入以後無相違之寺領也、令非名張郡內須此沙汰之時、不可出來事也、爲加增田數所混申也、今在廳加申候簗瀨村田畠波、彼二百八十九町加內也、今如在廳所進之安元廳御下文者顯惠法印乃申下出作田數之外有出作歟、若然者可停廢之田顯然也、然者彼外無其出作、已不可寺領停廢之由乃證據候、又本庄乃三ケ村名字前後相違不足言事也、前陳狀仁波玉瀧板蠅黑田止注申、何以阿拜郡玉瀧可書加名張郡本免廿五町內哉、隨又今度陳狀仁波黑田安倍田大屋戶村止申、變々之條似不知子細止申、

兼信申云、如先條幷（辨カ）申久寺家所進之留守所符云、黑田田庄外云々、以之思之本庄不停廢之由已以顯然也、本庄作人兼作出作之間、依催其所當豆如此訴申歟、又注加他郡田事波、惣自寺家依成妨所注申候也、又以安元廳御下文仁不載田數之事波、本自寺領顯然之故也、寄事於左右押（押カ）取數百町田地之由、國司申之條甚矯餝也名張一郡往古寺領二百八十九町二段百三十步、（薦生出作外、）代々立券檢注國衙注文等顯然也、件等證文十通進之、其內去天治二年國檢田目錄、（在國司判、）件狀仁寺領田數已以顯然也、而捍（押カ）籠數百町之由爲令經院奏仁、注加無實田數之條尤不當也、又以阿拜郡寺領田申如新庄內之條甚不當也、即是天平勅施入以後無相違之寺領也、令非名張郡內須此沙汰之時、不可出來事也、爲加增田數所混申也、今在廳加申候簗瀨村田畠波、彼二百八十九町加內也、今如在廳所進之安元廳御下文者顯惠法印乃申下出作田數之外有出作歟、若然者可停廢之田顯然也、然

者彼外無其出作、已不可寺領停廢之由乃證據候、又本庄乃三ケ村名字前後相違不足言事也、前陳狀仁波玉瀧板蠅黑田止注申、何以阿拜郡玉瀧可書加名張郡本免廿五町內哉、隨又今度陳狀仁波黑田安倍田大屋戶村止申、變々之條似不知子細止申、

兼信申云、如先條幷（辨カ）申久寺家所進之留守所符云、黑田田庄外云々、以之思之本庄不停廢之由已以顯然也、本庄作人兼作出作之間、依催其所當豆如此訴申歟、又注加他郡田事波、惣自寺家依成妨所注申候也、又以安元廳御下文仁不載田數之事波、本自寺領顯然之故也、寄事於左右押（押カ）取數百町田地之由、國司申之條甚矯餝也名張一郡往古寺領二百八十九町二段百三十步、（薦生出作外、）代々立券檢注國衙注文等顯然也、件等證文十通進之、其內去天治二年國檢田目錄、（在國司判、）件狀仁寺領田數已以顯然也、而捍（押カ）籠數百町之由爲令經院奏仁、注加無實田數之條尤不當也、又以阿拜郡寺領田申如新庄內之條甚不當也、即是天平勅施入以後無相違之寺領也、令非名張郡內須此沙汰之時、不可出來事也、爲加增田數所混申也、今在廳加申候簗瀨村田畠波、彼二百八十九町加內也、今如在廳所進之安元廳御下文者顯惠法印乃申下出作田數之外有出作歟、若然者可停廢之田顯然也、然

七日成官符且勅施入內也、何始天致其妨之由可申哉、又去保安四年明法勘狀仁、天平以後爲往古寺領之見由其狀多利、隨又應和天德仁免除正稅且、爲一色不輸之寺領利、而依致寺家妨且、注加之由今在廳申條甚不當也次第證文顯然也、三ヶ村名字前後相違之條波、爲申煩寺領仁如此所混申也、又簗瀨村波黑田庄往古出作內也、天治二年國檢田目錄、嘉承元年官廳下文、天承二年乃宣旨、長承元年國司廳宣、同年官使勘狀、承曆二年廳宣、承安二年廳宣等、皆以顯然也、而承安元年國衙仁雖申下宣旨、同二年永可奉免大佛舍那之由被成廳宣畢、隨且承安四年廳御下文、內と志且以奉免之官物且、學生料幷三十講供料仁所宛用也、輒破廳御下文且停廢之條甚不當也と申、兼信申云、玉瀧事波寺家仁申天平勅施入仁毛地二町墾田七町一段也、其後寄事於彼施入內、掠取百餘町地之條甚以不當奈利、應和天德乃宣旨仁波、田畠事於不被載、只林木乃沙汰許也、其後代々國司皆以玉瀧田地爲　云領、所令徵納所當也、凡波伊賀國四郡也、其內於名張一郡者、已掠領畢多利、又至阿拜半郡、同以掠領所殘二郡、或大神宮御領、或諸院宮及殿下御領也、然間國司進止乃國領地如無段歩、爲在廳之輩無可致沙汰之地、當國之有無只可依御定、且子細國

司所進之兩度陳狀幷折紙等仁見給且候、所詮遣御使被披檢寺家訴申田地仁、國司披陳無其隱候歟と申、參曉申云、玉瀧事天平廿年被下寺領官符之後、彼施入帳之外、同年十一月日、天平勝寶元年十一月廿一日同三年四月十一日、天平寶字二年十一月廿一日、此年々次第仁買入田地之後、天平神護二年、國郡勘定仁爲寺領之由注申、其後阿拜郡乃地主注領地且又以施入、天德三年仁地主元眞又以施入、如此買集多留地於以且、天德應和仁可免正稅之由被成國判畢多利、仍爲一色不輸之寺領于今無牢籠、件等證文進覽之、委細證文之次第見保安四年法家勘狀多利、是即勅施入之本庄也、此外鞆田村爲玉瀧庄內且勤仕寺役、其後保安四年停廢鞆田、彼法家勘狀仁即件村沙汰寺家道理之由顯然也、且依爲權門牙今被停廢畢多利、仍爲一色不輸之寺領、于今無牢籠、件等證文進覽之、委細證之

工名田之上乃官物許於被免之上仁、承安二年仁被成國司廳宣畢、然者國衙仁波何不存知候哉、彼二百八十九町餘内、御封負田百十町、幷當荒川成神社佛寺庄官給免、村々井料運賃等於除定、學生供米寺納定僅二百石許歟、爲國非支須爲寺至要也、忝承安四年給廳御下文畢多利、大佛炎上之折節不奏事由、强企停廢之條、付貞顯天其恐候歟、就中以阿拜郡往古寺領、今承安新立仁中カ加之條謀計之甚也、又件玉瀧内保湯船眞木山等波、天平勅施入内也、宮符宣旨、代々國判等、旁以顯然也國司所進之證文中仁、天平宮符相副多利、自乍捧勅入之官符、申加承安新立之條、是非理致之所及、不似官長者申狀事歟、言語道斷之事也、凡承安四年廳御下文之外仁無掠段歩公田志、寺家申二百八十九町波、皆以帶證文須、國司の申五百町波虛證也、本願施入一萬町水田、昔波皆云田也、勅免以後四百餘歲、未被下改易之宣旨、縱雖承安新立、豈忽有改易哉、續日本紀第十云、天平元年十一月癸巳、太政官奏寺家神家地者、不須改易勅許者、往古寺領雜免之上仁、被寄少分官物畢多利、今停止國司之濫訴志旦、任承安御下文天、重欲蒙廳裁止申、

覆問在廳兼信云、黑田本庄不停廢之由雖陳申、如寺家

申狀者已差田證人畢、又至于出作新庄者、院廳御下文幷國司廳宣不觸留守所、不取施行符之間、不承及之由雖辨申、如在廳者進安元々年前司信平申請廳御下文狀者、件出作顯惠法印爲別當之時、被成廳御下文畢、件下文田數之外、尙自寺家致其妨歟、若然者宜令停止旨而去年九月申請條事官符之時、雜掌解狀云、前司信廣之任更摺取國判云々、其外有院廳御下文之由不書載之寺家設雖不觸留守所、在廳定存知歟、令辨申旨前後相違歟、件子細依實辨申如何、

兼信申云、本庄不停廢之由先條申候畢、且寺家所進之留守所下文仁、不停廢之由顯然也、又承安四年廳御下文事波、被成下之由於波雖承及候毛、依不見其狀旦、不知之由於波申候歟、條事官符毛被下候畢幾、又安元廳御下文狀事、子細先條申候畢、所詮波承安二年仁寺家偸語取國司信廣廳宣旦、不載田數志旦、爲掠領一郡仁申下廳御下文畢、因之國司信平以後依無可國領之地旦、拜任之後朝仁各申辭退當任仁毛、如此之掠領於不被止候者、徒雖有國郡之名毛、專可煩封家納官之濟物、裁許只可有御定と申、

申

伊賀國在廳源兼信

同盛長
惟宗後守

東大寺所司
勾當大法師參曉

問注

公文左衛門番長笠俊兼
主典代散位中原朝臣盛職
散位中原朝臣職國
西市正中原朝臣政泰
散位中原朝臣景宗

○養和元年　院宣

東大寺申黑田庄出作幷新庄所當寺國衙申旨遙分裁許遲引之間、寺家封戸百學生供料參期欲過、任先度廳御下文、且可令仰沙汰寺、依　院宣上啓如件、

養和元年十月二日　　左衛門權佐光長奉

謹上　東大寺別當僧正御房　鎭喜

○養和元年院廳御下文

東大寺

注進黑田庄出作新庄田數四至事、

合田數貳佰捌拾玖町貳段佰參拾歩之内、

矢河條五十六町七段二百五十歩、

出作三十八町七段六十歩、

新庄十八町百九十歩、

中村條百十七町九段二百卅歩、

出作九十六町九段五十歩、

新庄廿一町百八十歩、

夏見條四十町四段六十歩、

出作三十三町二段二百四十歩、

新庄七町一段百八十歩、

佐久田條十三町五段六十歩、出作亡、

簗瀨條六十町五段三百歩、出作亡、

已上五ヶ村四至、付券契注之、

東限寺領杣山并鳥居小野、

南限鹿高明神、

西限木庄、

北限剝山、

右承安四年賜　院廳御下文之内、往古寺領出作田數四至如此、重爲被載　廳御下文注進如件、

養和元年八月日　　權都維那法師嚴信
都維那法師覺永
權寺主大法師定元
寺主大法師遷寬

權上座大法師永俊
上座威儀師大法師玄嚴

○壽永二年武家下文
下伊賀國御家人等、在御判
可令早停止旁窄籠無相違安堵事、
平保行
右件輩殊依有忠令當家事、於今者停止旁窄籠、各所領無相違早可令安堵也、兼又同心之輩同可存此旨也、但爲見參於今參事者、遼遠往反之間、爰可有其煩者歟、仍此節御曹司令入給者、各可奉付之狀所仰如件、敢不可遺失、以下、
壽永二年十月十一日

○承久三年武家教書
伊賀國御家人服部馬允康兼訴申事候、親父康行入道當國御家人中衆度々入見參候て所知不可有相違之由、矯形殿御下文已三代無窄籠候處、近年濫妨輩出來由啓申候、令尋問子細給、任有理可不御成敗候、恐々、
八月十八日　左大史小槻宿禰判こゝにあり
相模守殿　在御判
左大史小槻宿禰在判

○正治元年長者宣
當寺領黑田庄訴事龍穴寺取司陳狀（所カ）副本解、遣也、子細見狀、任先例不可及新儀候也者、
殿下御氣色、仍執達如件、
正治九月十六日　左大辨宗□□□際
東大寺別當法印御房

○同
龍穴寺所司重解狀如此、遣使實檢其地糺定其堺、爲兩方可宜歟、於今者可令存其旨給候、依
殿下御氣色、執達如件、
十一月廿三日　左大辨（花押）
東大寺別當法印御房

○建仁元年公驗
伊賀國在廳官人等誠惶誠恐謹言、
請殊蒙　天恩停止東大寺有限用途外新立押領庄々、
興福寺三面僧房造營間、可付國衙由被下
宣旨子細狀、
一新立庄田二百八十三町七段六十步、
御封幷百學生供田二百一町八段十步、名張郡內治承年中被庄號之、
黑田出作百七十五町六段三百步、分米五百廿七石五升、
三谷開三町小、分米九石一斗、

舘分田三町四段、分米廿石四斗、
公田廿八町七段、分米百四十三石、
已上六百九十九石五斗五升也、而彼寺所募御封米三百三十石、百學生供米三百六十石也、仍以四ヶ所爲寺領、可宛件用途也、但於百學生供者雖新儀、彼寺已以此爲百人之依怙、被顚倒之條非無其痛、此外於押領若干公領者尤無其謂、早可國領之由欲被　宣下矣、
念佛堂庄八十一町九段、山田郡內、
阿波保廿七町小、同新別府三町二段、同召次名三町三段、廣瀨村十八町、淨土寺三町、有九名廿七町三段大、
已上建久之比被庄之間、國杣併被押籠畢、然者國內無杣者、爭可遂造營哉、仍造營之間、可國領之由、同欲被　宣下矣、
一押領田二百七十六町九段六十步、
北杣百一町半、
鞆田村百四町一段六十步、文治以後押領之、
簗瀨保七十一町七段半、治承以後押領之、
已上三ヶ所二百七十六町九段六十步、決定可國領之由可被　宣下也、隨爲造營杣殊至要也、

右謹檢案內、當國前司皇太后宮大夫任中、神戶三ヶ鄕數百町之公田、自大神宮被押領之時、注子細經　奏聞之剋被下　宣旨宛神用米員數、定彼料田百五十町被立御厨畢、所殘田數皆以被國領于今無相違、然者任此例除彼寺用米分田之外、押領公田等、可國領之由、欲被　宣下矣、仍勒子細言上如件、
建仁元年三月日　從五位下行藤原朝臣正兼
從五位下行維宗朝臣俊盛
從五位下行大江朝臣忠國
從五位下行源朝臣兼信

○元久二年寄附狀
奉寄進　八幡宮、
黑田本庄幷出作等內右馬允平康兼所領田畠等事、
右康兼假國威以押妨寺領、劵（募カ）武藝以違背衆徒、濫吹之至可謂一寺之大怨敵、仍始自其身至于緣坐境界削路、於庄內永以追却、至々其所領空不可辨置之、又徒不可爲人物、依之沒官件等領、奉寄進于八幡宮畢、田數坪付等見于沒官注文、於件領以康兼私得分、新業生供大般若三ヶ日之內可令勤仕、結日饗膳之役、限永代不可失墜之、若背此旨有致妨之輩者、必可令罷蒙神罰於其身仍僧綱以下各連署、籠置神殿之狀如件、

元久二年七月　　法師惠玄(花押)

以下數百人略之

○東大寺年預下文

下　黑田庄住人重利入道所、

可早押大原中子領字鹿臥田一段事、

右件子細者、重利法師可相傳矢川條田畠參段證文、故永慶盜取慶文大之許差置土擧質物流畢云々、即致沙汰之處永慶死去、雖然私領田畠空非可失之由訴申之間、兩方遂一決畢、然而重利法師申狀尤有其謂、早偷取所置質物田畠三段代、於可致辨永慶子息等若不致其沙汰者、永慶子息中子等所令知行鹿臥田、押可令致沙汰之狀如件、

貞應三年四月日

預所大法師

○同進文

伊賀國住人服部馬允康兼(右脫カ)者、今度騷動之時節、隨京都使僧關東御勢引籠山上之非無思食、早於當知行之所者、此本可令安堵之狀、依仰下知如件、

承久三年八月十九日

按、以上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百九　終

三國地志卷之百十

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○嘉祿元年六波羅教書

當國名張郡殺害人并人勾引等事、以交名之注文於□東大寺領沙汰人搦出之時、於堺外上候□、且任道□□專沙汰、且可令注申細之狀如件、

嘉祿元年五月三日　　相模守 在御判

伊賀國守護代

○寛元三年黑田莊百姓愁狀

東大寺御領內黑田出作新庄築瀨三ヶ庄陳申、

可被除伊勢造宮役夫工作料米、譴責子細愁狀、

副進　後白河院御免除案文一通、

右件御免除　宣旨之狀、雖被籠置當寺寶藏者、建永嘉祿兩度、彼作料譴責使入部之剋、時別當　宮僧正御房無御沙汰、其上庄々不知子細之間、被責理不盡畢、縱忘綸言之旨企新儀、猥以先年雖被致二ヶ度之責、被宣旨之狀之曰者、何可有理不盡責哉、剩御寺之訴訟猛惡之重訴申上之條無其謂、背　後白河仰、今企新儀之沙汰者還猛惡歟、早任先年綸言之狀、爲當寺御沙汰、可被停止彼作料米責、若及干遲々無沙汰者、任國々庄々之例、可令立用正稅官物者哉、仍子細披陳以解、

寛元三年十二月三日　　黑田御庄百姓等上

○權大僧都定親寄文

寄進

東大寺御領伊賀國名張郡新庄水田神社佛寺料田事、

一八幡宮

參段半、

在矢河條、作人行元、

一大佛六月御佛聖會如料田、

五段內

中村條

一處參段、限東宗貞領、限西大道、限南定文房領、限北利宗領、

四至、限東出作領、限西定文房領、限南點上領、助公領、限北繩手、

一處壹段、限東田作領、限西大溝、限南大道、限北類地、

此田者法眼聖玄之傳領也、而故南無阿彌陀佛堂源上人

一處壹段、限東岸、限西土佐公領、

被始置例時曰(日カ)、依會如以此地利參斛六斗、庄斗定、相宛例

一處壹段、限南定文房領、限北岩井女房領、

時供料、每日之役令勤仕、施入之志者尊勝院大法印辨

抑大佛寄進五段之領者、法眼聖玄私領也、而兼乘播摩

曉、于(子カ)法橋慶尊慈母、乳母少納言局(院女房)平廣實、覺阿

法橋、當寺爲執行之時、夢見樣者着黑染衣袈沙僧入來

天申樣者、大佛御佛聖六月之分令會如之條、何樣事哉之由令申、執行答云、御佛聖者大和國三十六町負田也、而號興福寺寺僧領、不令備進之條、力不及之由令申答處、重云、聖玄法眼者可令重沙汰也、觸聖玄也云々、此條法眼に可申歟之由、或人々申合之處、爭不申哉と申越天來臨事侍之由就令申、年來心中令存事は、當寺には大小庄々多々也、西六月御佛聖令會如之條不可說也思給、大佛者被知食天、此御夢告は侍れば、寄文並券契、當司其許へ遣畢、而六月之御佛聖會如事、他寺戶々有其沙汰の由承天、堂司之許へ相尋之處、此返事を諸衆可有御覽也、

一　二月堂

六段、

二七ヶ夜行法續松十二百把料田也、

一　淨土堂

六段者、

四至、限東出作領、限西大溝、限南點上領、助公領、限北繩手、

此田者法眼聖玄之傳領也、而故南無阿彌陀佛堂源上人

被始置例時曰(日カ)、依會如以此地利參斛六斗、庄斗定、相宛例

時供料(子カ)、每日之役令勤仕、施入之志者尊勝院大法印辨

曉、于法橋慶尊慈母、乳母少納言局(院女房)平廣實、覺阿

彌陀佛、保阿彌陀佛、僧永仁、讃岐局、貴賤靈等、法界群生爲平等利益、又聖玄早世之後、月忌遠忌、阿彌陀經可令讀經也、此水田者須雖相副券契、依有類地不能副渡、凡當庄者預所地主相傳所進退也、放院家之公事、除學生供之屓田、爲一色不輸之領、限未來際寄進此御佛界、末代亂此置手、令押領之輩出來者、寺家之衆徒訴申天、爲寺懷(擯カ)屓出可被行罪科也、仍此寄文者可被納年預之櫃也、其故は聖玄存生之時、有不堂(マヽ)現之輩儀(マヽ)侄不孝聖玄之門跡に天永以不可有者也、仍爲後證驗讓狀以申而已、

寶治三年三月日　　法眼和尙位(花押)

○僧宗圓私領寄進文

奉寄進　大佛殿修正壇供並燈油料田事、

合參段小者、

貳段壇供料所當壹石伍斗、一石一斗檀供米料、四斗學生供料、

壹段燈油料當七斗伍升、五斗五升燈油料、二斗學生供料、

已上納斗九合五勺、

在伊賀國名張郡黑田庄中條村出作內、字葛原水口、

四至、在本券面、越定延宮名、

右件水田者僧宗圓之相傳之私領也、而爲後生菩提、相副本券限永代、大佛殿正月修正第三日壇供料、並燈油料所奉寄進也、後代全不可有違亂者也、但宗圓一期後也但大佛殿堂童子六人之內申付畢、仍寄進狀如件、

弘長三年十一月日　　僧　宗圓(花押)

子息長壽(花押)

但於入減年者、猶彼所當可進退之狀、重所記也、□

○沙彌西佛私領券文

謹　沽却渡進畠地新券文事、

合大者、但三間屋一宇有之、

在伊賀國名張郡簗瀨御領內原光明寺北、

四至、限東岸根、限南類地言二區領、限西大道、限北類地光明寺領、

右件畠地者沙彌西佛之相傳之私領也、爲春竹御前屓物米參斛代、限永代渡進處實正也、雖可本券等相副燒失了、但沙汰人之佚失申請立之、向後更不可有他妨、仍爲後代龜鏡放券文之狀如件、

正應五年三月日　　沙彌西佛(花押)

字彌太兵衛(花押)

○六ヶ山安倍家景言上狀

伊賀國六ヶ山下三鄕地頭俣野八郎入道舜一代

子息中務丞安倍家景謹言上、

同國名張郡內簗瀨鄕住人右馬允、不知實名、並覺榮、覺賢、蓮信以下輩、率多勢、於當山內奈垣比奈知兩鄕、或濫妨山畠、則苅取作毛、或伐取山木、剩致打擲刄傷上者、

早被觸申本所、南都東南院、召上狼藉張行交名人等　欲被行輩於罪科事、

副進

一通、　惡行人等交名注文、

件條彼右馬允以下輩、漸々以數多人勢、伐取奈垣比奈知兩鄕山木之條、無其謂之間、雖須加制止、自然令延引之處、彼輩今月十四日引率數多人勢、於當山或濫妨山畠、則苅取作毛、或伐取山木之間、爲相尋子細、差遣領內住人新三郎並小法師丸之處、惡行人等無是非令打擲刄傷彼等之條、希代珍事絕常篇所行也、既及死悶之間、守護方加檢見訖、無比類惡行也、然者則早急速召上交名人等、一々爲被行罪科、粗言上如件、

正安元年九月日

○大江清光私領券文

沽却　田地新券文事、

合貳段者、字古節河原、溝副在之、

四至、限東類地、限南宗善房領、限西法花堂領、限北敎定房領、

在伊賀國名張郡黑田本庄領之內、

右田地者、大江清光相傳之私領也、而依有要用、限十八石、小十合升定、永代奉沽却了道戒殿畢、但於本券文者、依爲連券、不能制進、仍敗面訖、若違亂出來之時者、必可返進本直米之狀如件、

正安三年十月廿二日　　大江清光(花押)

嬌女(花押)

次女(花押)

○黑田莊作主職請文

請申伊賀國黑田本庄領主二段作主職事、

右所當米每年三石二斗小拾合升定、可進辨也、若致懈怠之時者、作主職を可被宛(イ)于別人候(イ)更不可申子細之狀如件、

正安三年十月廿二日　　大江清光(花押)

○服部保忠申狀

伊賀國御家人服部彌平次保忠子息遠保申也、右大將家御下文等事訴狀副具書、如此、早可參決之上者、可相觸平氏女之狀如件、

正安四年四月五日

○黑田莊百姓言上狀

黑田庄出作百姓等謹言上、

欲蒙早任道理御成敗、段別餞間事、

右御下知之旨拜見仕候了、號段別米於寺僧等所領寄事於檢注、宛行其役之條、何樣事哉不得其意、蒙御下知候之條、難堪之次第也、今度之段別餞登申候者、御代二ヶ

度之御檢注於訴申候之所、御寺大進得業御房仁有御同心、百姓等之所申無其謂之由、及惣寺之御評定、被差下數十人御使之間、土民等失爲方、不念耕作之業、可交山林之由、三庄一同仁令進書起請文之日、御寺務被（等カ）驚思食者、不便之御計惣寺御披露之時、御寺裳此寺有寬宥之御沙汰、被止檢注之節、然間三庄一同仁再念耕作之業、是則之悦也、就之聊御悦令申之事候、又爲訴訟成就、諸社仁捴（マヽ）々立願申、依願力仁之訴訟成就仕、爭不令果立願之哉、如斯等之用送不懸堪籾等之負田者以何物之可致其管候哉、被送御檢注日者、不撰寺僧之御領、皆土別堪籾等之有御沙汰、於伏田者一段別一石之堪耕定法也、雖然百姓等依訴申、被止御檢注、公私悦候哉、奚立願等之用途仁、伏田一段別懸二百文之用途、致其沙汰候、二百文之用途者、纔米當一斗二升、出旺弱之用途、止非例之檢注、不限百姓等之悦畢奴、寺僧之是非御悦候哉、理運限候、依少分之用途、及御沙汰之條、不便之次第也、或寺僧御方者、餞於下賜下作人、或寺僧之御方者、於南郡有其御沙汰、多分無別煩御沙汰候之所、今度之御下知、百姓等驚存、沙以（汰脫カ）押人之事多少雖歎申候、爭可不令參上候哉、寺僧御私領之事、誠御沙汰候者、百姓等安堵難仕候、以此旨能々可有哀憐御披露候哉、恐惶謹言、

嘉元二年六月十六日　　出作百姓等狀

謹上　年預所殿御宿前

○延慶四年預五師下文

年預所下　黑田庄三職庄官等所、

可早任度々下知、庄官武貞脇百姓等、有限寺務初任進物段別七十文用途、以新儀可致半分沙汰旨申子細條、太以無其謂上者、任先例今月中悉致謹責間事、

右件初任進物者、段別七十文致其沙汰者先例也、而半分三十五文致沙汰者爲先例之由、捧自由請文、致無理對捍之間、所詮且於傍例歟、不然者任先例可致沙汰旨度々雖下知、付是非不致元明之條、太以不可然之上者速三職等此使者相共致散々譴責、今月中悉可沙汰也、此上猶有申子細之輩者、企參上可明申之旨、可相觸之狀、依衆議下知如件、

延慶四年二月廿二日

五師大法師

○應長元年預五師下文

年預所下　黑田庄三職等所、

早任下知可致沙汰事、

右子細者、一井村之內上野屋敷墓塚事、双可被尋子細新五六太夫並簗瀨檢校覩意、三ケ日之中可令上洛旨可相觸、若申子細者、可有發密之沙汰、亡（定カ）有後悔人者也、依衆儀下知如件、

應長元年十二月十六日

五師

○同二年衆徒申文

東大寺衆徒等重申、

欲早任度々　院宣幷數ケ度御教書、被經嚴密御沙汰可被召出寺領伊賀國黑田庄惡黨越後房覩俊、（今者死去、）同舍弟伊賀房覺舜、太郎左衛門入道道願以下輩旨就訴申、爲被經御沙汰、擬召渡院宣以下正文於當奉行處於本奉行伊地知右近將監長清許、令紛失由出書狀間、所備進案文也、此上者早被召彼出交名輩等、被處遠流天明重科子細事、

副進

一卷　院宣幷西園寺殿御施行七ケ度御教書等案、

一通　惡黨人等交名注文、

一通　本奉行伊地知右近將監長清書狀案、

右件惡黨等、於一國之寺領本所、敵對以下之惡行无比類之間、就訴申重々被經御沙汰之次第、具見于備進之具書、而彼交名人等、不憚　院宣不恐武威、猶忽緒寺命、不隨所勘之間、寺訴彌雖增色、近年寺門窄籠依連々相續、自然送居諸之處、濫吹惡行隨日而興盛、或稱寺門之下知、構謀書令惱亂土民、或堀累祖崇敬之墓、凡无惡不造之行儀、難記筆端者也、依之强盜山賊之名譽、國中諠訝之間、所蒙處々之訴訟也、然者早被經急速之御沙汰、被召出彼交名人等、被處遠流之重科、止庄家之窄籠、爲舍重色之寺役、粗勒子細、重言上如件、

應長二年三月日

○元亨四年六波羅教書

東大寺衆徒等申、伊賀國黑田庄惡黨覺舜、清高、道願、佛念等事、就請文重申狀具書如此、子細見狀、所詮柘植次郎左衛門尉相共重莅彼所、破却城槨、任法召進交名人等、載起請詞、可被注申子細、若有緩怠者、任闕東御事書、可有其沙汰也、仍執達如件、

元亨四年二月卅日　　左近將監在判

陸奥守在判

佐々木三郎左衛門尉殿

○同四年某範綱案

東大寺衆徒等申、伊賀國黑田庄惡黨覺舜、清高、道願、佛念等事、重御教書謹下給候也、任被仰下之旨、柘植

二郎左衛門尉相共莅彼所、破却城槨、可召進交名人等候之處、江州强盜幷海賊出入所々城槨等事、就關東御事書、依被下嚴密御敎書、致沙汰衆中候之間、黑田庄使節事、寺門雜掌頻難叅申候、近日更難遂其節候、難非自由緩怠候、其恐不少候、且使節歸參之後者、惡黨等令歸居于庄家、重構城槨致惡行狼藉之旨、載寺解候之上者、於他國遠所之御使沙汰者、不可有盡期候、所詮如今度御事書者、城槨以下惡黨退治事、其國之守護地頭御家人等、可被嚴密沙汰之條、明文分明候上者、他國使節之段旁以可蒙御免之旨相存候、可爲何樣候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元亨四年五月二日　　(佐々木)左衛門尉範綱　請文

○同某時信案

東大寺衆徒等申、伊賀國黑田庄惡黨覺舜、清高等事、就重御敎書、於官範綱請文謹進上之、子細載于狀候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

五月三日　　左衛門尉時信

進上

御奉行所

○平常茂請文

東大寺衆徒等申、伊賀國黑田庄惡黨覺舜、清高、道願以下候之旨、服部右衛門太郎入道相共催具近隣地頭御家人等、莅彼所尋搜交名人等在所、欲召捕之候所、悉令逐電候、至住宅者破却之仕候、於寺家雜掌者、沙汰居庄家候了、此條爲申候者、日本國中大小諸神御罰於可蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

嘉曆二年八月廿六日　　平常茂在裏判　請文

○嘉祿二年惡徒交名注進文

注進　扶持惡黨等緣者交名事、

孫五郎入道緣者、　兵衛太郎入道、兄　大谷、右那、
　兵衛門入道、舅
　左衛門六郎、弟　四原、
　兵衛四郎、甥　四原、

黑兵衛入道緣者、　龜若五良入道弟、
　左衛門入道良願、妹聟　薦生、山田、
　江三郎入道、相舅　大谷、
　二郎左衛門入道、夏見、
　兵衛尉、甥　薦生、山田、
　兵衛二郎、子息　夏見、
　瀧野七郎、烏帽子子、

清高入道緣者、　彦太郎、嫡子童名平一、越前國
　大野津牛原地頭家人、
　柘植次郎左衛門入道、烏帽子親、
　左衛門入道、相舅　下黑田、
　席市兵衛、甥惣追捕使、
　平太入道、相舅　簗瀨、
　五郎、聟　壇、

次郎太郎入道緣者、　乙王兵衛入道、舅　簗瀨、
　孫太郎入道、相舅　小屋戶、
　四郎、聟　小屋戶、
　孫次郎入道、甥　大六、
　左衛門次郎、子息、

宗覺圓春、星河

伊賀房朕者、　乙王兵衛入道、兄　簗瀨、
　彌六、甥　坂すそ、
　江三郎入道、弟　安部田、
　金王兵衛、甥　小屋戶、
　荒五郎、甥　小屋戶、
　彦次郎、甥　芳代、
　孫五郎入道、又いむま青蓮寺、

右旦注進如件、

嘉曆二年六月日

○嘉曆二年六波羅敎書

東大寺衆徒等申候、伊賀國黑田庄惡黨覺舜、清高、道願以下輩狼藉事、守護代相共催促國中地頭御家人等、莅彼所破却惡黨居所住宅等、將又城槨令現在者、同徹却之、沙汰居預所於庄家、於逐電輩者尋披在所、任法可召捕由事、去同九月十日御敎書謹下給候畢、

抑此條任被仰下之旨、守護代相共相催當國地頭御家人等、莅彼所所致其沙汰候之處、於惡黨居所住宅等者破却之、沙汰居預所於居家候畢、至城槨者不令現在候、於逐電輩者尋搜在所、欲召捕候之處不知行方、交名人內靑蓮寺孫五郎入道淨蓮者　死去候畢、緣者交名人等內服部刑部左衛門尉者在京之由申之、至自餘輩者不及請文散狀候、且相向地頭御家人等到注進之、此條爲申候者、日本國中大小諸神、殊八幡大菩薩御罰可蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

庄家、於逐電輩者、尋披在所、任法可被捕之、更不可有緩怠之儀、至不參輩者、爲處罪科、可付進署狀、且載起請之詞、可被申散狀也、仍執達如件、

嘉曆二年閏九月十日　　越後守　御判
　　武藏守　御判

服部右衛門太郎入道殿

○嘉曆二年使僧持法請文

東大寺衆徒等申、伊賀國黑田庄惡黨覺舜、清高、道願以下輩狼藉事、守護代相共催促國中地頭御家人等、莅彼所破却惡黨居所住宅等、將又城槨令現在者、同徹却之、沙汰居預所於庄家、於逐電輩者尋披在所、任法可召捕由事、去同九月十日御敎書謹下給候畢、

抑此條任被仰下之旨、守護代相共相催當國地頭御家人等、莅彼所所致其沙汰候之處、於惡黨居所住宅等者破却之、沙汰居預所於居家候畢、至城槨者不令現在候、於逐電輩者尋搜在所、欲召捕候之處不知行方、交名人內靑蓮寺孫五郎入道淨蓮者　死去候畢、緣者交名人等內服部刑部左衛門尉者在京之由申之、至自餘輩者不及請文散狀候、且相向地頭御家人等到注進之、此條爲申候者、日本國中大小諸神、殊八幡大菩薩御罰可蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

マ、
嘉歷貳年十月廿六日　　沙彌持法 請文

進上　御奉行所

○同書翰

黑田庄入部事、急速可被向候之處、今一方可奉相待南都御左右之由令申候之際、于今延引仕候、以此分申談候、一方無子細候者、急可入部仕候、恐々謹言、

十一月廿三日　　沙彌持法(花押)

マ、
○嘉歷二年衆議書

嘉歷二年十一月六日被東大寺滿寺衆議事書條々、

一寺領伊賀國黑田庄惡黨覺舜、淸高、道願、佛念以下、武家使者當國守護代常茂、幷服部右衛門太郎入道持法等引汲惡黨重々依有參差子細、惡行更不斷絕、庄家彌牢籠、因玆佛神事之要劇等一向打止候間、當年八幡宮轉害會、幷恒例受戒會以下、當寺無双之　勅願、忽以令退轉畢、此上者當年法花會以下、歲末年始御願等、悉令闕如之條、爲　朝爲寺不可不歎者哉、然者爲向後傍輩可行其咎之旨、欲被召仰武家矣、

一寺領伊賀國內保庄惡黨亂入神人刃傷事、

當庄者天平　勅施入之寺領也、而近江國池原杣內柑子村地頭代延命五郎、幷伊賀國河合庄住人淸見入道同五郎左衛門尉賴重已下交名人、率數百人之大勢、去二月十日無故打入當庄、追放土民、運取寺用之條狼藉超常篇之間、注交名就訴申、度々被成召符畢、然間土民等被還住耕作之處、去月四日又引率數百人之惡黨、重打入庄內、西收之土貢不殘一塵、悉運取柑子村河合庄等、擬搦取土民之間悉以逃失、爲問答子細、差下本社神人之處、無是非令刃傷畢、希代之惡行寺社之衰微何如之哉、凡彼惡黨如自稱者、不可隨東大寺之由、有武家之下知云々、無跡形虛誕歟、然者重科彌可令重疊者也、所詮彼兩庄惡黨已下與力輩等、任交名之旨、不日召出之、可加所當之嚴刑之由欲被召仰武家矣、

一美乃國茜部庄事

禪林永觀律師寺務之時、爲惠令相續、依經　奏聞、及再興之御沙汰、百學生供之料、寺門專一之資緣也爲地頭請所之地、濟年貢之處、年々歲々致未進不法之間、於武家多年雖經其沙汰、都無遵行之上者、嚴密可加下知之由、欲被仰武家矣、

一伊賀國友尾住人日野地左衛門次郎久行、今者出家同子息又二郎以下輩、號武家人亂入當寺領同國山田有丸庄打擲定廣春房已下神人事、

件久行法師已下輩、去元應元年五月十三日亂入當寺領伊賀國山田有丸庄、打擲定廣春房以下、八幡宮數輩神人、剝取黃衣之條、希代之狼藉、社家之鬱訴、何事可如之哉、然間就觸訴武家雖有召符之沙汰、依無嚴密之儀、都不及所當之刑罪、逕啻不恐以前之惡行、剩數度令亂入、每年押取寺用之條、寺家之愁訴無物取喩、所詮彼久行法師已下交名人召捕之、可處遠流不及之重科之由、欲被仰武家矣、

以前之條々寺訴如斯、依之恒例臨時之　勅願、悉及退轉之條、爲　朝家爲寺門、不可不歎、武家猶不致急速沙汰者、寺門可及大訴之條所存定也、仍爲披委細之旨趣、宿老輩企列參者也矣、

○黑田莊服部道一言上狀

伊賀國得技名一分地頭兼御家人服部孫五郎入道道一謹言上、

欲早被與奪當奉行人松田掃部允、被經御沙汰被處候沙汰罪科東大寺雜掌奸謀余以當役勤仕武家奉公道一書入　綸旨下本所進上違　勅人等迄注文、申成年來古敵服部右衛門太郎入道於御使、掠申候御教書擬損亡難遁其咎子細事、

副進

三通　御下文案、御家人所見正文者、惣領服平入道道正逢帶之、

一通　御教書案、御使敵對所見服部右衛門太郎入道母堂平氏與道一俗名遠保、敵對乎、

右道一曩祖保行保兼等、預壽永二年十一月十一日、承久三年八月十九日關東御下文以下之以來、至道一代々爲當役勤仕御家人之上、當國得枝名一分地頭武家奉公之條、都鄙無其隱之處、東大寺衆徒等、以爲一猥書入本所進上、綸旨、下違　勅人黑田庄覺俊淸高以下輩迄注文申成年來古敵服部右衛門太郎入道於御使爲松田掃部奉行掠申候御教書、擬令損已下知子細之道一之條、造立企以外奸曲也、御使服部右衛門太郎入道道一、母堂平氏者道一婦也、而彼氏女親父服部彌平次保忠他界之刻、抑留關東代々御下文以下重書等之間、左馬助殿御代去正安年中就訴申之、敵對分明也、就中東大寺雜掌沙汰者、申成數輩御使之由、年來雖承及之、道一全不入本交名而申改件右衛門太郎入道於御使三利始而書入追注文、以年來古敵宿意令同心雜掌掠入追注文三條希代奸曲也、就早被與奪松田掃部允、急速被經御沙汰道一之不入本交名之段、爲當役勤仕武家奉公身之不可被誤于　綸旨下違勅人等之篇□又云御使古敵子細被究淵底御沙汰、爲被處雜掌幷服部右衛門太郎入道於所當罪科、粗言上如件、

嘉曆三年正月日

按、已上東大寺寶庫に藏む、

三國地志卷之百十終

三國地志卷之百十一

伊州司城　藤堂元甫修

伊賀國　舊案

名張郡

○沙彌覺性言上狀

伊賀國名張郡庄官沙汰人使者沙彌覺性申詞條々、

一可被改易黒田簗瀬兩庄預所職事、

一去季分學生供以下神社佛事所當米、任員數可令究濟之、但此外寺僧私領田地々子米可蒙御免事、

一寺家御勘氣庄官人內、於盛俊明心禪道者、三庄沙汰人庄官等、可隨寺命之上者、不可有與同之儀事、

以前條々就三庄沙汰人等之一揆申狀言上如件、

元德元季十月廿四日　沙彌覺性（花押）

○黒田一族俣野中務大夫訴狀

郡內一族等謹重言上、

右子細者、就俣野中勢大夫訴訟事者、濫妨之輩理形仕候處、不辨謀實之是非、員外各別之等、於訴申武家、欲令損亡候云々、武家御沙汰早速被成候之間、近日使者入申候由其聞候、然間爲一門彌令馳走、東西增加敎訓候、不令退出候上者、郡內牢籠上可卒失墜可籠成之間無爲方候也餘々於件濫妨之輩等者、永放一門之號候畢、仍連署起請文進上之仕候、且本所一圓之御領內、武家之使者入申無先例事候上者、爭不可被助思食郡內之牢籠候哉、使者入申時者、被下御寺御使、於堺可被加御問答候、一族等之佗際、御領牢籠只此事候、於起請文者、同門他門、或他住或他行輩等者、今早加判形候、追可進上仕候、正而可有御披露候、恐惶謹言、

元德貳年閏六月日　一族等狀

進上　年預所殿　御宿所

○建武二年衆徒申文

東大寺衆徒等申、

欲早被召出當寺未寺伊賀國黃瀧山往僧聖觀阿闍梨、圓信慈觀以下寺僧、並寺領黒田庄土民金王兵衛尉盛信、前田入道、江三郎入道滿王三郎輩、敵對本所致違背狼籍條、其咎不憚上者、速召出交名人等、被處罪科子細事、

副進

一通、黃瀧山寺僧幷與力同心庄氏等交名注文、

右寺領伊賀國黒田庄者、本願皇帝勅施入之寺領、恒例臨時佛神事之料所也、而黃瀧山者、爲當庄之內間、往古之末寺無子細之地也、雖然殊爲當寺中門堂之繫屬、往年之舊好異他之處、近年忘其好、動致敵對之間、爲傍輩向後可被處罪科之由、依堂家之訴訟、去三月之比差下政所御下部、並寺家公人等之處、山僧並庄民等與力同心、不來立山內、自中途追返之、擬及打擲蹂躙之間、使等希有而逃上也、所行之企言語道斷之次第也、此時不被加懲肅者云末寺云庄園、共倒失之條、爲世爲寺、不可不歎者哉、然者早召出件交名輩、被處重科、欲被休本所之愁鬱矣、仍粗勒其由謹言如件、

建武二年五月

○有原守康申文

黒田庄住人星河九郎謹申、

欲早賜御寺御下知、備永代證券、是秋半名、是吉半名、久成半名間事、

右彼是一名半者賣得相傳畢、代々手繼證文等分明也、然上者賜御寺々御下知、彌全向後之知行、欲備未來之證券矣、仍言上如件、

建武二年十一月　日　有原守康（花押）

謹上年預所殿　御宿所

○曆應三年黒田莊惡黨交名注文

注進　黒田庄黨人交名事

四郎入道、天河住、　因幡五郎、四郎入道舍弟、同所住、

七郎、同幡五郎舍弟、同所住、　兵衛次郎入道、檀住、

金王兵衛入道、大屋戶住、　帥律師、金王兵衛入道舍弟、簗瀨住、

彌藤太、青蓮寺住、　孫三郎、同所住、

兵衛三郎、孫三郎子息、同所住、　淨覺、柏原住、

又次郎、夏見住、　右馬次郎、簗瀨一方公文、

帥坊、同所住、　八郎、帥律師舍弟、

孫五郎、同所住、　六郎入道、明現、惣庄萬追補使、

四郎入道、妙圓、同庄住、　兵衛尉、山田住、

九郎、山田兵衛尉舍弟、　八郎、孫五郎舍弟、

右注進如件、

曆應三年九月日

○延文元年武家敎書

東大寺申、伊賀國名張郡凶徒事、重申狀副具書、遣之、貞和退治也後、隨寺命之處、又如元及濫吹云々、早相催當國地頭御家人、嚴密可令退治之如件、

延文元年十月十九日　御判

仁木右京大夫殿

○應安二年某章貞案

名張郡事、南方奉公之間、不應寺命候き、然而中村某屬守護人致軍忠候上者、自今以後可隨寺命候、以此趣可有御披露于寺門候哉、恐々謹言、

應安二年二月十九日　　章貞（花押）

上笠間殿

○應永五年寺務領案

伊賀國黑田庄、爲累代寺務領、政所之知行地也、而先寺務時代、依寺役等難治、暫時去於寺家畢、仍爲惣寺計付給主長賢得業畢、雖然今月廿九日唱集會云、寺役等如舊可有沙汰、如元可返付寺務方由、滿寺披露處、不及衆中豫義、返進寺務畢、爰宿老分數輩令群參、蒙衆中評儀云、近日惣寺微力躰時分也、所詮以奧隆重儀於此黑田庄者、爲手搔會不足分要脚、自寺務可有一圓寄附之由申間、則令領狀畢、自今以後早可爲手搔會不足分料所、但於納所職者、永劄於長賢子孫、爲惣寺評議、於學侶分中、可定器用之納所也、仍手搔會寄附之狀如件、

應永五年戊七月四日

東大寺々務尊勝院僧正（花押）

○東大寺八幡宮領起請文

請申　東大寺八幡宮領伊賀國黑田庄年貢間事、

右今度自守護方被懸様々課役候間、地下難安堵候處、依寺門御計略、屬無爲候間、寺門御恩子々孫々不可忘申候、仍捧請文幷起請文申候上者、向後更不可申一粒未進候者也、

一於御年貢者、每年伍拾石分、十二月以前無懈怠可運上申候、

一元使給參石幷在庄雜用等、伍拾石外可沙汰申候、

一万一天下雖動亂、或水損旱風等損亡、或路次難候、請申分不可有末進候、

一餘方之御領年貢加增事候時、與此庄同可加增申候、

一若背請文面事候時、雖預如何様御沙汰候、更以不可異義申候、

一萬一地下百姓等逃散訴訟事雖在之、於御年貢者無末進懈怠、悉可進上申候、

右條々雖爲一事、於背此請文旨輩者、奉始梵天帝釋四大天王六十餘州大小神祇、殊伊勢天照大神八幡三所御部類屬、春日大明神並大佛三尊、二月堂觀自在菩薩等之御罰於面々各々子々孫々現當二世不可有冥加者也、仍起請文如件、

永享十一年七月廿二日

注住カ以下モ安部田村之分

藏地（花押）　河合（花押）

新　　兵衛三郎（花押）

左衛門次郎（花押）　三郎兵衛（花押）

參郎五郎　孫五郎（花押）

彦太郎　孫太郎

孫次郎　勘解由

兵衛三郎

注　坂下村之分

左衛門太郎　次郎左衛門（花押）

注　井手村之分

左衛門次郎（花押）　佐衛門太郎

又四郎

市松

注　寺垣內村之分

太郎四郎　次郎左衛門

五郎衛門　太郎左衛門

注　秀山村之分

太郎左衛門（花押）　蓮阿彌

臨阿彌

新四郎　孫太郎

左衛門太郎　五郎四郎

太郎三郎　五郎太郎

太郎左衛門　太郎三郎

太郎四郎　新次郎

太郎兵衛　新左衛門

松

注　下黑田村之分

沙彌良忍　太郎四郎

彦五郎　四郎左衛門

四郎兵衛

注　大家戶村之分

次郎左衛門

注　夏燒村之分

道妙　聲阿彌

五郎左衛門　五郎四郎

彦三郎

○箸尾春代丸申狀

名張郡事、以嚴重起請文請申候上者、御年貢等定不可有不法緩怠候歟、萬一無沙汰之儀候者、懸身之生涯所及湿分、可致忠節候、仍請申上之狀如件、

永享十二年十一月廿二日　　箸尾春代丸(花押)

○吐田遠厚申狀

如前文之、　今略

吐田修理亮遠厚(花押)

○飯高鬼若丸申狀

如前文

飯高鬼若丸(花押)
(虫喰)

○某實顯申狀

名張郡御請文事、今日廿二日於丈六寺致沙汰候間、越智同道仁罷出候、彼啫文國司御代官へ渡候、定而委細之儀國司可有御注進候哉、當陣之時宜依御左右可相振舞候之由得御意、可然之樣預御披露候者長入候、恐惶謹言、

十一月廿二日　　實顯(花押)

飯尾肥前守殿

飯尾大和守殿

○越知永遠申狀

名張郡衆於丈六寺悉致請起請候、自國司使節三人被罷出候、於正文者自國司可有進上候、筒井永遠檢見罷出候、如此致沙汰候上者、御年貢等事、定不可有不法緩怠候歟、萬一無沙汰之儀候者、不及被仰下、馳向可致澁分忠節候、仍請申上之狀如件、

永享十二年十一月廿二日　越智新左衛門尉永遠(花押)

○同申狀

今日廿二日名張衆、於丈六寺告文沙汰仕候、則見使罷出候後、告文國司御使へ被進之候、亘細定目國司可然御申候、仍當陣之事隨御左右、細々可被向之々由得御意預御披露歟所仰候、恐惶謹言、

十一月廿二日　　永遠(花押)

○飯尾大和守殿　進上

按、已上東大寺寶庫に藏む、

○下山宗一字欠舊案

前文略、布生井上長瀨之分、一所八斗代、作人五郎二郎、下略、以上物數合して百貳十ケ所、米成り七十六石八斗二升、麥大豆二拾八石三斗六合、公方米廿三石五斗、井公錢五貫六百文、上方公事錢は地頭方書物之內にて渡し申候也、

天正六年戊寅八月吉日　　下山甲斐守　在判

下山七郎殿參

按、右上比奈知村民家に藏む、

○慶長舊案

下比奈知　瀧原　奈垣　布生　多羅生　神樂

一此六ケ山萬立合山川何々不寄、長方之者之若衆者、六代目には長々成、三石にて昔よりの長者壹石壹斗

なり、

一宮大工の事、昔者中村の掃部樣、中頃十月の積米に下比奈知地下惣へ買申事、

一二再關に簗瀨ひらう宇夕殿へ米七石渡申事無紛候、

以上、

慶長十八年三月六日年預衆定

政所　吉住　藤屋右衛門　彌太郎太夫　今屋庄二郎太夫　五郎太夫　彌次郎太夫　左衛門太夫　六郎太夫　行屋與左衛門　善左衛門　神主太夫

按、右下比奈知村民家に藏む、

○永錄(祿カ)舊案

今度筒井六郎名張え忍入燒立申所、豫野治田五家之者聞合、其儘忠節致、其上にしろまき致、右之六郎打取申處實(イ)忠也、爲褒美と幕の文片羽、殊に名張を御ゆるし候所實(イ)見也、右五ケ之家從爲御禮、楠木重長之矢壹對千居□二人進候、末代迄一家之約束也、仍而仰狀如件、

永祿十一年二十八日　　豫野治田五家侍

瀧野十郎殿

按、右柏原區民家に藏む、

○織田信雄舊案

伊州南張郡安部田之鄉護念寺內を以、貳拾石井寺屋敷共に今扶助之訖、全可領知候也、

天正十年三月廿三日　　信雄　在判

芝浦觀音寺

○松藏九一郎舊案

一筆申入候、然者あへた村ごねんじおやこ新坊、此兩寺御立候付而、山藪屋敷其外諸くじめんきよたるべき事、相違之儀是有間敷事、

天正拾壹年八月五日　　松藏九一郎　在判

花嚴院　參

按、右阿部田村護念寺に藏む、

附　伊賀郡

○承平二年宣旨

右　史尾張宿禰言鑒仰云、右中辨藤原朝臣在衡傳宣、大納言兼右近衛大將藤原臣保忠宣奉　勅、撿非違使左衛門府生大原忠京、右衛門府生若江善邦等、宜差巡撿伊勢齋親王上道、大和伊賀兩國道橋使者、

承平二年四月十八日　　右衛門權府生村主保範奉

○長治二年官宣

神祇官

差進御體御卜使事、

坐伊勢國太神宮御領遠江本新神戶領、伊賀神戶領等、依遇穢神事崇給、遣使料上拔清奉仕事、
使中臣正六位上行權大和大中臣朝臣基行、
從參人卜部從五位下行少祐卜部宿禰兼良、
從伍人　神部二人　從各麥、
右依官宣今月廿二日御體御卜、依遇穢神事崇給、遣使科上秡爲令秡淸、差件等人充使可發遣之狀、所差進如件、以解、
長治二年十二月廿二日　正六位上行少史卜部宿禰
○嘉承二年官符
伊賀國
河口道行宮、堺屋、道橋、使々供給、擔夫八十人、
可造儲輿二基、白木輦、輿腰輿、
辨備物、
中取二前、水甕麻笥二口、瓫四口、盆二口、堝二口、
洗盤六口、杓二柄、韓櫃二口、
嘉承二年十一月廿八日
○左辨官下　伊賀、
中取二荷、水甕麻笥二口、瓫四口、盆三口、堝四口、
洗盤四口、已上水部所、杓二柄、洗盤二口、韓櫃二口、
已上殿部司所請、備カ
右伊勢齋王入京儲料如件、國宜承知、預侍不得闕怠、
官符進下、
嘉承二年十二月四日　右大史紀朝臣

中辨藤原朝臣
按、已上朝野群載に出る、
○六波羅施行案
異國降伏御祈事今月三日關東御敎書如此、任被仰下之旨、大和國之分而一宮并爲宗寺社、殊可抽之旨可被相觸、且每可月被執達卷數也、仍執達如件、
正應四年二月廿日　丹波守在判　越後守在判
加藤左衛門尉殿
按、東大寺寶藏にあり、
○霧生春日社上梁文
謹奉上棟鹿島大明神、于時享祿元戊午年十一月十六日
伊州阿我郡霧生村社僧坊營順拜書、
年預衆
長谷殿　上田殿　四郎兵衛殿　森地殿　岡山殿　孫四郎殿　西殿　十郎殿　吉井殿　大谷殿　福住殿　田中殿　松室殿
大工藤原左衛門、彌平、才次郎、茅大工才治郎、權大工加賀、
神主五郎太夫、
享祿二年三月二十九日柚取入目十石、造用入目二十石
番匠入用二十五石、檜皮八貫、釘四貫文、
按、霧生村春日祠に藏む、

三國地志卷之百十一　終【大尾】

三國地志　自卷之五十七　至卷之百十一　要目

卷之五十七伊賀國……一
建置沿革……一
卷之五十八伊賀國……一
州名……一
伊賀國……一
白鳥乃伊賀……一
郡名……一
阿拜郡……一
山田郡……一
伊賀郡……一
名張郡……一
疆域……一
官道……九
東國路……九
神宮道……九
京師道……九
江戶道……九
伊勢道……九
州城……九
上野大城……九
風俗……一〇
伊賀專女……一〇
祥異……一〇
租稅……一〇
卷之五十九伊賀國……一三
阿拜郡……一三
鄉名……一三
柘植……一三
河合……一三
夘代……一三
服部……一三
三田……一三
長田……一三
小田……一四
府中……一四
一宮……一四
北五箇……一四
鳥ヶ原……一四
壬生野……一四
音羽……一四
村里……一四
上野……一四
小田……一四
長田……一四
朝屋……一四
大野木……一五
島ヶ原……一五
千歲……一五
佐那具……一五
下柘植……一六
槇山……一六
東湯船……一六
卷之六十伊賀國……一七
阿拜郡……一七
神祠……一七
陽夫多神社……一七
宇都可神社……一七

波多岐神社……一八
須智荒木神社……一八
敢國神社……一八
佐々神社……二〇
穴石神社……二〇
眞木神社……二〇
小宮神社……二〇
卷之六十一伊賀國……二一
阿拜郡……二一
神祠……二一
天滿宮……二一
山神祠……二一
愛宕神……二一
藏王權現祠……二一
阿拜神祠……二一
平井天神……二一
岡八幡……二一
射手大明神……二二
高倉明神祠……二二
牛頭天王祠……二二
寄立明神……二二
春日社……二二
風神祠……二四
日置大明神……二五
雨龍明神……二五
鵜宮天神……二五
卷之六十二伊賀國……二六
阿拜郡……二六
山川……二六
阿閉山……二六
日爲拔穗之地……二六
法花山……二七
今井山……二七
阿蘇山……二七
篠嶽……二八
南宮山……二八
三蓋山……二九
柘植山……二九
倉曆山……二九
島ヶ原山……二九
伊賀山……二九
高畠山……二九
卷之六十三伊賀國……三一
阿拜郡……三一
山川……三二
賀茂川……三二
北川……三三
服部川……三三
新居川……三三
前川……三三
早雄川……三四
高畠川……三四
射手川……三四
井手木川……三四
四井手川……三四
印代川……三五
小宮川……三五
川合川……三五
音山川……三六
蛇喰池……三六
卷之六十四伊賀國……三七
阿拜郡……三七
山川……三七
等夜野……三七
柏野……三七
東野……三八
花園森……三八
松下森……三八
服部森……三九
黐森……三九
頭陁瀑……三九
淺子井……三九
卷之六十五伊賀國……四〇
阿拜郡……四〇
關梁……四〇
鳥箇原驛……四〇
上野驛……四〇
島ヶ原渡……四〇
亭舍……四〇
陵墓……四一
御墓山……四一
阿雅皇女墓類……四一
阿辨忌寸墓……四一
伊賀守朝光墓……四一
伊賀守宗光石塔……四一
粟生長慶軒石塔……四一
大和前司賴正石塔……四二
產死婦塚……四二
船戶石地藏……四三
池田忠知墓……四三
卷之六十六伊賀國……四三
阿拜郡……四三
梵刹……四三
上行寺……四三
山溪寺……四三
廣福寺……四三
萬福寺……四三
佛性寺……四四
常住寺……四四
西蓮寺……四四
龍王寺……四五
法花寺……四五
長樂寺……四五
菩提寺……四六
國分寺……四六
雲山寺……四六
玉瀧寺……四七
卷之六十七伊賀國……四八
阿拜郡……四八
古蹟……四八
舊府……四八
屯倉……四八
新家廢驛……四九
小鍛冶宗近宅址……四九
陶竈故址……四九
國府湊……四九
黑黨藪……五〇
平田戰場……五〇
一藪……五〇
三條宗近宅址……五〇
若林御園……五〇
加藤將監堡……五〇
今井氏堡……五二
仁木宅址……五二
木津越前堡……五二
伊賀見營址……五三
山尾堡……五三
廢補陀落寺……五三
廢國分寺……五三
安國寺……五四
廢十樂庵……五四
土產……五五
白梱實……五五
稻種……五五

製造附……五五
盞器……五五
氏族……五五
致朝臣……五五
服部氏……五五
栢植十郎有重……五六
伊賀家長……五六
河合安房守實之……五六
荒木又右衛門……五六
觀世清次……五七
流寓……五七
平宗清……五七
女流……五七
新家公福刀自……五七
僧侶……五七
圓覺……五七
卷之六十八伊賀國……五八
山田郡……五八
鄉名……五八
阿波……五八
馬野……五八
川原……五八
竹原……五八
阿野……五九
玉井……五九
川向……五九
村里……五九
千戶……五九
炊……五九
子日……五九
猿野……五九
廣瀨……五九
奥馬野……五九
神祠……六〇
鳥坂神社……六〇
阿波神社……六〇
葦神社……六〇
八幡祠……六〇
馬野神社……六〇
卷之六十九伊賀國……六一
山田郡……六一
山川……六一
阿牟乃嶽……六一
畑山……六一
澤田山……六一
山田山……六一
火燃山……六一
鳥坂山……六二
布曳山……六二
黑巖嶽……六二
那須原山……六二
雪下山……六二
東谷山……六二
笠登利山……六二
井堰山……六三
向山……六四
布引山……六四
大川……六五
上阿波溪……六五
爾保川……六五
馬野溪……六五
妹背川……六五
細谷川……六五
合戰川……六六
馬野大池……六六
玉井……六六

卷之七十伊賀國……六六
山田郡……六六
關梁……六六
平田驛……六六
平松驛……六六
陵墓……六六
經塚……六六
一品親王墓……六七
信太義廣墓……六七
妙覺荒墳……六八
山田惟之墓……六八
佐々木秀義……六八
樒塚……六八
梵刹……六八
生々光院……六八
地藏院……六九
高綱寺……七〇
永寶寺……七〇
卷之七十一伊賀國……七一
山田郡……七一
古蹟……七一
廢彥名社……七一
宅子父郡司某第址……七一
大友王城……七一
平田城……七一
箸尾氏……七一
植田氏堡……七一
澤氏堡……七二
穴師森……七二
黑山鷹小屋……七二
左妻岩窟……七三
廢國分尼寺……七三
廢安國寺……七三
廢念佛堂……七四
土產……七四
製造……七四
漬蕨……七四
紙粘……七四
氏族……七四
東橋東人……七四
上田小三郎伊行……七四
平田家次……七四
同貞純……七五
貞純法師……七五
流寓……七五
天皇大友……七五
女流……七五
宅子娘……七五
僧侶……七五
俊乘坊重源……七五
卷之七十二伊賀國……七六
伊賀郡……七六
鄉名……七六
依那具……七六
比土……七六
比自岐……七六
北山……七六
阿保……七六
古山……七六
豫野……七六
阿我……七六
猪田……七七
大內……七七
長田……七七
村里……七七
才良……七七
上神戶……七七

大内上荘……七七
古郡……七七
森……七七
種生……七八
神祠……七八
大村神社……七八
比自岐神社……七八
伊那古神社……七八
高瀬神社……七九
比地神社……七九
田守……七九
比々岐神社……七九
乎美禰……七九
猪田神社……七九
坂戸神社……八〇
天滿祠……八〇
若宮布留明神社……八〇
三十八所權現祠……八〇
辨天祠……八〇
中地明神……八一
天滿祠……八一
神明祠……八二
岡八幡祠……八二

卷之七十三伊賀國……八二

伊賀郡……八三
山川……八三
和歌山……八三
大山嶽……八三
中井山……八四
坂戸山……八五

卷之七十四伊賀國……八六

伊賀郡……八六
山川……八六
天眞名井……八六
血首井……八六
大溪……八六

卷之七十五伊賀國……八八

伊賀郡……八八
關梁……八八
阿保驛……八八
陵墓……八八
衆好法師墓……八八
兒塚……八八
經塚……八九
梵刹……九〇
仲福寺……九〇
西念寺……九〇
寶嚴寺……九一
草蒿寺……九一
極樂寺……九一
蓮德寺……九二

卷之七十六伊賀國……九三

伊賀郡……九三
古蹟上……九三
息速別命宮室……九三
天武帝行宮……九三
安保頓宮……九三
河口道行宮……九三
藤原千方戰場……九三
大内惟義館……九四
花垣庄……九四
淡禮園社……九五
垂園社……九六

卷之七十七伊賀國……九七

伊賀郡……九七
古蹟下……九七

丸山城……九七
岩脇……九八
暗峠……九八
井乃院……九九
西法寺……九九
觀音寺……一〇〇
阿我山八坊……一〇〇
廢長福寺……一〇〇
土産……一〇〇
螺脂石……一〇一
氏族……一〇一
伊賀臣……一〇一
阿保公……一〇一
僧侶……一〇一
行然……一〇一

卷之七十八伊賀國……一〇二

名張郡……一〇二
保塞……一〇二
名張第……一〇二
鄉名……一〇二
築瀨……一〇二
夏見……一〇二
村里……一〇三
築瀨……一〇三
八幡……一〇三
矢川……一〇三

卷之七十九伊賀國……一〇四

名張郡……一〇四
神祠……一〇四
名居神社……一〇四
宇流富志禰神社……一〇五
市守宮……一〇五
中山春日社……一〇五
十二社權現……一〇五
春日社……一〇五
沼木宮……一〇五

卷之八十伊賀國……一〇五

名張郡……一〇五
山川……一〇五
八幡山……一〇九
高座山……一〇九
鳥居小野……一一〇
阿彌澤布……一一一
築瀨河……一一一
西川……一一一
名張橫川……一一一
絲川……一一一
一瀨川……一一二
大川……一一二

卷之八十一伊賀國……一一三

名張郡……一一三
關梁……一一三
名張驛……一一三
池禪尼石塔……一一三
猪俣小平次墓……一一三
梵刹……一一四
無動寺……一一四
伽藍神……一一四
丈六寺……一一四

卷之八十二伊賀國……一一五

名張郡……一一五
古蹟……一一五
神戶……一一五
齋宮歸京橋……一一六
栗林……一一六
勘解由長官宅址……一一六

廢行功寺……一二七
塞田廢里……一二七
廢妙樂寺……一二八
土產……一二八
淡鹽魚……一二八
奈良柿……一二八
蕨芽……一二八
製造……一二八
茶……一二八
氏族……一二八
三野之稻置……一二八
名張……一二八
中臣殖栗連……一二八
伊賀朝臣春野……一二九
名張八郎……一二九
女流……一二九
伊賀道虫女……一二九
僧侶……一二九
妙澤……一二九

卷之八十三志摩國……一二九

建置沿革……一二九
國名……一二九
國造、國守……一二九
屬官……一三〇
伴良雄……一三〇
島田波守……一三〇
石川九郎……一三〇
官符差除……一三〇
朝集使……一三〇
博士、醫師……一三一
召使……一三一
健兒……一三一
州名……一三一
志摩國……一三一
豐志萬魚足國……一三一
御食國志摩……一三一
郡名……一三二
答志郡……一三二
英虞郡……一三二
佐藝郡……一三二
彊域……一三二
間道……一三二
丘越……一三二
航路……一三三

卷之八十四志摩國……一三三

州城……一三三
鳥羽府城……一三三
風俗……一三三
祥靈……一三三
租稅……一三三
正稅……一三三
公廨……一三三
租稅附……一三五
國司職田……一三五
封戶……一三五
射田……一三五
口分田……一三六
不堪佃田……一三六
御贄……一三六
調庸雜物……一三六
諸魚、諸菜……一三六
器伏……一三六
交易雜器……一三六
驛馬……一三六

卷之八十五志摩國……一三七

答志郡……一三七

鄉名……一三七
答志……一三七
和具……一三七
伊可……一三七
伊椎……一三七
驛家……一三七
神戶……一三七
伊佐鄉……一三八
田輿家古鄉……一三八
鷹縣鄉……一三八
村里……一三八
鳥羽町……一三八
小濱……一三八
答志……一三八
神島……一三八
菅島……一三九
坂手……一三九
安樂島……一三九
白木……一三九
五智……一三九
國府……一三九
安乘……一三九
國崎……一三九
石鏡……一三九

卷之八十六志摩國……一三九

答志郡……一三九
神祠……一三九
伊射波神社……一三九
大歲社……一三九
鰐鼈神社……一三九
八王子祠……一三九
赤崎明神社……一三九
惣領權現祠……一三九
眞熊野神社……一三九
加布良胡明神社……一三九
飽石神……一三九
飛鳥明神祠……一三九
答志郡……一三九
山川……一三九
日和見山……一三九
筧山……一三九
苧生山……一三九
綱兒之山……一三九
浮島山……一三九
逢坂……一三九
苧生野……一三九
大井……一三九
麻生海……一三九
篠間……一三九
鳥羽浦……一三九
淡海浦……一三九
伊氣浦……一三九
高濱……一三九
千尋濱……一三九
志加濱……一四〇
岩崎……一四〇
磯等崎……一四〇
鳥崎……一四〇
贄魚島……一四〇
鷲島……一四一
阿波良伎島……一四一

卷之八十七志摩國……一四一

答志郡……一四一
關梁……一四二
相橋……一四二
陵墓……一四二
連理墳……一四二

梵刹……一四三
常安寺……一四三
長福寺……一四三
庫藏寺……一四三
正福寺……一四三
國分寺……一四三
西明寺……一四三
觀音寺……一四四
古蹟……一四四
鈴木藪……一四四
龍燈松……一四四
面白松……一四五
相差堡……一四五
土產……一四五
苧生浦梨……一四五
櫻麻……一四六
鰒魚……一四七
鰒……一四八
松藻……一四八
珍男玉……一四八
製造附……一四八
茶……一四八
鰒膠漬……一四八

卷之八十九志摩國……一四九

英虞郡……一四九
鄉名……一四九
道潟……一四九
二色……一四九
村里……一四九
鵜方……一四九
迫子……一四九
南張……一四九
越賀……一四九
舟越……一四九
波切……一四九
神祠……一四九
宮澤神社……一五〇
東宮神社……一五〇
山川……一五〇
白濱……一五一
阿見浦……一五一
錦浦……一五一
柚師浦……一五一
土具島……一五二
慶昌庵……一五二

卷之九十志摩國……一五三

英虞郡……一五三
古蹟……一五三
阿胡行宮……一五三
邊嚴窟……一五三
西行窟……一五四
千田……一五四
廢吉津院……一五四
甲賀堡……一五四
船上廢里……一五四
廢吉津御厨……一五四
土產……一五四
御綱葉……一五四
鰒魚……一五六
鰹……一五六
眞珠貝……一五七
製造附……一五七

卷之九十一志摩國……一五八

英虞郡……一五八
氏族……一五八
安曇宿禰……一五八

高橋朝臣……一五八
多治比志摩眞人……一五八
多治比縣守……一五八
多治比池守……一五九
多治比廣成……一五九
多治比廣足……一五九
多治比長野……一五九
的屋美作守……一五九
女流……一五九
家原音那連……一五九
流寓……一五九
義良親王……一五九

卷之九十二伊勢國……一六一

公案……一六一
八幡神宮之……一六一
八幡神社……一六一
八幡宮社領事……一六一
塔世四天王寺所藏……一六二
古川正覺寺所藏……一六二
賜津町免書……一六二
賜八幡町免書……一六二
久保村觀慶寺所藏……一六二

中萬村一乘寺所藏……一六三
香良門社造營料寄附書……一六三
兩機殿寄附書……一六三
外宮神納寄附狀……一六四
內宮御供米寄附狀……一六四
賜田丸故城番案……一六四
津鎭工所藏之案……一六四

卷之九十三伊勢國……一六六

舊案……一六六
桑名郡……一六六
木多忠政舊案……一六六
建武三年院宣……一六六
永正廳宣……一六六
春宮權大進舊案……一六六
文龜元年觀進狀……一六六
永祿十年禁制書……一六六
織田信長制札……一六六
織田信雄舊案……一六六
足利義敎舊案……一六六
北畠具敎舊案……一六六
蒲生氏鄉舊案……一六六
古田家舊案……一六六
羽柴秀吉制書……一六六
岡本良勝舊案……一六六
本多俊次舊案……一六六
本多俊次舊案……一六六
正元元年舊案……一六六
貞和四年古文書……一六六
本多俊次舊案……一六六
石川昌勝舊案……一六六
板倉重常舊案……一六六
關宗一關一豐舊案……一六六
織田民部舊案……一六六

卷之九十四伊勢國……一六八

菴藝郡……一六八
舊案……一六八
度會神主貞松舊案……一六八
足利義持舊案……一六八
足利義政舊案……一六八
尼覺信舊案……一六八
覺如舊案……一六八
慶純舊案……一六八
御土御門帝綸旨……一六八

豐太閤制敎……一八〇
某舊案……一八〇
貞興文書……一八〇
生駒家舊案……一八〇
足利義滿舊案……一八一
嘉承二年稻生社下文……一八一
荒木田神主舊案……一八二
和州阿倍崇敎寺舊牒……一八二
乙部藤政舊案……一八三
度會常農帝附書……一八四
富田知信舊案……一八五
木造大膳舊案……一八五
濕淵明神上梁文……一八五
狩野永眞舊記……一八七

卷之九十五伊勢國……一八九

飯野郡……一八九
舊案……一八九
國司北畠家舊案……一八九
度會郡……一九二
錦末國舊案……一九二
沙彌心覺舊案……一九二
其文下……一九三
仁平元年舊案……一九四
常明寺僧舊案……一九四
度會永定讓文……一九四
藤原盛宗舊案……一九五
宇治末常舊案……一九五
神麻續氏舊案……一九五
僧帳慶券文……一九六
延應元年券文……一九六
僧定惠券文……一九六
正安二年舊文……一九七
大內人弘清舊案……一九七
建武年間綸旨……一九七
明德三年……一九八
長松丸舊案……一九八
豐太閤舊案……一九九
傳奏柳原家副翰……一九九

卷之九十六伊賀國……一九九

未勘……一九九
神祇……一九九
火電神……一九九
贄乃波神……一九九
山川……一九九
阿會山……一九九
福山……一九九
畫生庄(村名)……二〇〇
招坂……二〇〇
針川……二〇〇
濯河……二〇〇
宮野……二〇〇
薄野……二〇〇
梵刹……二〇〇
正法寺……二〇〇
神應寺……二〇〇
正興寺……二〇〇
定額寺……二〇〇
土產……二〇一
朱砂……二〇一
牧駒犢……二〇一
白茅鴉……二〇一
櫻貝……二〇一
小貝……二〇一
馬蛤……二〇一
製造……二〇一
眞床覆衾……二〇一
馬革……二〇一

氏族……二〇二
品遲部君……二〇二
物部伊勢連文……二〇二
東國因以賜衣袴……二〇三
金作部安得……二〇三
橫田十郎兵衛……二〇三
女流……二〇三
伊勢大津女……二〇三
僧侶……二〇四
敎圓……二〇四
明全……二〇四
平源……二〇四
長甫……二〇四

卷之九十七志摩國……二〇五

舊案……二〇五
御小松帝院宣……二〇五
神宮古記錄……二〇五
簡……二〇五
未勘……二〇五
阿古根浦……二〇七
辨疑……二〇七
伊良虞島……二〇七
長濱……二〇八

卷之九十八伊賀國……二〇九

公案……二〇九
一宮所藏……二〇九
上野天神宮所藏……二一〇
上野大福寺所藏……二一〇
上行寺所藏……二一〇
山溪寺所藏……二一一
淺宇田八幡宮所藏……二一一
常住寺所藏……二一二
寨松廟賜長田西蓮寺制書……二一二
坂之下村上寺所藏……二一三
富永村新大佛寺所藏……二一三
上柘植村永德寺所藏……二一四
下柘植村三社明神所藏……二一四
古郡村常福寺所藏……二一五
赤目瀧延壽院所藏……二一五
諸買賣並畠新關免書……二一六
東大寺封戶調庸雜物案……二一六
喜保元年宣旨……二一六
天養元年官符……二一六
柘植川合檢田目錄……二一七
治承四年長者宣……二一七
伊豫守泰經案……二一八
寬治六年名張郡司案……二一八
平政氏案……二一八
建武元年案……二一九
貞和四年東大寺衆議案……二一九
藤原信良言上狀……二二五
東大寺封戶調庸雜物案……二二五
喜保元年宣旨……二二六
天養元年官符……二二六
柘植川合檢田目錄……二二七
治承四年長者宣……二二七
伊豫守泰經案……二二八
寬治六年名張郡司案……二二八
平政氏案……二二八
建武元年案……二二九
貞和四年東大寺衆議案……二二九

卷之百伊賀國……二三〇

舊案……二三〇
正應元年案……二三〇
曆應三年馬野雜掌案……二三一
曆應三年庄々注進書……二三二
治承五年注進書……二三二
東大寺年預五師房附狀……二三三
東大寺宿老列參事書……二三三
某至尊綸旨……二三四
天延二年東大寺衆徒奏書……二三四
長部延利言上狀……二三五

官使下文……二三五
瀨村……二三五
東大寺三綱解狀(正治二年)……二三五
藤原某寄附書……二三七
左近將監長時附狀……二三七
八幡宮神人附狀……二三七
年預五師附狀……二三八
阿波莊最勝講供料房……二三八
曆應二年東大寺領伊賀國庄々注文……二三九
東大寺古文書記錄所目錄……二三九

卷之百一伊賀國……二四一

舊案……二四一
阿拜郡……二四一
天平勝寶元年券文……二四一
同券文……二四一
天平寶字二年券文……二四二
天平神護二年田簿……二四二
天德三年官牒……二四四
天德三年官符……二四六
天祿二年湯船庄券案……二四六
永保三年廳宣……二四七
萬壽二年湯船莊案……二四七
天喜四年玉瀧杣解狀……二四七
天喜六年玉瀧杣司解狀……二四八
延久元年廳宣……二四八
平忠盛案……二四八
從備前守之許送寺家解狀……二五〇
年預五師附狀……二五〇
阿波莊最勝講供料房……二五〇
曆應二年東大寺領伊賀國庄々注文……二五〇
東大寺古文書記錄所目錄……二五一
永保三年廳宣……二五一

卷之百二伊賀國……二五五

舊案……二五五
阿拜郡……二五五
永久三年長者宣旨……二五五
永久三年注進文……二五五
永久四年公驗正文案……二五六
平忠盛下文……二五六
同下文三通……二五六
造內裏勤仕案……二五六
造大神宮作料米案……二五六
源惟義下文……二五六
右大將賴朝下文……二五七
同案二通……二五七
東大寺寺領正文目錄……二五七
建仁元年東大寺正文目錄副軸……二五八
同正文目錄……二五八
五箇所定神人案……二五八
東大寺八幡宮神人注進文……二五八

卷之百三伊賀國……二五八

舊案……二五八
阿拜郡　附山田郡……二五八
權僧正顯覺案……二五八
千葉介胤宗禁斷狀……二五八
沙彌大圓案……二五九
元德三年案……二五九
足利直義案……二五九
高師直案……二五九
伊賀國樂音寺緣起……二五九
一宮黑黨次第案……二六〇
黑田新莊代官職請狀……二六一
天正元年佐々木承禎案……二六二
佐々木義治案……二六二
箇井氏案……二六二

卷之百四伊賀國……二六三

名張郡……二六三
舊案……二六三
大神宮御領舊案……二六三
應和二年應進帳……二六五

名張郡司請文……二六五
和州山邊郡刀禰等券文……二六六
板繩柚四至絁綾狀……二六六
同四至告狀……二六七
夏見鄉刀彌等請文……二六七
右衞門督朝成所領田公驗……二六八
夏見鄉刀彌勘文……二七〇

卷之百五伊賀國……二七一

名張郡……二七一
舊案……二七一
長保元年東大寺別當文書……二七一
同請文……二七一
名張郡司券文……二七二
萬壽三年僧眞範文書……二七二
黑田莊出作領主左馬允實遠……二七二
同請文……二七二
天喜元年宣旨……二七三
天喜二年東大寺衆徒言上狀……二七四
天喜二年宣旨……二七五
天喜三年廳宣……二七五
天喜四年廳宣……二七六
天喜四年案……二七六
天喜六年廳宣……二七七

卷之百六伊賀國……二七七

舊案……二七七
名張郡……二七七
治曆二年東大寺房官下文……二七七
同三年券分……二七七
當麻氏所領券文……二七七
承保二年中村矢川國領注文……二七九
承保二年廳宣……二七九
承曆三年藤原保房處分案……二七九
應德元年矢河中村四至案……二七九
應德三年廳宣……二七九
寬治元年廳宣……二八〇
寬治二年廳宣……二八〇
同年定使先國請案……二八〇
同年廳宣……二八一
寬治七年宣旨……二八一
同八年小槻祐俊案……二八四
同八年廳宣……二八四
同年伊賀守某案……二八四
同下文……二八四
長承二年僧源祐券文……二八五
天承二年官符……二八五
長承三年新莊取簿……二八五
舊案……二八五
名張郡……二八五
康和元年請凶徒誅伐案……二八五
同二年宣旨……二八五
康和四年廳宣……二八五
長治元年下文……二八五
黑田鄉柚工請文……二八六
天仁三年宣旨……二八六
永久二年宣旨……二八六
永久二年廳宣……二八七
永久三年下文……二八七
同黑田柚工請文……二八八
大治元年廳宣……二八八
同二年廳宣……二八八
大治四年下文……二八八
大治五年河成四至文書……二八九
天承元年廳宣……二八九
長承二年僧源祐券文……二九〇
天承二年官符……二九〇
長承三年新莊取簿……二九〇
舊案……二九五

卷之百七伊賀國……二九五

名張郡……二九五
永暦二年黑田庄出作田案……二九五
簗瀨莊官物濟否文……二九六
同三年文……二九七
承安四年大内役免除文……二九七
承安四年廳宣……二九七
東大寺學生供料案……二九八
安元元年廳宣……二九九
興福寺政所下文……二九九
東大寺衆徒愁狀……二九九
養和元年黑田新庄田數四至案……三〇一
養和元年院宣……三〇一
正治元年案……三〇一

卷之百九伊賀國……三〇三

舊案……三〇三
名張郡……三〇三
東大寺所司問注……三〇三
養和元年院宣……三〇九
養和元年院廳御下文……三〇九
壽永二年武家下文……三一〇
承久三年武家教書……三一〇
正治元年長者宣……三一〇
建仁元年公驗……三一〇
元久二年寄附狀……三一一
東大寺年預下文……三一二
同進文……三一二

卷之百十伊賀國……三一三

舊案……三一三
名張郡……三一三
嘉祿元年六波羅教書……三一三
寬元三年黑田莊百姓愁狀……三一三
權大僧都定親寄文……三一三
僧宗圓私領寄進文……三一四
沙彌西佛私領券文……三一四
六ヶ山安倍家景言上狀……三一四
大江清光私領券文……三一五
黑田莊作主職請文……三一五
服部保忠狀……三一五
黑田莊百姓言上狀……三一五
延慶四年預五師下文……三一六
應長元年預五師下文……三一六
同二年衆徒申文……三一七
元亨四年六波羅教書……三一七
同四年某範綱案……三一七
同某時信案……三一八
平常茂請文……三一八
嘉祿二年惡徒交名注進文……三一八
嘉暦二年六波羅教書……三一九
嘉暦二年使僧持法請文……三一九
同書翰……三二〇
嘉暦二年衆議書……三二〇
黑田莊服部道一言上狀……三二一

卷之百十一伊賀國……三二二

舊案……三二二
名張郡……三二二
沙彌覺性言上狀……三二二
黑田一族俣野中務大夫訴狀……三二二
建武二年衆徒申文……三二二
有原守康申文……三二三
暦應三年黑田莊惡黨交名注文……三二三
延文元年武家教書……三二三
應安二年某章貞案……三二四
應永五年寺務領案……三二四
東大寺八幡宮領起請文……三二四
箸尾春代丸申狀……三二五
吐田遠厚申狀……三二六

飯高鬼若丸申狀……三二六
某實顯申狀……三二六
越知永遠申狀……三二六
飯尾大和守殿　進上……三二六
下山宗舊案……三二六
慶長舊案……三二七
永祿舊案……三二七
織田信雄其舊案……三二七
松藏九一郎舊案……三二七
承平二年宣旨……三二七
長治二年官宣……三二七
嘉承二年官符……三二八
左辨官下　伊賀……三二八
六波羅施行案……三二八
霧生春日社上梁文……三二八

三國地志要目 終

版權所有

昭和七年五月十日印刷
昭和七年五月十五日發行

大日本地誌大系　三國地志下

非賣品

編輯者　蘆田伊人

發行者　東京市麹町區飯田町六ノ二三　長坂金雄

印刷者　東京府戸塚町下戸塚一三　上田榮吉

發行所　東京市麹町區飯田町六ノ二三　雄山閣
振替東京二四二二七番
電話九段二三一四番

東京（泰文堂印刷所）下戸塚

豫約發行權威叢書

異說日本史

全十二冊菊判總クロース裝・箱入美本各冊約四百頁定價每月拂二圓宛（送料十四錢）申込金二圓（最終配本に充當）一時拂二十三圓（送料一圓六十八錢）

本多博士他廿二氏執筆

四六判上製箱入・全廿四冊一時拂三十圓（送一・九二）一冊二圓（送料・八）

日本風俗史講座

上製全十二冊揃定價六十二圓（送料一揃一圓七十錢）並製全廿八冊揃定價五十五圓（送料一冊十四錢）菊判總紙數九千頁・並製は分賣す

高橋博士他廿一氏執筆

並製合本廿五冊一時拂五十二圓上製合本十二冊一時拂五十五圓（全送料一圓六十二錢）

日本繪卷物集成

田中一松解說

全三十冊木版刷表紙美裝・四六倍判各巻三色版數葉一色版約九十頁・解說及詞書付一冊三圓（送料・一四）全巻四十圓（送料一・八二）

日本名筆全集

全十五冊菊倍判・別漉本場鳥の子紙使用・全部コロタイプ刷・解說付・申込金二圓一冊二圓（送料・十四錢）一時拂三十圓（送一・二〇）

大日本地誌大系

蘆田伊人編輯校訂

全卅六冊菊判四百頁內外背皮箱入・一時拂百圓每月拂三圓（送料廿二錢）

東洋藝術史講座

笹川博士他十六氏執筆

全十二冊・申込金二圓五十錢每月拂二圓五十錢（送料廿二錢）一時拂二十八圓（送料二・六四）

造園叢書

本多博士他廿二氏執筆

四六判上製箱入・全廿四冊一時拂三十圓（送一・九二）一冊二圓（送料・八）

考古學講座

高橋博士他廿一氏執筆

並製合本廿五冊一時拂五十二圓上製合本十二冊一時拂五十五圓（全送料一圓六十二錢）

赤穗義士史料

渡邊世祐博士校訂

全三冊菊判・千六百頁・洋裝箱入定價一冊四圓宛（送料一冊廿二錢宛）全卷校訂者解題頭註付

鄉土史研究講座

渡邊博士他四十五氏執筆

全十二冊菊判・申込金一圓廿錢每月拂一圓二十錢（送料一冊八錢）一時拂十四圓（全送料九十六錢）

優生學講座

永井博士他廿三氏執筆

全十八冊・菊判・上製箱入每月拂二圓申込金二圓一時拂卅五圓（送料一冊十四錢）

書道講座

尾上博士他十三氏揮毫

全二十六冊・菊倍判別漉鳥子紙每冊約百二十頁・參考及解說付一冊二圓（送料十四錢）

呈進本見

東京市麹町區飯田町六ノ二三
振替口座東京二四二七番

雄山閣

593
8